



SENDAI
UNIVERSITY

50周年記念シンボルマーク

SPORTS FOR ALL ～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

Monthly Report

SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.132 / 2017 APR.

(月1回発行)

670名の新入生を迎え入学式を挙行



入学生を代表して阿部学長に宣誓する加藤彩音さん

4月5日(水)10時より、本学第五体育館を会場に「平成29年度仙台大学体育学部入学式・大学院入学式」が挙行され、体育学部学生649名、大学院生21名、合計670名が本学への入学を許可されました。学長告辞で阿部芳吉学長は「ご入学誠にありがとうございます。仙台大学には、昨年の全日本スケルトン大会で見事優勝した宮嶋選手や、ボートのエイトで優勝したクルーなど2020年東京五輪までの成果が非常に楽しみな学生達がたくさんいます。野球、サッカー、バスケットなどに一生懸命打ち込みながら、先輩たちは人間性を磨いています。新入生のみなさんは、胸に秘める期待を自分の力で大きく育て仙台大学でぜひ、豊かな大学生活をおくってください。」と新入生を激励しました。

理事長挨拶では朴澤泰治理事長・学事顧問が「同一世代で実りある交流を実現し、仙台大学で豊かな大学生活を実現してほしいと思います。1967年の開学から今年で開学50年。『大学づくりを共に』をキーワードに、開学100年という大きな節目に向けて一緒に仙台大学を創っていきましょう。」と挨拶されました。

また、入学生宣誓では、体育学科に入学した加藤彩音(かとう・さやね)さん(秋田県・秋田北高校出身)が「これからの時代の担い手となるよう、努力して参ります。また、私たちが4年生の時には、東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。体育大学の一員として何らかの形で参画できるよう、学びを通して自己研鑽に励んで参ります。」と力強く宣誓しました。

入学式後には学科別懇談会で担当教員の紹介や学科の取り組みなども紹介され、入学生は一様に、今後4年間の大学生生活に胸を膨らませている様子でした。

新入生は翌6日(木)から2日間のオリエンテーションを経て、本格的な大学生活をスタートさせました。

〈目次〉

670名の新入生を迎え入学式を挙行	1
大好評!東北六県弁当 大学院新生歓迎会	2
パラオ共和国政府関係者来学	3
開学50周年記念行事① イタリア柔道チームAISEが来学	4
フットサル部 小野寺那央選手 ヴォスクオーレ仙台とプロ契約	5
職業実践力育成プログラム 開講式	
運動栄養サポーター認定証授与式 体育施設管理士認定証授与式	6
鈴木省三統括副学長が 仙台東ロータリークラブで講演	7
仙台六大学野球リーグ戦 初優勝の盾が36年ぶりに仙台大へ	8
留学生歓迎お花見会を開催	
香港野球代表チームにAT部トレーナーが帯同	9
親睦会歓送迎会開催 他	10
新任教職員のご紹介	11-13

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp



大好評！新入生歓迎 東北六県弁当

4月8日に举行された入学式で、新入生や保護者、教職員へ毎年恒例となっているオリジナル弁当の配布が今年も行われました。

今年のお弁当は「東北六県弁当」と名付けられ、メニュー作成の陰には運動栄養学科3年の後藤樹生さん（青森県・東奥義塾高校出身）と神恭平さん（青森県・弘前南高校卒）2名の人知れずの苦勞がありました。

「新入生やその保護者の皆さんに東北六県の名物料理を食べてもらいたい。」という思いでレシピ考案がスタート。誰でも知っている名物料理だけではなく、いわゆるB級グルメや作り方に特徴がある料理も取り入れました。

苦勞した点は材料費を予算内に収まるレシピを考えることやお弁当の色合い、栄養バランスを考えることだったといいます。

特に色合いを考える際には、メニューの中にある「揚げ出し豆腐山形だしかけ」の調味料をめんつゆから白醤油に代えることで、全体的に茶色のメニューが多いお弁当に明るさを添える工夫もしたそうです。

また、お弁当と一緒に配布されたリーフレットの作成時には、運動栄養学科の講義の中で学んだ知識や、論文なども参考にしながら一つ一つの料理についての特徴や栄養価などが分かりやすく紹介されています。

今回のオリジナル弁当の作成に携わったことについて後藤さんは「食べていただいた多くの皆さんからお褒めの言葉をもらえてうれしかったです。」と話してくれました。また、神さんも「おいしかったと多くの人に声をかけてもらいました。今回の経験は今後、給食実習などでメニューを考えるときに役立つと思います。」と充実した表情で語ってくれました。



お弁当のメニューを考案した神さん（左）と後藤さん

大学院新入生歓迎会を開催

4月5日（水）に举行された入学式終了後、学生食堂なちゅらを会場に「平成29年度仙台大学大学院新入生歓迎会」が開催され、大学院生や教職員約50名が参加しました。

歓迎会で阿部芳吉学長は「常識にとらわれることなく、学部生活の4年間で得た見識を基に、思考の回線を増やしながらか研究に励み豊かな大学院生活を送ってください。」と挨拶されました。

会の中では新入生がそれぞれ研究したいテーマや大学院生活にかける意気込み等をお話の他、在学生の紹介、大学院担当教員の紹介なども行われ、終始和やかな雰囲気でした。

この歓迎会は毎年開催されており、大学院生同士や教職員との懇親の場ともなっています。今年度入学した新入生だけでなく、在生も含めて、素晴らしい研究がなされることでしょう。



参加者での記念写真

パラオ共和国政府関係者が来学

—東京オリンピック・パラリンピック事前合宿地視察—

4月20日（木）、パラオ共和国の社会文化大臣 兼 オリンピック委員会事務局長のバクライ・テニメルさんはじめパラオ政府関係者5名と、パラオ共和国のホストタウン※1登録をした蔵王町の村上英人町長はじめ蔵王町関係者5名の計10名が仙台大学を訪問されました。

一行は2020東京オリパラ事前合宿時の練習施設を探しており、今回の訪日で、角田市、白石市、そして仙台大学を視察し、今後、練習施設の絞り込みを行う予定です。あいにく今回の滞在期間が極めて短く、本学の滞在時間も2時間弱のため、見学いただく施設も、C棟3階の人工気象室と低酸素環境室、第3体育館のトレーニングセンター及び柔道場、第4体育館のアスレティックトレーニングルームのみの限定的な見学ツアーとなりましたが、整った本学施設をご見学頂き、有望な候補地の一つになったものと思います。



事前合宿の実現に向けて本学を訪問したパラオ共和国関係者ら

※1：ホストタウンとは。

2020東京オリパラに向け、スポーツ立国、グローバル化の推進、地域の活性化、観光振興等に資する観点から、参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図る地方公共団体を「ホストタウン」として全国各地に広げるもの。オリンピックとの交流を通じてスポーツのすばらしさを学ぶ、文化交流を通じ相手国の理解と日本のすばらしさを伝える、等を目的としている。パラオは、第1次世界大戦後、日本の委任統治領となり、多くの日本人が移住した。第2次世界大戦後は、パラオで終戦を迎えた方々が蔵王町遠刈田温泉地域に開墾入植し、“北原尾地区”（北のパラオとの意）と命名している。蔵王町とパラオ共和国は、このような歴史的経緯から戦後も交流をしており、今回のホストタウン登録に至った。尚、同経緯で茨城県常陸大宮市もパラオとのホストタウン登録をしており、今回の訪日でパラオ・蔵王町・常陸大宮市の3者で東京オリパラ事前合宿招致の基本合意書締結を行う。

※：パラオ共和国と本学との関係について。

本学とパラオ共和国とは、10年ほど前に介護予防事業の一環として本学教職員と学生をパラオ共和国に派遣し健康運動指導を行っており、良好な関係を築いている。

【報告：スポーツ健康科学実践機構事務室 近江康宏】

「第8回 元気！健康！フェアinとうほく」での健康運動指導

4月1日（土）、2日（日）に仙台国際センターを会場に「元気！健康！フェアinとうほく」（主催：東北大学、河北新報社、東北放送/共催：仙台大学 他）が開催され、本学から、笠原岳人准教授による「筋肉に引退なし！百歳まで歩くための筋肉づくり」と題した講演に、齋藤まり新助手が「元気体操の楽しみ方」の実演指導に、それぞれ講師として参加しました。

同フェアは、東北大学を中心とした講師陣が最新・最先端の健康情報について幅広い視点で地域住民に紹介する目的で実施されており、今年で9回目の実施となりました。仙台市営地下鉄東西線が開業し会場へのアクセスの利便性が向上したこともあり、昨年度から更に来場者が増え今年も来場者記録を更新し過去最高の9,000名と多くの方々が来場されたよう



参加者と楽しく元気体操を行う齋藤新助手

です。講演終了後に参加者とお話をする中で、同フェアのような有識者が一堂に会するイベントを地域の皆さんはとても楽しみにしていると感じました。本学としても、多くの地域住民が積極的に健康づくりに取り組んでいただけるよう、継続し協力していきたいです。

【報告：新助手 齋藤まり】

開学50周年記念その①

イタリア柔道教育協会AISEが来訪 ～被災地からの御礼を込めて～



4月17日～19日にかけて、イタリア教育協会AISE（以下AISE）に通うイタリアの柔道チームが本学へ初来訪しました。AISEと仙台大学柔道部のつながりは東日本大震災以降6年に亘ります。

東日本大震災で甚大な被害を受けたことに心を痛めたAISEのチェザーレ・バリオーリ氏が、被災地の未来ある柔道家を励ますためイタリアへ招きたいと女子柔道五輪2連覇の谷本歩実さんを通じ連絡があり、かねてより谷本氏と交流のある本学女子柔道部の南條和恵監督にお話を頂いたのを機に、本学の柔道部学生が無償でAISEの約2週間の合宿へと招待を受けてきました。バリオーリ氏は震災の翌年急逝されましたが、嘉納治五郎先生の「自他共栄」の教えをイタリアで実践してきた氏の遺志を、奥様のイヴァーナさんが受け継ぐ形で合宿の機会を毎年継続され現在に至ります。

今回初めて本学を訪れたイヴァーナさんは「若い世代の柔道を通じた交流を行うため来日しました。仙台大学に来ることができてとても嬉しいです。南條充寿監督と和恵監督から技をかける際のエネルギーの使い方を丁寧に教えていただき、今後の指導の上でとても参考になりました。」と話されました。

南條和恵監督は「柔道を通じた恩返しが出来て嬉しいです。AISEの皆さんの全力で吸収しようとする素直な姿勢、立ち振る舞いに感心しました。教育の行き届いた素晴らしい柔道家たちです。本学の学生たちも日本の柔道家として「誇り」を持ち日々謙虚な姿勢で取り組むことの大切さを改めて学んでほしいと思います」と話し、リオ五輪全日本女子柔道監督を務めた南條充寿監督は「彼らの柔道に敬意をもち学ぶ

姿勢は、強化のために効率を求める日本柔道が忘れてはいけない講道館柔道の本質を改めて見直す機会ともなりました。」と話します。この2泊3日のすべての行程には、AISEの研修へ平成25年度に参加し、その後も自費でAISEの合宿に参加している卒業生の大枝郁美さん(榊千葉薬品所属)も仕事の休みを取って駆けつけ「AISEの皆さんと大学で再会出来たことはとても嬉しいです。現役続行をしようと思えたのはAISEでの研修の経験が大きく、今後はイタリアで柔道を教える立場として関わられるように研鑽を積みしたいと思います。」と今後の目指す道について熱く話してくれました。

2日目の午後には関東地区を視察し、被災地を訪れたAISEのAndorlini Tommasoさん(大学2年)は「一つの側面から見ると、とても悲しく痛む大災害ではありませんが、皆で助け合いながら新しく良い方向に進化していると感じました」と実際に観た被災地の様子を言葉を選びながら話し、被災地域へ寄り添う気持ちが伝わりました。

2泊3日の短い期間でしたが、早朝トレーニングから、仙台大学柔道塾の子どもたちと共に、夜遅くまで稽古するなど内容の濃い充実した合宿となったようです。



一行は名取市岡上沿岸地区と仙台空港の現在を視察



南條和恵監督から贈られた黒帯には「伊花」の刺繍(左がイヴァーナさん)



(写真上) 2011年にAISEでお世話になった勅使瓦蔵さん(現在JICA勤務)のお母様から「お守りと折鶴」が贈られた

(写真下) 仙台大学柔道塾ではイタリア語で1(uno, ウーノ) 2(duo, ドゥーエ) 3(tre, トレ) と声を掛けあい稽古

小野寺那央選手がヴォスクオーレ仙台(Fリーグ)とプロ契約を締結

本学のフットサル部に所属する小野寺那央選手（おのでら・なお 体育学部体育学科4年一岩手・盛岡中央高校出身）がFリーグのヴォスクオーレ仙台と本契約を締結しました。今シーズンは本学に在籍しながらFリーグのプロ選手として試合に出場することになります。

4月24日（月）にはヴォスクオーレ仙台の坂本理（さとる）社長と共に阿部芳吉学長を表敬訪問。小野寺選手は「プロ選手になれば、これまで以上にたくさんの人から応援していただけたらと思うので、一生懸命に取り組んでいきたい。現在はチームの戦術を身に付けることに苦勞しているが、少しでも早くチームのために活躍したい。」と今後の抱負を力強く語ってくれました。

小野寺選手は2年生の時からFリーグでの活躍を目標にして日々のトレーニングに励んできたそうで、その努力が結実し今回の契約に至りました。坂本社長からも「2020年に開催されるフットサルW杯の日本代表候補となり得る人材。」と期待を寄せられており、今後の小野寺選手の活躍から目が離せません。



阿部学長にプロ契約を報告する小野寺選手（中央）
左はヴォスクオーレ坂本社長

野外教育指導者育成プログラム 文部科学省「職業実践力育成プログラム」（BP）開講式

平成29年度より、仙台大学では「野外教育指導者育成プログラム」をスタートさせました。このプログラムは、大学等において社会人や企業等のニーズに応じた実践的・専門的なプログラムを「職業実践力プログラム（Brush up Program）」と文部科学大臣が認定する制度を利用したものです。社会人等を対象とし、大学の教育・研究資源を活かして編成されたプログラムにより体系的な知識・技術等の習得を目指す制度です。プログラム修了者には、大学から学校教育法の規定に基づく「履修証明書」が交付されることになっています。

4月18日（火）の夕刻には2名の受講者とともに開講式を行い、早速一回目の科目が開講されました。開講式では朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長から激励の言葉をいただき、プログラムコーディネーターの飯田稔上級研究アドバイザーより安全管理ができエキサイティングを提供できる指導者になってもらいたいとの期待が投げかけられました。参加者の伊勢裕介さん（本学職員）に抱負を伺ったところ、「朴澤泰治理事長・学事顧問をはじめとする大学の皆様のご理解があって、今回のプログラムに参加することができました。本当にありがとうございます。今回の「野外教育指導者育成プログラム」では、野外教育について一から学ぶことにより、自分の今後のキャリアアップにつながると思っています。無事に修了し、皆様に成長した姿を見せられるように全力で頑張ります。」という力強いコメントももらいました。また、叶敬偉さん（本学大学院生）は、開講式後の科目を受講した感想として、「現代社会では、自然体験に接触する機会が少なくなっている。中国においても野外教育はあまり普及していない。しかし、挑戦を通して青少年の生きる力や人間力を養成する野外教育は、非常に重要であることが理解できた。これから野外教育プログラムなど、様々なことを学んでいきたい」と話してくれました。

4月から本格的にスタートした当プログラムは、5月～7月にかけては学内での講義を通して理論を理解する。同時に、週末を利用して自然の家などの野外教育施設などで実地研修を行い、実技技能を習得していく。8月は長期インターンを行い、実際に野外教育の指導現場に立ち会い、実戦経験を積むことになっています。

【報告：講師 岡田成弘】



受講生の叶さん（中央）、伊勢さん（左から4人目）

運動栄養サポーター認定証授与式

4月24日（月）第4回運動栄養サポーター授与式を開催致しました。運動栄養サポーターは3年前から本学の運動栄養学科学学生対象に設けられた学内認定資格です。運動栄養サポーターは運動・スポーツの現場及び教育の現場（小学校・中学校・高校など）健康づくりの現場（子ども、高齢者など）において、運動・スポーツを行う人に対し栄養指導ができる人材を育成する目的があり、階級は基礎、初級、中級、上級の4つに分かれています。

今回の授与式では基礎6名、初級20名、中級9名、上級5名に対して認定証書が授与されました。今回の認定では初の運動栄養サポーター上級資格取得者が誕生しました。上級資格を認定された長谷川彩さん

（4年）は、「上級取得課程の中で下の学年に栄養サポートに必要な知識や技能を教える機会がありました。今まではそのような活動がなかったため、よい経験になりました。また、基礎から上級まで取得していく中で栄養サポートの知識を身に付けることができましたと思います。今後の栄養サポート活動や、将来栄養士として働くときに身に付けたスキルを活かしていきたいと思います。」等の感想を述べました。また、中級を認定された鈴木千夏さん（3年）は、「運動栄養サポート研究会の活動を通して、中級を取得することが出来ました。勉強する課程の中で、自分で考え、栄養指導をするなどの力がついたと感じています。次は上級の取得を目指してこれからのサポート活動に生かしていきたいです。」と話しました。

運動栄養サポーター取得者こはれまでで延べ38名となりました。これまで、このサポーター資格は研究会に所属していない学生にはあまり浸透していなかったため、今年度からは学科全体に広められるよう、運動栄養サポーター取得カリキュラムの一部を1年生の授業に組み込みました。授業の中で運動栄養サポーター及び、運動栄養サポート研究会に興味を持ってもらい、よりサポーター資格の取得者が増えるよう工夫をしていきたいと思っています。

【報告：運動栄養学



認定証を授与された学生

第11回仙台大学体育施設管理士認定証授与式を開催

4月20日（木）、A棟2階大会議室において第11回仙台大学体育施設管理士認定証授与式が行われ、昨年度2月に合格した23名のうち授与式に出席した8名に阿部芳吉学長から認定証を一人一人に手渡されました。

授与式で阿部芳吉学長は「2020年オリンピック・パラリンピックの開催に向けてクローズアップされている資格だと思います。この資格を持った先輩たちも多くのスポーツ施設で働いています。資格を有効活用しながらさらに知識に磨きをかけてほしいと思います。」と話されました。

体育施設管理士は体育施設の維持管理、運営に必要な知識・技能を認定する資格で、資格に必要な科目を本学において習得し、公益財団法人日本体育施設協会による資格認定試験に合格した者に「体育施設管理士」の資格が付与されます。本学は同協会の体育施設管理士認定校になって今年度で12年目となります。累計482名の有資格者を養成し、授業を通して資格認定者の養成教育を継続しています。



認定証を授与された学生

鈴木省三統括副学長が仙台東ロータリークラブで講演 ～アンチエイジング戦略～



アンチエイジングについて講演を行う鈴木統括副学長

4月17日（月）、仙台東ロータリークラブの招きにより、鈴木省三統括副学長はホテルメトロポリタン仙台にて「アンチエイジング戦略」と題した講演を行い、約40名もの会員の方々が熱心に耳を傾けました。
＜ロータリークラブの歴史＞

ロータリークラブは1905年に米国シカゴで、信頼できる公正な取引をし、仕事上の付き合いがそのまま親友関係にまで発展するような仲間を増やしたいという趣旨で青年弁護士ポール・ハリス氏を中心に有志で誕生し、現在では会員総数1,227,217人（2016年11月30日公式発表）に達しています。

日本では、1920年に東京ロータリークラブが創立し、翌年世界で855番目のクラブとして国際ロータリーに加盟が承認されました。現時点での日本全体クラブ数は2,264、会員数89,335人（2017年1月末現在）と、国際ロータリーにおける日本の地位は不動のものになっています。

仙台東ロータリークラブは1963年に創立し、現在60名弱の会員が毎週月曜日に例会を開き、奉仕・国際理解・親善・平和を推進するというロータリーの目的に添って活動しています。平成29年2月に阿部芳吉学長が行った「いじめについて考える」という講演が好評をばくし、このたび、統括副学長である鈴木省三教授に「アンチエイジング戦略」というタイトルでの講演依頼がありました。

＜最も着目すべきは栄養＞

最初に鈴木統括副学長は「運動・栄養・休養」の3つが生きるための根幹であり、日本人はこのなかで「食べたい」「休みたい」という欲求の高い民族であることを話されました。“疲れにくく病気をせず、太らず若々しくしかも脳がクリアに機能する人生を手に入れられる”～という目標に向かってすべきことは、①現状の把握：現在の生活習慣の問題点と改善点を書きだす。②次に半年後の未来：問題点を改善し、どのような人生を歩みたいのか？を考える。③その後、ギャップを埋める方法：現実と理想のギャップを埋める方法と行動を明確にする。～などを実行することに

より④7年後の未来には：疲れにくく病気をせず、太らず若々しくしかも脳がいつまでもクリアに機能する豊かな人生を堪能できる～そうです。

＜筋肉は命＞

「筋肉」はアンチエイジングの命であり、20歳をピークに筋力が低下していくなかで「貯筋」を心がけることが大切だそうです。日本人の平均寿命（男性80歳、女性88歳）が世界第2位なのは喜ばしいですが、実は、いわゆる寝たきり期間が10年もあるそうです。老化を早める食習慣は①白米をたくさん食べる②朝食を抜く③夜9時過ぎに炭水化物をとることなどで、体を酸化・糖化させないためにマーガリンやショートケーキといったトランス脂肪酸、焦げたもの、加工食品を食べないこと。また、体が温かいとガン寄せ付けないため、36.5度の体温を保ちニンニクやキャベツ、ブロッコリーを積極的に摂るのがポイントとのことでした。アルコール類で言えば日本酒よりも血糖を上げない焼酎、ワイン、ウイスキーといった蒸溜するものが望ましいそうです。

＜デトックス＞

鈴木統括副学長は、アンチエイジングにとって大切なのは体内にとりこむことだけではなく、毒素を体外に出すことで①水分補給②便として出す③アボガド、こんにゃく、ごぼうをとり、野菜中心の食事に改善する、油は加熱せず良質なココナッツオイルなどを取り入れる～にも触れました。

聴講していた仙台東ロータリークラブ会員の年齢層が50代～80代と、まさにアンチエイジングに最も興味のある世代だけに、寝たきりになったら大変と皆さん真剣にスクリーンへ映し出された資料を見つめ、ところどころメモを取りながら聞きっていました。同クラブの委員長で、ほこだて仏光堂の代表取締役である銚建祐治氏は「僕は今ちょうど50才ですが、57才になった時、果たして今よりもっと健康で仕事をばりばりできるのか？深く考えさせられました。鈴木先生のお話はとても具体的で、今すぐ何を止め何を始めればよいのかが明確です。今晚帰宅したら家内とじっくりアンチエイジングについて向きあうことからスタートしてみます。今日は本当にありがとうございました。」とおっしゃっていました。

30分という限られた時間のなかで、今回は「栄養」に特化した講演となりましたが、スポーツを科学する大学らしいアカデミックなお話の反響は大きく、翌日には参加していた方より、「早速、孫を起こしてラジオ体操をし、我が家ではポテトチップスを厳禁に。日本酒を止めてワインをたしなむなどアンチエイジング目指し、鈴木先生に教えていただいたことを実践しはじめました」というお礼の言葉が寄せられました。

仙台六大学野球リーグ戦初優勝の表彰盾 36年の時を経て本学に戻る

4月21日（金）に石巻市在住の鈴木正勝さんご夫妻が本学を訪れ、昭和55年に仙台六大学野球秋季リーグ戦にて本学が初優勝した際の優勝盾を阿部学長に手渡しました。

今回本学に手渡された表彰盾は、初優勝当時の野球部員が家族などへ報告するために各家庭に持ち回りされていたそうで、最終的に正勝さんのご子息で本学12回生である故鈴木幸雄さんがご自宅で保管されていたということです。

幸雄さんは東日本大震災で発生した津波の犠牲となり、石巻市渡波地区にあったご自宅も津波で大きな被害を受けたものの、幸雄さんの部屋にあった表彰盾だけは無事であったのだそうです。

正勝さんは「いつか仙台大学にお返ししようと考えていました。震災から6年経ちましたが、ようやく返すことができ安心しました。」とほっとした表情を浮かべていました。

優勝盾をお持ちいただいた際には、硬式野球部の高橋義夫部長、森本吉謙監督、総監督である安部俊三氏、OB会長の八巻芳信氏も同席し、幸雄さんの大学時代や社会人での活躍の様子、下宿先でのエピソードなどたくさんのお話に出会えました。

昭和55年のリーグ戦初優勝は硬式野球部の創部からは12年目の悲願達成だったといえます。先輩方のご苦勞がたくさん詰まった大変貴重な優勝盾は36年の時を経て本学に戻ってきたことになり、現役の部員たちにも大きな力を与えてくれることでしょう。



優勝盾をお持ちいただいた鈴木ご夫妻（右から2人目と3人目）

「新入留学生歓迎お花見会」を開催

4月19日（水）に留学生歓迎お花見パーティーが行われました。当日は、晴れていたもののJRが運休するほどの強風のため急きょ学食で開催することになりました。留学生をはじめ、教職員、ボランティア学生等、総勢60名で昨年よりも20名ほど多くの参加者が集い、賑やかな雰囲気となりました。

朴澤泰治理事長・学事顧問のあいさつから始まり、乾杯の後には早速、留学生たちは各々のテーブルで会話を弾ませていました。語学支援ボランティアの学生たちも積極的に留学生と会話をし、コミュニケーションをとっている姿が見受けられました。

会の中では台湾、中国、韓国、ベトナム、フィンランドの留学生たちから、一人ずつ自己紹介がおこなわれ、日本での抱負を語ってもらいました。留学生からは、日本語を上手に話せるようになりたいという強い気持ちが伝わってきました。

桜の花を見ることができなかったのは残念でしたが、留学生たちがのエネルギーにあふれた歌やダンスを披露してくれたことで、会場は大変盛り上がりしていました。

この会によって異文化とふれあい、学生にとってお互いによい経験になったと思います。新年度が始まったばかりですが、これからの大学生活でこの日をきっかけに、留学生との交流や関わりもますます増えていくことでしょう。

<留学生からのコメント>

「全部楽しかった。中でもダンスが一番面白かった。」（中国人留学生）

「歌が素晴らしかった。みんな上手だった。」（台湾人留学生）

【報告：学生支援室 大久保成実】



香港代表野球チームにAT部トレーナーが帯同 ～香港代表チームの監督は本学卒業生の色川冬馬さん～



香港代表野球チームとともに

3月24日から3月28日にかけて香港代表野球チームが、宮城県の野球チームとの交流大会「深松インターナショナルベースボールカップ2017」に参加するために来日しました。その香港代表チームを率いる監督の色川冬馬さん（仙台大学卒）からのご依頼で、本学アスレティックトレーニング部（以下、AT部）の学生7名が、それぞれの試合にトレーナーとして帯同しました。

香港代表野球チームは、現在、世界ランクが26位（アジア6位）であり、25歳以下の選手が大半を占めるといっても若いチームです。メディカルスタッフがない環境の中で日々厳しい練習に取り組んでいるためか、皆それぞれ何かしらの痛みを抱えながらプレーしているようで、帯同初日から多くの選手達が学生トレーナー達のもとに怪我の相談に来ていました。学生トレーナー達はそれぞれ慣れない英語でのコミュニケーションに苦労しながらも、一生懸命にストレッチやテーピング、そして障害予防のアドバイスをすることでチームに貢献していました。

今回すべての試合に帯同した齋藤翔太さん（体育学科2年）は「英語でのコミュニケーションの中で上手くいかない部分もありましたが、どうしたら選手の言いたい事を理解して、自分の伝えたい事を伝えられるのかを考えながら活動ができました。選手としっかり向き合って、コミュニケーションを十分に取る事が、選手の問題解決への第一歩だとあらためて実感しました。」と感想を述べました。

また、監督の色川さんからは、「仙台大学AT部が一丸となり、怪我をした選手の応急処置から、慢性的な肘や肩の痛みのケア、そしてアドバイスを選手達にさせていただいたおかげで、今回無事に戦い抜く

ことができました。香港野球代表団には普段アスレティックトレーナーがいませんので、大変勉強になったと選手達からも聞いております。香港代表団を代表しまして、改めて御礼申し上げます。」と感謝の言葉をいただきました。

今回海外の代表チームでトレーナー活動をするという大変貴重な経験を通して、学生達はアスレティックトレーナーとしての新たな視点を得るとともに、言語、特に英語力の重要性を強く感じたようです。東京オリンピックを3年後に控え、国内だけでなく、海外のアスリートにも自信を持って対応できるようなアスレティックトレーナーを目指し、今後の活動にもさらに意欲的に取り組んでいく決意を新たにしていました。

【報告：新助手 内野洋材】



香港代表選手への須取れcx種テーピングを施すAT部の学生

平成29年度 親睦会歓送迎会が開催されました

4月21日（金）17時30分より、ホテル原田inさくらにおいて、本学の教職員親睦会幹事会主催の歓送迎会が行われました。

本会には朴澤泰治 理事長・学事顧問をはじめとするご来賓の皆さまにご臨席を賜り、阿部芳吉 学長をはじめ、多くの親睦会会員の皆さまにご出席いただきました。

今年度より新任として親睦会にご入会された18名の皆さまをお囲みし、限られた時間の中ではございましたが、参加者お一人おひとりが参加された皆さまとの親睦を深められました。

会の中盤では、新入会員の皆さまより、お一人一言ずつご挨拶を頂戴するお時間も設けられ、本学に着任されるまでの経緯や今後の抱負について語っていただきました。

今回は残念ながらご多用のため前年度末にて親睦会をご退会された12名の皆さまにはご出席賜ることはできませんでしたが、ご退会された皆さまの新天地でのご活躍を心よりお祈りしております。

参加者は140名となり、終始和やかな雰囲気でした。



開会の挨拶をする阿部学長

【報告：平成29年度親睦会幹事】

仙台大学開学50周年記念③「第3回プラぞり大会」開催のお知らせ

5月27日（土）に柴田町内にある「太陽の村」を会場として「第3回プラぞり大会」が本学開学50周年記念イベントの一環として開催されます。

この大会は、ボブスレー・リュージュ・スケルトン等のそり競技の楽しさやそり競技を行っている仙台大学について、年代や性別を問わず多くの人に認知してもらうことや、大会参加を通じた親子間の交流、自然の中で遊ぶことの楽しさを知ってもらうことなどを目的に、本学のボブスレー・リュージュ・スケルトン部が中心となって開催しています。

大会では25メートルの特設コースをプラスチックのそりで滑り、タイムを競うというものです。1人乗りの部、2人（親子）の部があり親子でも参加することができます。

お申込みはEメール（purazori0527@gmail.com）で必要事項（氏名、年齢、電話番号、参加部門）をお送りください。

【担当：B・L・S部コーチ 進藤亮祐】



昨年の様子

「第27回国際ハーフマラソン大会」に仙台大学同窓会が協賛します

5月14日（日）に仙台市内をコースとして開催される「第27回仙台国際ハーフマラソン大会」に、仙台大学同窓会が協賛しています。

本大会には毎年多くの大学関係者、卒業生が参加しています。今年は特に開学50周年の記念すべき年であることから「仙台の街を仙台大学グリーンで染めよう」をキャッチフレーズに、大会に出場する同窓生や本学関係者へのオリジナルのTシャツ配布、コース沿道で応援してもらうためののぼりや横断幕の作成などを行い、仙台大学の50周年を関係者一同でお祝いしようと考えております。

大会当日は仙台大学同窓会ブースも設置され、本学のPRやアスレティック・トレーナー部によるテーピングなども行われる予定になっています。ご都合のつく方は是非ご声援をお願いします。

仙台空港リニューアルに伴い広告看板が再掲出されました

仙台国際空港が4月20日にリニューアルオープンしたことに伴い、工事期間中一時的に撤去されていた本学の広告看板が再度お目見えしました。

新たに設けられたカフェにより動線が変わり、従来よりも空港利用者の目に留まりやすくなっています。仙台空港をご利用の際は是非ご覧ください。



国内線1階にある本学の広告看板



平成29年度 新任者紹介

教員 7名 事務職員8名 新助手4名 臨時職員7名 計33名のみなさんが着任されました

教員





<p>ささき てつお 佐々木 鉄男 教授 (スポーツマネジメント)</p> 	<p>前職の仙台放送では、アナウンス (5年)、報道 (ロサンゼルス特派員含め20年)、編成・業務 (3年)、広報 (10年半) 等を担当しました。学生の皆さんと一緒に学びたいと思います。よろしくお願いいたします。</p>	<p>あらかまき あい 荒牧 亜衣 講師 (スポーツ社会学)</p> 	<p>スポーツ社会学とバレーボールを中心に授業を担当させていただきます。オリンピックを主な研究対象として、最近ではミュージアム、聖火、東洋の魔女をキーワードに教育、研究活動に取り組んでいます。</p>
<p>ちば きくや 千葉 喜久也 教授 (福祉行財政等)</p> 	<p>8年ぶりの仙台になります。体育系の学生と一緒に福祉を学ぶ喜びと、こうした機会を与えていただいた仙台大学に感謝の心を持って頑張ります。「角館の桜もええけど、柴田の桜もえがったナー」</p>	<p>たなか まさたか 田中 政孝 特別任用講師 (応用武道等)</p> 	<p>一昨年からは非常勤講師としてお世話になっておりましたが、今年度から講師として教壇に立たせていただくことになり、責任とやりがいを感じております。学生諸君により多くの知識・技能を伝えられるよう努力いたしますので、よろしくお願いいたします。</p>
<p>いけだ あつし 池田 敦司 准教授・IRオフィサー (スポーツ産業論)</p> 	<p>これまで楽天イーグルス、ヴィッセル神戸とプロスポーツ業界に12年間おりました。プロ野球、プロサッカーの両方で経営に携わった希少な経験やノウハウを皆さんにも伝えていければと思っています。</p>	<p>かんの けいこ 菅野 恵子 助教 (バスケットボール)</p> 	<p>助教として、気を引き締めて日々頑張っていきたいと思っています。女子バスケットボール部の監督としても、精進していきたいと思っています。よろしくお願いいたします。</p>
<p>しのはら まゆみ 篠原 真弓 准教授 (高齢者介護等)</p> 	<p>仙台大学の皆様こんにちは。篠原真弓と申します。老年看護学を教えていました。学生の皆さんと一緒に高齢者や認知症の方、難病の方、ならびにそのご家族の支援を考えていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。</p>		

事務職員

<p>せきば たかお 関場 孝夫 さん (事業戦略室担当課長)</p> 	<p>このたび事業戦略室に配属されました。39年間の柴田町役場での行政経験を活かし、世界に飛躍する大学生、大学運営の一助になれるように頑張っていきたいと思っています。町内に住んでおりますので街の中の身近なことについて、疑問が生じたらぜひ声を掛けてください。</p>	<p>マイケル・マンキンさん (事業戦略室担当課長 兼英語教育アドバイザー)</p> 	<p>今年度より、事業戦略室、英語教育アドミニストレーターとしてお世話になりますマイケル・マンキンです。アメリカ、シアトルから来て19年になります。柴田町教育委員会、角田市教育委員会で小、中学校で(英語)外国語指導助手をしていました。スポーツが好きですが、Sports For Allをモットーにしている仙台大学の発展に貢献できるよう頑張ります。皆様どうぞよろしくお願いいたします。</p>
---	--	---	---

<p>いしばし まさひろ 石橋 雅弘 さん (総務室長)</p> 	<p>総務室長のブリジストン石橋です。 早く皆様の顔と名前を一致させ、総務業務において仙台大学の運営等に貢献していきたいと思ひます。 どうぞ、よろしくお願ひします。(また、お声掛け頂ければ幸ひです。)</p>	<p>みつなり さや 光成 沙耶 さん (予算管理室)</p> 	<p>今年度より、予算管理室で働かせて頂くことになりました光成沙耶です。地元の大学である、仙台大学の発展に貢献できる職員になれるよう、一生懸命頑張っていきたいと思ひます。ご指導の程宜しくお願ひ致します。</p>
<p>いき しげる 壹岐 茂 さん (学生生活室)</p> 	<p>38年前に仙台大学を卒業して公職に就き、その仕事を無事終えて、また母校の大学に戻って来るとは夢にも思わなかったのが本音です。 前職とは全く職種が違ひますが、母校で仕事が出来ることのうれしさをバネに一生懸命頑張る所存でいますので、皆様どうぞご指導の程よろしくお願ひします。</p>	<p>いけだ たけゆき 池田 武幸 さん (営繕管理室)</p> 	<p>2月7日付で労務職員として勤務させて頂きます。池田武幸です。 仙台大学に貢献できるように努めてまいりますので、よろしくお願ひ致します。</p>
<p>ふかや けい 深谷 螢位 さん (学生生活室)</p> 	<p>今年度から学生生活室でお世話になります深谷螢位と申します。 多くの学生さんに関わる所なので、1日でも早く仕事を覚え、スムーズに対応できるよう頑張ります。 また、母校である仙台大学に貢献できるよう努めてまいりますので宜しくお願ひ致します。</p>	<p>やまき よしひろ 八巻 良宏 さん (営繕管理室)</p> 	<p>今年から営繕管理室 労務職員としてお世話になります八巻良宏です。 主に、第2グラウンドのラグビー場(芝生管理)をさせて頂くことになりました。 不慣れではありますが、ご迷惑をかけないよう頑張りますのでご指導のほどよろしくお願ひします。</p>

新助手

<p>あさの かつなり 浅野 勝成 さん (トレーニングセンター)</p> 	<p>今年度より新助手としてお世話になります。主な職務内容は姉妹校の明成高校でストレングス&コンディショニング(S&C)の普及と指導です。高大連携事業に貢献できるよう努めますので、宜しくお願ひ申し上げます。</p>	<p>とみざわ ゆうた 冨澤 祐太 さん (体操競技)</p> 	<p>今年度より新助手としてお世話になります。冨澤祐太です。 体操競技部の強化はもちろん、大学職員として貢献できるよう、日々努力してまいります。 よろしくお願ひ致します。</p>
<p>えんどう こうき 遠藤 皓樹 さん (A Tルーム)</p> 	<p>今年度より新助手として働かせて頂きます、遠藤皓樹です。初心を忘れず、常に向上心を持ち仕事に取り組んでいきたいと思ひます。ご指導の程、よろしくお願ひ致します。</p>	<p>すがわら まり 菅原 麻莉 さん (運動栄養学科)</p> 	<p>昨年度大学を卒業し、今年度より運動栄養学科の新助手となりました菅原麻莉です。 仙台大学の職員として貢献できるよう、日々努力をして参りますので今後ご指導のほどよろしくお願ひいたします。</p>

臨時職員

<p>そぶ みちこ 蘇武 迪子 さん (学生相談室)</p> 	<p>今年度より、学生相談室にてインターカーを勤めさせていただくことになりました。学生の皆さんがより良い学生生活を送られるよう、少しでもお役に立てればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。</p>	<p>はしもと だいすけ 橋本 太輔 さん (学生支援センター)</p> 	<p>今年度より学生支援室で働かせていただくことになりました橋本太輔と申します。仙台大学の発展に貢献できるよう、日々精進し全力で業務に励んでいきたいと思しますのでご指導の程よろしくおねがい申し上げます。</p>
<p>いわやま りょうへい 岩山 良平 さん (機構事務室)</p> 	<p>今年度よりスポーツ健康科学研究実践機構で臨時職員として勤めさせて頂くことになりました岩山良平です。実践機構の仕事は初めてのためご迷惑をお掛けしてしまうと思いますが元気に明るく精一杯努めていきたいと思しますのでご指導ご鞭撻の程よろしくお願いたします。</p>	<p>おおくぼ なるみ 大久保 成実 さん (学生支援センター)</p> 	<p>今年度から、学生支援室で臨時職員として勤務させていただくことになりました。大久保成実です。仙台大学の学生たちが、より良い大学生活を送ることができるように、精一杯サポートしていきたいと思ひます。ご指導の程、よろしくお願ひ致します。</p>
<p>すずき たかゆき 鈴木 貴之 さん (学生支援センター)</p> 	<p>今年度より臨時職員として学生支援室で働かせていただく鈴木貴之です。仙台大学に貢献できるよう元よく全力で頑張っていきたいと思ひます。ご指導のほどよろしくお願ひ致します。</p>	<p>はやし よしのり 林 佳宜 さん (学生支援センター)</p> 	<p>今年度よりトレーニングセンターで勤務させていただいている林佳宜です。学生インターンの経験を活かし、トレーニングセンターの管理運営を行っていきます。ご指導ご鞭撻の程宜しくお願ひ致します。</p>
<p>こばやし ひろき 小林 弘樹 さん (学生支援センター)</p> 	<p>本年度より、学生支援室の臨時職員として働くことになりました小林弘樹です。学生が毎日充実した大学生活を送れるように全力でサポートしていきたいと思ひます。ご指導のほどよろしくお願ひいたします。</p>		

仙台大学開学50周年記念行事⑤ 「第3回プラぞり大会」を開催



学生が押す体験用スケルトンを楽しむ参加者

5月27日（土）、本学第4体育館で「第3回プラぞり大会～仙台大学開学50周年記念大会～」が実施され、小学1年生から小学6年生までの宮城県内の子供たちとその保護者約60名に参加いただきました。プラぞり大会は、冬季オリンピックの正式種目になっている「ボブスレー・リュージュ・スケルトン」のソリ競技の魅力を知ってもらうことを目的とし、今回は仙台大学開学50周年記念事業の冠大会として、ボブスレー・リュージュ・スケルトン部の学生が主体となり実施されました。本大会は東京オリ・パラ競技大会組織委員会の東京2020応援プログラムに認定されており、「スポーツの力」を活かした地域貢献や発展を目指した大会としても意義深い行事の一つになっています。

当日は、前日からの降雨により、会場を第4体育館に変更しローラースケルトン体験会とプラズマカー大会を代替で行いました。

ローラースケルトンの体験では、地面から数センチの高さで前を見するという日常生活では感じる事の出来ない世界観やスピード・迫力を疑似体験。

プラズマカー大会では、1人乗りの部と親子の部を設け、家族で参加できるような新たな取り組みも始めました。

はじめに、本学の学生から怪我や事故の無い様に準備運動や諸注意を聞いた後に、参加した子供たちはプラズマカーを速く滑るコツや乗り方を教わりながら練習し、大会の最後をレースで締めくくりました。

思うようにプラズマカーをコントロールできず悔しい表情を浮かべていた参加者もいましたが、学生や参加者同士で応援や歓声を上げながら終始楽しんでいました。

(次頁に続く)

〈目次〉

仙台大学開学50周年記念行事⑤ ・「第3回プラぞり大会」を開催	1
仙台大学開学50周年記念行事④ ・ロシア・ニジネゴロド州 サッカーチームと親善試合	2
仙台大学開学50周年記念行事③ ・仙台国際ハーフマラソン大会	3-4
仙台大学開学50周年記念行事② ・女子バスケットボール部 マレーシア代表と親善試合	5
・仲野副学長が WLSA第1回国際 フォーラムで発表 ・みやぎ米キャンペーンを開催	6
「一般社団法人全国体育スポーツ系 大学協議会総会」「全国体育系大学 学長・学部長会総会」などが開催さ れる	7
・仙台89ERSスポンサー感謝の集いに 参加 ・ロービジョンフットサル日本代表監督に 大学院1年の齋藤さんが就任	8
・韓国交通大学一行が来訪 ・平成29年度学術会総会	9
・本学で収録の「奇跡のレッスン」が 全国放送されました	10
・「日本体育協会アスレティックレー ナー」検定試験に運動栄養学科より 初めて村上泰司さんが現役合格	11
・菊地新助手が管理栄養士国家試験 に合格	12
・2020東京五輪に向けて～活躍が期 待される新入生～	13
・学生の活躍	14-17

学生の活躍や、取り組みなどをご存知
でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機
関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありま
したら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224-65-1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp



岩沼市から参加した小学3年生の女子児童は、「プラぞり大会は今年初めて参加しました。お母さんと競争し、勝つことができ嬉しかったです。大学生のお兄さんお姉さんも優しく説明をしてくれ、応援してくれたりと楽しかったです。来年は太陽の村で優勝出来るように頑張ります。」と感想を述べました。また、昨年の第2回大会も参加した大河原町の小学4年生の男子児童は、「最初は難しかったけれど、練習していくうちにできるようになって楽しかった！」と笑顔で語っていました。

その他に本大会では、ボブスレー・スケルトン競技のことをより知って頂く為の競技紹介のブースも設置しました。ここでは、実際に競技をしている様子の映像や道具、オリンピックのグッズ、ナショナルチームに所属している学生の「JAPAN」と書かれているウェアの展示などを行いました。初めて見る道具やウェアなど子どもたちも興味津々に見てさわり、ブースコーナーを楽しんでいました。

今回のプラぞり大会を通して、大会委員長を務めた本学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部の高橋迪さん（体育学科3年一宮城・富谷高校出身）は「雨の影響で太陽の村でのプラぞりのレースはできませんでしたが、代わりに行ったプラズマカーでのレースで、子供たちが負けて悔しがっていたり、友達を応援していたりと子供たちの何事にも一生懸命な姿を見ることができて良かったです。今後もプラぞり大会のような活動を続けて、ソリ競技の普及、発展とともに地域に貢献していきたいです。」と話しました。

ゼロから始まったプラぞり大会も今年で無事に3回目を終えることが出来ました。年々、色々な体験を積み重ねる事で新たな発見・課題や反省が見つかります。これまでの経験を活かし、第4回目の大会も企画・開催していこうと考えております。本大会は、仙台大学のサポートがあってこそ開催できます。今後は更に地域に密着したイベントを実施し、2018年平昌・2022年北京へと続く冬季オリンピックに向けて日本のソリ競技の中心であり続ける事を目指します。また、私たちの競技力向上はもちろん、地域の方々にも応援していただけるような選手の育成・競技普及を目標に努めてまいります。

【報告：新助手 進藤 亮佑】

仙台大学開学50周年記念行事④

ロシア・ニジェゴロド州サッカーチームと親善試合

5月23日（火）に利府町にある「ひとめぼれスタジアム（宮城スタジアム）」を会場に、本学男子サッカー部と宮城県との国際姉妹県であるロシア・ニジェゴロド州のサッカーチームとの親善試合が開催されました。

今回の親善試合は、2018年のワールドカップがロシアで開催されること、また、2020年にはオリンピックが日本で開催されることなどから、経済交流から始まりました両県の交流事業の一環として、スポーツによる交流を目的に行われたものであり、宮城県から本学に対する交流打診がきっかけで実現したものです。

試合前には開会のセレモニーが行われ、両チームでの記念撮影などが行われました。試合は本学が常にリードを奪う展開で5対1で勝利しましたが、ニジェゴロド州チームも最後まで攻めのサッカーを展開していました。当日は国の総務省からも視察があり、今後、日露首脳会談の折には日露交流の場面ということで、今回の様子を伝えていくとのことのお話しでした。

また、ニジェゴロド州からの一行は親善試合の他にも22日（月）に本学を訪問し学内を見学したほか、明成高校サッカー部との練習試合なども行われました。

来年は、本学サッカー部が訪問し、ニジェゴロド州のワールドカップ会場での親善試合が計画されています。



試合終了後の両チームの選手・関係者

仙台大学開学50周年記念行事③-1

「第27回仙台国際ハーフマラソン大会 国際姉妹都市交流会」に参加

5月14日（日）に江陽グランドホテルにて、「第27回仙台国際ハーフマラソン大会 国際姉妹都市交流会」が開催されました。姉妹都市の参加は、リバサイド市（アメリカ）、レンヌ市（フランス）、ミンスク市（ベラルーシ）、アカプルコ市（メキシコ）、長春市（中国）、ダラス市（アメリカ）、光州広域市（韓国）、台南市（台湾）の8都市の参加がありました。本学は、2020東京オリパラ事前合宿地として、ベラルーシ新体操チームの誘致が決定した直後の平成29年2月22日～24日の期間でミンスクを訪問しており、今後もミンスク市とは活発な交流が期待されています。

今回の仙台国際ハーフマラソン大会日本陸連登録競技者の部（海外男子）では、ミンスク市のジミートリ・フラムトウスキ（Dzmitry Hramatouski）選手が1位（全体順位は36位）を獲得しました。ジミートリ氏は、本学と提携を結ぶベラルーシ国立体育学院の卒業生でもあり、本大会において自己ベストも更新されました。

懇親会は終始和やかな雰囲気です。参加選手団の方や宮城・ベラルーシ協会の方々とも交流を深めることができました。



ベラルーシ・ミンスク市関係者と

【報告：講師 山梨 雅枝】

仙台大学開学50周年記念行事③-2

ベラルーシ政府関係者が仙台大学に来学 ～仙台国際ハーフマラソン招待選手など～



本学を訪問したアンドレイ・パツェエウ氏（後列右から4人目）

5月13日（土）午後、ベラルーシ共和国ミンスク市スポーツ観光部筆頭副部長のアンドレイ・パツェエウ氏が仙台大学を訪問されました。同氏は翌日開催された第27回仙台国際ハーフマラソン大会へ招待された同国選手の引率で来日されました。ベラルーシ共和国の首都ミンスク市と仙台市は国際姉妹・友好都市として協定を締結しており、毎年同大会へ選手を招待されており、今年も例年通りの大会参加となりました。アンドレイ・パツェエウ氏は、大会前日の5月13日（土）午前中に仙台市と面談をし、その足で午後からベラルーシ新体操チームの2020東京オリパラ事前合宿地として選定した白石市と仙台大学を訪問、合宿地の施設等を見学されました。仙台大学では見学時間が極めて短かったことから、LC棟、C棟3階の人工気象室と低酸素環境室、第3体育館のトレーニングセンター及び柔道場、第4体育館のA/Tルーム、新体操練習場のみの見学ツアーとなりましたが、最新の設備が整った本学に大変感心され、設備の導入年やトレーニング機器の製造国等の質問もされておりました。また、柔道場、新体操練習場見学時は、練習中だった本学学生へ声を掛けられ、できるだけ上位の成績を狙えるよう激励下さいました。

【報告：スポーツ健康科学研究実践機構事務室 室長 近江 康宏】

仙台大学開学50周年記念行事③-3

アスレティックトレーナー部

仙台国際ハーフマラソン大会でサポートブースを設置



ブースを利用した同窓生とともに記念撮影

5月14日（日）に、本学アスレティックトレーナー部学生9名とアスレティックトレーナールーム新助手2名が、開学50周年記念行事として仙台国際ハーフマラソン大会にてブース活動を実施しました。今回は陸上競技部部長の名取英二准教授のご紹介により、アスレティックトレーナー部の活動史上初めて、1万人の参加者を超える大型国際大会のサポート活動を実施することができました。当日は朝6時から準備し、7時から14時頃までのブース活動となりました。

今回の活動で一番力を入れたのは、本学50周年を記念した先着50名限定のキネシオテーピング・ストレッチでした。参加学生は事前に練習を重ね、その結果当日のテーピング利用者数30名、ストレッチ利用者数は97名にも上りました。仙台大学関係者や同窓会ランナーの方々にもブースを利用いただき、全体の利用者数は136名になりました。

もう一つの大きな目標は、1万人を超えるランナーに対し、熱中症予防や水分補給についての啓発活動を実施することでした。資料は国際大会ということもあり英語・日本語にて作成し、大会主催者側にも確認を取り、当日は約100個設置されていた仮設トイレとランナー更衣室全てに、熱中症・水分補給・ストレッチなどの資料を掲示させていただきました。今回はあいにくの雨で気温も低く、熱中症の危険度は低かったと思われませんが、ランナーの方々が今回の資料を目にしたことで、今後熱中症などの事故予防に少しでも意識を向けてもらえたらと思います。

本学開学50周年記念行事としてのアピールも何点か行いました。50周年記念のぼりの設置、50名限定テーピング・ストレッチ、各資料への50周年記念マークの使用、活動学生着用ビブスに50周年（50th Anniversary）の文字を使用した事などで

す。一番大きなアピールとなったのは、100個ほどあった仮設トイレに貼り出した資料です。1万人のランナーの殆どがトイレを利用したはずで、仙台大学や50周年の文字を目にする機会が多かったかと思います。

全体の総括として、テーピングやストレッチは好評だったと思います。悪天候のため実施スペースに限りがあり混雑しましたが、参加学生は各利用者の方々の希望に沿える様、丁寧な対応を行っておりました。大学関係者や同窓会の方々にも利用していただき、参加学生も様々な方々と交流が出来て大変良い機会となりました。日本ではアメリカと比べてアスレティックトレーナーの認知がまだまだ遅れていますが、このような大きな大会でサポート活動をすることにより、アスレティックトレーナーの啓蒙にも繋がったと考えられます。今後もアスレティックトレーナー部では学生教育に力を入れ、社会に通用するアスレティックトレーナーの育成や、アスレティックトレーナーの有用性について人々に理解していただけるよう活動を続けていきたいと思っています。最後になりましたが、今回の行事に関しましてご協力いただきました方々に、心より感謝申し上げます。

【報告：新助手 鈴木のだぞみ】



大会参加者にストレッチを施す学生（上）
ブースは終始大勢の人で賑わいました（下）

仙台大学開学50周年記念行事②

女子バスケットボール部 マレーシア代表と親善試合

仙台大学女子バスケットボール部は、平成29年5月13日（土）山形銀行の体育館にて、マレーシアのナショナルチームとの親善試合を行いました。オープニングセレモニーでは、記念品の交換し、仙台大学からは50周年の記念Tシャツとタオルをプレゼントしました。部員全員が身振り手振りを交えながら一生懸命に英語でコミュニケーションを図っていました。

試合は、マレーシア代表、山形銀行、秋田銀行、仙台大学の4チームで行い、マレーシア代表とはハーフゲームを戦うなど、本チームにとって貴重な経験となりました。

身長が高い選手がたくさんいたため攻め込まれる場面もありましたが、徐々に対応できるようになり、午後の10分ゲームは終始リードする展開に持ち込めました。そのため後半は、色々な選手を起用できました。

マレーシア代表は、5月8日から5月18日まで山形銀行の体育館で、色々なチームと試合を重ねるそうです。今回が初めての海外遠征試合とのことで、食事や環境に慣れるのが大変だったようですが、終始声を出していて、とても良い雰囲気です。

当日は、山形県のさくらぼテレビが取材に来ており、夕方のニュースで試合の風景が映し出されていました。マレーシア代表のウォン・スィン・ユィンヘッドコーチは「試合を通じて日本のチームからメンタリティーや激しいプレーを体験して学んでいきたい」とインタビューに答えていました。

【報告：女子バスケットボール部監督 助教 菅野恵子】



マレーシアチームと試合をする本学チーム

仙台大学開学50周年 同窓会記念行事①

仙台国際ハーフマラソン大会に協賛

～多くの同窓生が杜の都に集結～

5月14日（日）に開催された第27回仙台国際ハーフマラソン大会に仙台大学同窓会が開学50周年を記念して協賛しました。

この大会には例年、多くの同窓生が参加しており、同窓生が集う場の一つともなっています。今年は特に開学50周年の記念すべき年であることから、「杜の都を仙台大学グリーンで染めよう」をキャッチフレーズに例年以上盛り上げようと、ホームページやフェイスブックで参加者を募りました。その結果、出場者だけでなく沿道で応援して下さる方々が北は北海道、南は沖縄県から約100名の同窓生に集まっていただきました。

あいにくの天候でしたが、参加者は2km、5km、ハーフとそれぞれのコースを思い思いに力走り、応援隊の皆さんはコース沿道のあちらこちらで「仙台大学同窓会」の横断幕やのぼり旗を掲げ、大会参加者の応援のみならず、仙台大学の開学50周年を広くPRいただきました。

また、大会終了後には市内のホテルを会場に大懇親会も開催され、約50名の同窓生がご参加くださいました。会の中では全国各地から集まったお土産品が当たる「くじ引き大会」が行われるなど終始熱気に包まれていました。

大会や懇親会を通じ、改めて同窓生の熱い「仙台大学愛」を感じた1日となりました。



スタート前の記念写真（上）
大懇親会の記念写真（下）

仲野副学長 WLSA・第1回国際フォーラムで発表

4月11日～14日にWLSA（世界レジャースポーツ協会）が主催する第1回国際フォーラムがマカオで開催され、出席してきました。この協会は昨年アメリカのカリフォルニアで設立され、この度マカオ支部が設立することになったことを記念して国際フォーラムが企画されたとの事でした。

私に関わることになったきっかけは、3月に本学大学院に留学し現在は中国で大学教員として活躍している楊光先生から朴澤理事長・学事顧問を通じ、同協会の副主席の一員として就任しフォーラムにも参加して欲しいという依頼があった事に起因します。直ぐにWLSAをインターネットで検索したもののヒットせず、迷いながらも楊光先生たっの依頼ならと承諾させていただいた次第でした。個人的に中国語は分かりませんが、諸外国の方々も参加するし行けば何とかなるだろうと思っていたところ、通訳として大学院職員の馬冬梅さんに同行願えたことは大変ありがたかったです。

11日は会長・副会長・理事等が一堂に会し、事前の打ち合わせ会議と歓迎会がありました。参加して初めて分かったことは、副主席はカナダ・フランス・オーストラリア・ロシア・中国などから構成される10名で、日本人は私だったことです。打ち合わせ会議で渡されたプログラムを確認したところ、12日の開会式直後の2名によるメインプレゼンテーションのホストに私の名前が、さらには、翌13日のレジャースポーツと経済・サミットフォーラムの3番目の発表者にも私の名前が記されていました。少々のことでは動揺しない私ですが、これには流石に度肝を抜かれた思いをしました。というのも、事前の情報では、この度のマカオ滞在では私の役割は会議等への出席以外には特に無いということだったからです。とはいえ、既に製本されたプログラムに列記として記されている以上、お断りすることはできないので、持って行ったパソコンで急ぎ、過去のファイルや発表データ、さらにはインターネットをフル稼働して『「The development of leisure sports in Japan」 by Takashi Nakano』を発表当日の朝までかかって英語のスライドを完成させ発表させていただきました。大変でしたが、結果的にはフロアーにも興味を持っていただけたようでしたし、良い経験になりました。

最後に、「マカオは第2のモンテカルロやラスベガスを目指している」という報告がありましたが、確かにホテルというホテルにはカジノがありましたし、観光資源は豊かで、夜も治安は悪くありませんでした。世界5位のGDPを誇るマカオは、カジノという大きな収入源のみではないという印象を打ち出す一つの手段として、国家を挙げてレジャースポーツに力を入れる国策に出た実に興味深い現実を垣間見れました。

【報告：副学長・体育学科長 教授 仲野 隆士】



フォーラムへの参加者と共に（右から4人目が仲野副学長）

「なちゅら」で「JAグループ宮城・みやぎ米キャンペーン」が今年も開催

5月25日～26日のランチタイムの10：30～15：00、本学学生食堂「なちゅら」において「JAグループ宮城 みやぎ米キャンペーン」が開催されました。

このキャンペーンは若者たちのコメ離れに歯止めをかけようと、JAグループ宮城が企画し開催しているもので、本学での開催は昨年7月に続き2回目です。

この2日間、学生食堂「なちゅら」には、米どころ宮城が誇るブランド米「ひとめぼれ（環境保全米）」120kg、約600食（2日間）が無償提供され、つやのある美味しい炊き立てご飯を美味しく笑顔で頬張る学生たちの姿が多くみられました。

食堂の店長によりますと、いつもより定食を頼む学生が多く、キャンペーンの効果があったようだと話していました。

また、アンケートに答えた学生には真空パックの「無菌パックごはん」が景品として配られ、一人暮らしの学生にとっては保存食にもなり重宝すると好評だったようです。開催初日には報道関係4社（東北放送、ミヤギテレビ、河北新報社、日本農業新聞社）が来訪しインタビューを受けた学生たちも率直な感想を述べていました。



美味しい宮城県産米を頬張る学生

「一般社団法人全国体育スポーツ系大学協議会総会」 「全国体育系大学学長・学部長会総会」などが開催される



総会の様子



総会に出席する阿部学長

一般社団法人全国体育スポーツ系大学協議会は、体育系大学の経営者等で構成され、傘下の体育系大学全国体育系大学学長・学部長会議とともに、体育系大学における教育研究並びに管理運営等に関連する事項について協議し、相互の連絡・理解・親睦を図り、わが国体育の向上発展に寄与することを目的に活動しております。

びわ湖大津プリンスホテルを会場に、立命館大学びわこ・くさつキャンパスを幹事校として、協議会理事会・総会は5月25日に開催され、スポーツトレーナー制度、日本版NCAA制度等について、検討協議が行われました。

同じく、学長・学部長会議は、5月26日、節目となる第50回総会が開催され、加盟する28大学から会員をはじめ、事務関係者を含む57名もの参加がありました。（会長および事務局：順天堂大学）

この会の会長である荒井一順天堂大学・学長が欠席だったため、代理を務めた同大学・スポーツ健康科学部長の内藤先生が最初に「4年後に迫った2020東京オリンピック・パラリンピックについて、全国の体育系大学が尚一層、結束して自国開催オリンピックを成功に導こう」と挨拶されました。

次に会議のなかで、熊本地震の被災地である益城町へ、小学校・中学校のスポーツ施設復興のために使って欲しいと、この会から30万円の義捐金を贈ったことなどが報告されました。

昨年来の重要な話題の1つとして「2020東京オリンピック・パラリンピックに際し、もちろん体育系大学は各競技に選手を輩出しようと日々、努力を重ねているが、それだけではなく、体育系大学の学生達がボランティアとして大会を支援することに関しても国からの明確な指針が欲しい。JOCなり、オリンピック組織委員会にこのことを提案し、どのよう

にすれば全国にある体育系大学の学生たちがオリンピックを支える側として力を尽くすことができるのか？お話を聞きたい。来年のこの総会の場に、JOCなどから担当者を招

き、もっと体育系大学を活用して欲しいと呼びかけてはどうか？」という意見が多々出されました。事務局である順天堂大学は、そういった声をまとめて、しかるべき組織に遅延なく声をあげていくことをその場で確認し、参加者全員の賛同を得ました。

今回は、①日本福祉大学・スポーツ科学部、福井工業大学・スポーツ健康科学部、③大阪産業大学・スポーツ健康科学部、④同志社大学・スポーツ健康科学部の新たな4つの大学が新規加盟を希望し、全員一致で了解され、会員数が33大学となったことから、日本におけるスポーツ・健康分野の大学がいかにかに増えているのか？を痛感し、お互いに協力しあいながらも良きライバル校同士として身の引き締まる場ともなったようです。

来年は、5月24日～25日に全国体育スポーツ系大学協議会と共催で、桐蔭横浜大学を幹事校として第51回目となる総会開催が決まっており、オリンピック・パラリンピックという国家的行事の開催国として、体育系大学の果たす役割がますます重要になっています。

仙台89ERS スポンサー感謝の集いに参加

平成29年5月15日、勝山館にて開催された「仙台89ERS 2016-2017シーズン スポンサー感謝の集い」に朴澤理事長・学事顧問と出席させていただきました。会場には84社ある公式スポンサーの中から約50名の方々が集まりました。感謝の集いは球団代表中村彰久氏のあいさつで始まり、スポンサー企業への感謝の言葉がありました。B1リーグでスタートしたシーズンですが、残念ながら初年度でB2リーグに降格してしまったことへの無念の思いをお話されていました。また、間橋ヘッドコーチの挨拶では、「選手たちは持っている力を十分に発揮したことに関しては悔いがない、来季は1年でB1リーグに戻ってくる」と宣言していました。会が進むにつれて、私自身が選手と直接話をする機会もありました。佐藤文哉選手にとっては少し悔いが残るシーズンとなったようです。個人成績として昨年度よりも落としてしまったこと、怪我がないシーズンだったのに出場機会がない試合があったことなど、悔しさを打ち明けてくれました。石川海斗選手もシーズン後半戦に怪我をしてしまい、B1生き残りを賭けた数試合に出場することができず、悔しかった思いを打ち明けてくれました。

B1リーグはやはり厳しいリーグであることを改めて感じました。私自身シーズン中に数試合を観戦しましたが、勝ち試合を観ることはありませんでした。あるインタビューで志村雄彦選手は、仙台はB1で戦い続けられる組織ではなかった、という主旨の話をしています。チームの勝敗が直接的にB1リーグの残留や降格を決めますが、勝敗は選手・コーチ陣の能力だけではなく、球団側の様々な事情が大きく関係します。資金力、スポンサー企業や地元企業の協力、チーム編成、試合会場や商品の売り上げ、集客力など、多方面での運営力が球団に求められます。球団側が言っているように来シーズンにB1リーグ復帰を目指すのであれば、B1リーグで生き残る・勝ち進むための再整備を組織レベルで行わなければなりません。これからの組織改革とチーム編成に期待をしたいと思います。

仙台89ERSを離れて4シーズンが過ぎ、元チームメイトはたったの4人になってしまいましたが、一スポンサー企業の関係者として、そして一バスケットボールファンとして仙台89ERSを応援し続けようと思います。最後になりましたが、今なおチームとあたたかい交流を持たせていただける環境と、このような会に出席させて頂く機会をくださいました関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

【報告：新助手 白坂 広子】



佐藤文哉選手（右）、石川海斗選手（左）と
朴澤理事長・学事顧問

大学院1年の齋藤友規さん

IBSAロービジョンフットサル世界選手権2017日本代表チーム監督に就任

大学院1年の齋藤友規さんが、イタリアにおいて5月27日～6月3日まで開催される「IBSAロービジョンフットサル世界選手権2017」の日本代表監督に就任することが決まったことの報告のため、5月17日に阿部芳吉学長を表敬訪問しました。

就任報告の中で齋藤さんは「強豪国ぞろいのヨーロッパのチームと戦う中で、日本チームがどのくらい通用するかが楽しみ。前回大会から2年間は特に攻撃の部分強化してきた。強化の成果を発揮し、初のメダル獲得を目指したい。」と意気込みを語りました。

阿部学長は「日ごろの練習で培った力を選手が発揮できるように頑張ってもらいたい。また、世界を舞台にして活躍した経験を、学部学生にも還元する機会も作ってもらえるとありがたい。」と齋藤さんを激励しました。

この大会への出場は2013年2月の前回大会に続き2度目の出場、国際大会への出場は2015年5月のIBSAワールドゲームズ以来となります。



阿部学長と握手する齋藤さん（右）

韓国交通大学(世界武道アカデミー) 一行が来訪

4月25日(火)に韓国交通大学の教授4名と世界武術アカデミー研究員4名の計8名が来訪され、本学の現代武道学科との武道セミナーが開催されました。

同大学校は韓国忠州市にある国立の大学校(8大学)であり、世界武術アカデミー研究所も設置されています。大学のある忠州市では、ユネスコの無形文化遺産に韓国伝統「テッキョン」が登録されている関係から毎年「世界武術祭り」が開催されています。この世界武術アカデミー研究所もユネスコと武道に関して提携されていることもあり、世界各地で武道セミナーを開催し、今回は本学の現代武道学科との交流でした。この交流のきっかけは、3年前から本学科の集中講義「韓国伝統武道」を担当されている金址赫先生が同大の世界武術アカデミー研究員として勤務されていることから実現しました。



発表終了後の記念写真

セミナーの内容は、本学朴澤理事長、阿部学長、韓国交通大学南重雄教授のご挨拶、出席者の紹介、その後、藪先生の司会のもとに両大学から下記の4名による発表が行われました。

発表1 南條充寿教授：「日本の競技向上の現状と課題ーリオ五輪を振り返ってー」

発表2 Choi Yoon-seok (韓国交通大学 教授)：「Assessing essential factors influencing a diffusion process for Traditional martial arts」

発表3 齋藤浩二教授：「武道とはー戦後の『スポーツと武道』の関係からー」

発表4 Kim Ji-hyuk (世界武術アカデミー研究員)：「Taekwondo and martial sports」

発表時間は20分と短い時間でしたが、発表後の質疑応答では活発に議論が繰り広げられました。特に、「武道とスポーツ」の話題が取り上げられ、剣道はスポーツであるのか、指導は勝つためにおこなわれているのか、「わざ」と技術の概念の違いとは、テコンドーは武道なのか等々の内容でした。韓国においても武道の競技化、スポーツ化されているところが問題になっており、日本も韓国も、武道はスポーツと認識をしながらも異なる干渉点が論点となりました。つまり、伝統文化としての武道の関わりや競技化、スポーツ化しすぎているところに問題が生じている現状です。南條先生の発表からは、選手強化に取り組みについてであり、特にメダル取得者の共通する人物像についての興味ぶかい話が印象に残りました。

セミナー後は、場所を移動して歓迎会が行われ、互いの交流も深まり、先生方の人柄のよさと南先生を中心に結束されたことに感銘を受け、またこのような機会が来る事が望まれる一席となりました。

【報告：現代武道学科学科長 教授 齋藤 浩二】

平成29年度学術会総会

新任教員発表会・新任教員を囲む会を開催

5月30日(火)16時より、A棟2階大会議室において、平成29年度学術会総会・新任教員発表会・新任教員を囲む会を学術会運営委員会主催で開催いたしました。

本会には朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長をはじめ、多くの学術会会員の皆さまにご出席いただきました。司会進行は学術会運営委員の高橋徹講師が務めました。

第一部の「学術会総会」では、小松正子教授が議長を務められました。小濱明学術会代表幹事、学術会事務局より平成28年度の事業・決算について報告、平成29年度事業計画(案)・予算(案)を提案し、ご出席いただいた皆様よりご承認をいただきました。



佐々木教授の発表の様子

第二部の「新任教員発表会」では、6名の新任教員の先生方からお一人ずつ本学に着任されるまでの経歴や社会的活動、自らの研究活動についてなどを発表していただきました。大変興味深い内容にフロアからも質問が飛び交い、有意義な時間となりました。

(次頁につづく)

終了後は、「新任教員を囲む会」を同会場にて行いました。新任の先生方を囲み、限られた時間の中ではございましたが、親睦を深めることができました。終始和やかな雰囲気で行われ、盛会となりました。

【新任教員の発表内容】

- ① 佐々木 鉄男 教授
「これまでの歩みと、新しいメディアへの対応」
- ② 千葉 喜久也 教授
「これまでの研究とその内容」
- ③ 池田 敦司 准教授
「経歴と活動」
- ④ 荒牧 亜衣 講師
「東洋の魔女、オリンピック、そしてミュージアム」
- ⑤ 田中 政孝 特任講師
「警察術科等の指導経験を踏まえた応用武道授業への導入展開と効果について」
- ⑥ 菅野 恵子 助教
「これまでの活動報告と今後の研究について」

【報告：仙台大学学術会 広報係】

「奇跡のレッスン」LIVEが全国放送されました(5月4日：NHK・BS1にて) ～本学第5体育館を会場で実施・収録～

NHKの人気スポーツ番組である「奇跡のレッスン」ライブが、本学第5体育館を会場に実施・収録され、番組は5月4日にNHK・BS1で全国放送されました。

内容は、フットサルの元日本代表監督のミゲル・ロドリゴ氏による地元の小学校チームに対するフットサルのワークショップと、終了後のコーチや保護者たちに向けてのトークショーでした。

この番組を本学で収録する運びになったのは、本学卒業生で㈱イースリーというサッカーを中心とした事業を展開している会社に勤務する平木千尋さんから連絡を受けたことがきっかけでした。私が外部の組織や団体との連携・共同を担当していると知り、1年生のスキー実習で私の班だったことから直接連絡をしてくれたそうです。ゼビオアリーナ等でも収録はできたわけですが、少しでも本学のPRになればという思いで一報してくれた母校への熱い想いに打たれ、入学式直前という忙しいタイミングではありましたが、営繕管理室にも協力していただき、部活とも調整した上で実施した次第です。

番組は連休後半の5月4日に放送されましたが、写真の通り遊びを交えた技術の習得や的を得た個人個人への声かけや適切な指導など、さすがは世界の一流指導者のレッスンは魅力に溢れていました。

一方、この番組へはコーチングコースからスタッフ2名、マネジメントコースから12名の補助スタッフに関わり、貴重な実学の場を体験することもできました。朝から夕方までの時間帯でしたが、参加した学生スタッフも大いに満足したようです。また、フットサル部にも前夜のリハーサルや本番でのアシスタントコーチなどで全面的に協力頂きました。

これから先も、こういった卒業生から母校の発展を願う持ち込み企画に対しては、誠意を持って対応していかなければと思います。

【報告：副学長・体育学科長 教授 仲野 隆士】



子どもたちに指導するロドリゴ氏



運営スタッフとして活躍した学生



本学での撮影のきっかけとなった平木さん(右)

祝「日本体育協会アスレティックトレーナー」検定試験合格

～運動栄養学科より初めての現役合格:村上泰司さん～

平成28年度3月に本学の運動栄養学科を卒業し、Monthly Report3月号でもご紹介した村上泰司さんが、このたび運動栄養学科より初めての現役学生として見事、「日本体育協会アスレティックトレーナー」検定試験合格にしました。本学の現役学生としては、平成26年度に体育学科を卒業し、同試験に合格、現在新助手としてアスレティックトレーニンググループに勤務する遠藤皓樹さんに続いて2人目です。

村上さんは現在、米国公認のアスレティックトレーナー資格(Athletic Trainer Certified=ATC)を取得するために、ハワイ州オアフ島にあるハワイ大学大学院進学を目指し、英語の勉強をはじめ、実家のある旭川で準備を重ねており、今年8月には渡米する予定です。

村上さんは初めての挑戦での合格という快挙に対し、感謝と喜びの声を寄せてくれました。

Q1. 合格にいたる秘訣と合格しての感想

最初から諦めず、常に合格するイメージを持つこと、合格すると声に出して自分に言い聞かせるのが1番の秘訣ではないかと思います。これまで積み重ねて来たものがAT合格として形になりとても嬉しいです。

Q2. どのように勉強したのですか？

筆記では約4年分過去問題を解いて、出来なかった問題を集中して取り組み、苦手な分野をノートにまとめました。また、アプリで一問一答形式の問題があったため、細かい空き時間を使って解き、寝る前にノートにまとめた物を振り返って記憶に定着させました。

実技では、ATの先生方の指導の元、テーピングのポイントや外傷・障害の評価のうえで注意する事、アスレティックリハビリテーションの内容について実際のテスト形式で何度も練習しました。先生がいらっしゃらない時は、友達と実際に実技をしながら、復習しました。

Q3. 合格した後、周囲の反応はどうでしたか？

お祝いの言葉と同時に、これからが本当の勝負だとたくさんの方々から声をかけていただきました。

Q4. 今回の合格はハワイ大学大学院進学にどのようにプラスになると考えますか？

米国公認のアスレティックトレーナー資格カリキュラムは基礎を徹底的に教える事に加え実習時間も長いので、約3年間で得た知識を更に磨く事が出来ると共に、課題である応用力や実践力を身につけられると思います。また、日体協のカリキュラムとの違いについても今回の留学を通して、肌で感じる良い機会になると楽しみです。

Q5. 合格したことを自分のキャリアにどのように活かしていきたいですか？

日体協を取得することでチャンスの幅を広げられる

と思います。様々な所でATに関わる研究は行われており、日本で機会があった際は日体協としてアメリカで得た知識を活かしながら、より深い研究を重ねていきたいです。

Q6. 村上さんが2回参加した、ハワイ大学におけるアスレティックトレーナー研修などは、合格に活かされましたか？

はい。ハワイ大学における研修に参加し、今まで見学した施設などで、自分が実際に勉強しているイメージを持つことができ、常に高いモチベーションを保てました。

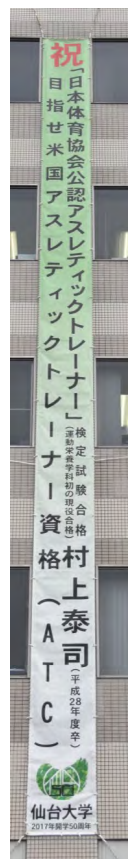
Q7. この資格を目指す後輩たちにメッセージをお願いします。

実技試験の練習等に協力して下さった後輩のみなさん、本当にありがとうございます。どんなに上手くいかない事があっても、諦めずそれぞれの目標に向かって頑張ってください。

Q8. 渡米を目前にしての今のお気持ちを教えてください。

この合格を通して、常に目標を持ち続ける大切さを改めまして実感する事が出来ました。

4年生の前期は大きな壁にあたり、目標を見失いかけた時に出てくるのは言い訳と中途半端な人生しかありませんでした。しかし、トレーナーコースの先生方が貴重なお時間を割いてこの様な自分と向き合ってくれたおかげで自分が本当にしたいものを見つけ、ここまで頑張る事が出来ました。合格にたどりついたのは、先生方に試験対策で様々なアドバイスを頂いたからにはほかなりません。日々の現場活動に加えて、米国公認のアスレティックトレーナーになり、AT普及に向けた研究をすると言う大きな目標を与えて下さった先生方、授業や試験対策をして下さった先生方、自分の留学に際し、ご理解下さった朴澤理事長・学事顧問、阿部学長、一緒に頑張った仲間や後輩に改めましてこの場をお借りし、心からの感謝を申し上げます。今後、ハワイ大学大学院へ進学し、精一杯勉学に励むことで、少しでも母校である仙台大学のみなさまへ恩返しできたらと考えております。



合格のお祝いと今後の活躍を期待して掲げられたのぼり



むらかみ たいじ

村上 泰司さん

出身高校

北海道・旭川南高校

経歴

平成29年3月

本学運動栄養学科卒業

祝 菊地新助手が管理栄養士国家試験に見事合格

3月19日に行われました第31回管理栄養士国家試験に見事合格した本学新助手の菊地遥さんに合格の感想などを伺いました。

Q1. 管理栄養士を目指したきっかけは？

中学生の頃にスポーツ栄養士の存在を知り、食事の面からスポーツ選手を支えることに、魅力を感じました。私自身、中学から高校まで陸上部として活動をしてきましたが、もともと身体が小さく、練習量に対する食事をとることが出来ていませんでした。貧血等に悩んだこともあり、スポーツ選手にとっての栄養の大切さを身にしみて実感していました。また、競技をする上で貧血や怪我だけでなく、摂食障害に苦しむ選手がいることを知りました。スポーツ選手を助けることができる栄養士になりたいという想いが強く、スポーツと栄養の両面を学ぶことができる仙台大学運動栄養学科を志望しました。大学入学後は運動栄養サポート研究会に所属し、スポーツ選手を実際にサポートする経験をすることで、スポーツ選手の栄養サポートには高度な専門知識や、実践能力が必要であることを改めて実感しました。そこで、大学卒業後は必ず管理栄養士の資格を取得しようと志しました。大学卒業後、運動栄養学科の新助手として採用していただき、管理栄養士を目指しながら受験資格に必要な実務の経験と、試験の勉強を行ってきました。

Q2. 勉強のポイントはどういうところにありますか？

管理栄養士国家試験を意識して本格的に勉強を始めたのは、大学4年生の夏頃からでした。大学卒業後、1年で必ず合格すると決意し、試験までどう勉強するか、いつまでにどのくらい実力をつけるか、具体的な目標と計画を立てました。定期的に過去問や模試を解くことで、問題の傾向を分析するとともに、目標に対して自分がどの位置にいるか確認を行いました。

社会人として仕事をしながら試験勉強を進めるにあたって、時間の管理も重要となります。限られた時間を有効にする工夫をしました。要点が簡易的にまとめられ、携帯性に優れた参考書を常に持ち歩き、時間を見つけては勉強をするようにしました。時間がとれるときは、詳細な解説や語句解説も充実した別の参考書を活用し、出題範囲の広い科目や内容が重複している分野、苦手分野は自分が納得するまで繰り返し学習するよう心がけました。

Q3. 合格の感想と今後の豊富をお願いします。

中学生の頃から夢を追い続け、管理栄養士としてスタートラインに立つことができたのは、先生方のご指導や、周りの方々の応援や支えがあったからこそだと思います。自分自身を成長させてくれた皆さんに、感謝の気持ちでいっぱいです。

試験に合格したものの、まだまだ未熟な部分がありますし、管理栄養士として求められる専門的な知識を深めていく必要があります。常に向上心を持ち、学び

続ける姿勢を大切にしていきたいです。また、今後は公認スポーツ栄養士の資格取得を視野に入れ、競技者の栄養・食事に関する専門的な知識や、栄養マネジメントスキル等を身につけたいと考えています。

Q4. 管理栄養士を目指す後輩たちにメッセージをお願いします。

まずは、自分の目標を明確にし、目標を達成するために必要なプロセスを考え、強い意志を持って根気強く取り組むことが大切だと思います。なぜ管理栄養士になりたいのか、自問自答しながら目的を確認すると、今の自分がすべき行動を積み重ねていくことができるのではないかと考えます。私自身も、夢の実現に向けて今後取り組むべきことがたくさんあります。夢を叶えるために、一緒に頑張りましょう。

山谷幸司学運動栄養科長より

菊地さん、今後益々の活躍を期待します。管理栄養士を目指す皆さんは合格した先輩から、多くを学んでください。



きくち はるか
菊地 遥さん
出身高校
宮城・聖和学園高校
経歴
平成28年3月
本学運動栄養学科卒業

なお、昨年まで本学で運動栄養学科新助手として勤務していた只野瑞枝さん（平成26年3月運動栄養学科卒）も見事合格しました。

只野さんからのコメント

この度、管理栄養士国家試験に二回目の挑戦で合格することができました。

合格までの道のりは簡単なものではありませんでしたが、ここがゴールではなく新たなスタートとして捉え、管理栄養士として多くの方々の役に立てるよう日々精進して参ります。応援ありがとうございました。

東北大学バレーボール男女リーグ戦 第50回記念大会を本学を会場に開催

4月29日(土)、30日(日)に第50回東北バレーボール男女リーグ戦記念大会および式典が本学第五体育館を会場に行われました。

バレーボールのリーグ戦は年2回、春季および秋季リーグ戦として行われ、東日本インカレや全日本インカレに関係する大変重要な大会です。かつては東北の北と南で分けて行っていたものを統一し(1部のみ)、そこから50回という回数を重ねました。

今回の第50回記念大会には東北リーグに所属している1部～4部の男女すべてのチーム(59チーム)が一堂に会し熱戦を繰り広げました。当日は男女バスケットボール部、男女ハンドボール部、営繕管理室等、多くの関係者のご協力のおかげもあり、第二・五体育館および船岡体育館で計7面のバレーボールコートで開催することができ、大変盛り上がる大会となりました。

さらに期間中、本学のAT部とも連携を図り第五体育館に選手のテーピングやアイシングなどを気軽に行えるATブースも設置し、多くの利用者が訪れ、仙台大学の特徴を十分活かすことのできた素晴らしい大会となりました。

【報告：男子バレーボール部コーチ 新助手 中村 祐太郎】



59チームが一堂に会し開催された記念式典



**2020東京五輪に向けて
～活躍が期待される新入生～**

ウェイトリフティング部 福塚 真羽さん

東北高校選手権2連覇、全日本女子選抜選手権75^{kg}級で準優勝の実力をもつ福塚真羽さん。大学入学後初の大会となった第29回全日本女子学生ウェイトリフティング選手権大会では1年生ながら強豪校の上級生らをおさえ、堂々の3位入賞を果たしました。

5月28日には「全日本女子選手権大会」にも出場しました。この大会は世界選手権を懸けた国内において最高峰の大会で、特に福塚さんの階級は選手層も厚く、今大会においては社会人も含めた年代別チャンピオンや高校生チャンピオンが上位を独占し9位という結果に終わりました。高校時代から男子と同じ練習メニューをこなし自分に厳しく練習を重ねてきた福塚さん。指導するウェイトリフティング部の壺岐監督も「順調なペースで来ているので、焦ることなく練習に励んでほしい。これから確実に伸びる選手。」と太鼓判を押します。東京五輪にむけて確実に自己記録を更新しながら益々の飛躍が期待されます。



ふくつか まう
福塚 真羽さん(体育学科1年・秋田県金足農業高校出身)

初出場の「全日本女子選手権大会」では75kg級9位という結果で悔しい思いをしました。5か月後に控える10月の全日本学生新人大会ではトータル180kg(スナッチ80kg+ジャーク100kg)を目標に挙げ、まずは最低でも優勝を狙います。

テコンドー部 猪飼 令央さん

オリンピック正式種目でもあるテコンドー競技。本年度からテコンドー部が新設されました。現代武道学科1年の猪飼令央さんは全日本ジュニアテコンドー選手権大会2年連続優勝の実力の持ち主で2020東京五輪を見据え本学へ今年4月に入学。小学1年で空手を始め、足技が得意であることから師範の勧めで中学1年からはテコンドー競技を始めました。テコンドー競技は多彩な足技が魅力の一つで一試合2分3ラウンドのポイント制で勝敗が決まります。高校ではテコンドー専攻科のある新潟県開志学園高校を選び、より専門的な知識も身につけてきました。

タイ王国で開催された入学後初の国際大会では小規模大会ながらも58kg級で堂々の1位と2位を獲得し、テコンドー部部長の末永教授と副部長の金講師とともに阿部学長のもとへ大会の報告を行いました。今後益々の活躍が期待されます。



いかい れお
猪飼 令央さん (現代武道学科1年・新潟県開志学園高校出身)

「第7回ラチャブリーオープン2017」と「ホアヒンオープン2017」の大会はいずれもタイで元五輪代表選手が主催する大会で、大会の間には代表選手が集う強い道場で、稽古をさせていただきました。タイの選手はスタミナとパワーが格段に上なので今後は自分自身も身体づくりを強化していかなければならないと感じています。

今後は2020年の五輪出場を目指し、9月3日から岐阜県羽島市で開催される「全日本学生選手権大会」で優勝を狙います。海外赴任が長い父親の影響もあり、大学では中国語なども習得し、文武両道で将来は世界で活躍できる人材になりたいです。

学生の活躍

漕艇部 全日本軽量級選手権大会男子エイトで準優勝など4種目で入賞

5月26日～28日に埼玉県戸田ボートコースで開催された第39回全日本軽量級選手権において下記4種目の入賞を勝ち取ることができました。競技継続しているOBの結果も併せて記します。

大会期間中にはOBも駆けつけ、心強いサポートも受けています。

仙台大学の結果

男子エイト	準優勝	(優勝：明治大、3位：一橋大)
女子クォドルプル	第3位	(優勝：明治大、2位：法政大)
女子ダブルスカル	第4位	(優勝：明治安田生命、2位：筑波大、3位：早稲田大)
男子舵手なしフォア	第5位	(優勝：東レ、2位：東北大、3位：NTT東日本、4位：日大)



準優勝した男子エイト (手前から2艇目)

OBの結果

- ・渡邊 勝裕 (平成19年体育学科卒、NTT東日本) 舵手なしフォア 第3位
- ・別府 晃至 (平成21年体育学科卒、今治造船) ダブルスカル 第3位
- ・大元 英照 (平成19年体育学科卒、アイリスオーヤマ) ナショナルチーム評価トライアル
ワールドカップ第2戦から参加決定
- ・西村 光生 (平成24年体育学科卒、アイリスオーヤマ) ナショナルチーム評価トライアル
ワールドカップ第3戦から参加決定

【報告：漕艇部監督 教授 阿部 肇】

学生の活躍

硬式テニス部 邊見文香さんが東北大会3位入賞 ～シングルズで9年ぶりのインカレ出場決定～

このほど開催された東北学生春季テニストーナメント大会において、硬式テニス部の邊見文香さん（体育学科1年 - 福島県・日本大学東北高校出身）が女子シングルズで第3位に入賞し、8月7日～13日に岐阜県で開催される全日本学生テニス選手権大会（インカレ）の出場権を、仙台大学として実に9年ぶりに獲得しました。

邊見さんは、お母さんやお姉さんの影響を受け小学校3年生から硬式テニスを始め、めきめきと腕を挙げてきました。高校時代には3年連続インターハイに出場し、3年生の時には団体でベスト16に入るなど、東北として稀にみる快挙を挙げました。

柔道整復師をめざし専門学校への進学を考えていた邊見さんですが、大会会場で硬式テニス部監督の佐藤周平先生に声を掛けられ大学への進学を考え始めたといいます。実際にクラブ体験会に参加してみると「練習環境はもちろん、先輩方の雰囲気もものすごくよかったです。」と、仙台大学への入学を即決したのだそうです。

大学入学後も集中してトレーニングや朝・夕方練習を行うことで、1年生にして見事、インカレの出場権を獲得した邊見さん。「まずは1勝することが目標。4年後にはベスト16に入れるように頑張りたいです。」と力強く語ってくれました。

硬式テニス部に現れた“新星”の活躍に佐藤周平監督も「テニスは個人スポーツですが、練習はチームで行います。どんなに強い選手が入学しても、その選手に仲間と努力・挑戦する気持ちがなければ、良い影響はありません。邊見はそれが自然と出来る選手です。新しい刺激を受け、大学時代で確実に成長します」と大きな期待を寄せています。



3位に入賞しインカレ出場を喜ぶ邊見さん

ウェイトリフティング部 第三回荘内日報社杯に出場 大津選手が自己新記録更新し94kg級で優勝

4月22日（土）に山形県鶴岡市羽黒体育館で開催された「第3回ウエイトリフティングフェスティバル in SHONAI」に本学ウエイトリフティング部（男子部員2名、職員2名）が出場しました。阿部芳吉学長も会場に駆け、大きな声援で選手を鼓舞されました。

男子94kg級に出場した大津恭輔選手（体育4年 - 宮城・石巻高校出身）がC&J種目の3本目に145kgを成功させて優勝を決めました。大津選手は自己新記録を5kg更新し、トータル重量も昨年の大会より20kg増加させるなどめざましい成長が見られました。

男子69kg級は、村松コーチがスナッチ100kg、C&J120kgの記録を出し、小川純選手（運動栄養学科4年 - 山形県・酒田高校出身）の記録（スナッチ95kg、C&J120kg）にトータルで5kg差をつけて優勝しました。

男子77kg級に出場した壹岐は、体重を3kg減量しながらもスナッチ100kg、C&J125kgを成功させて優勝するに至りました。

男子85kg級に出場した大谷祐希選手（スポーツ情報情報メディア学科3年 - 宮城・柴田高校出身）は、怪我を抱え、十分な練習ができていない状態でしたが、自己新記録にも挑戦し準優勝を果たしました。

【報告：ウエイトリフティング部 監督 新助手 壹岐 優】



男子94kg級で優勝した大津選手

学生の活躍

ウェイトリフティング部 福塚選手が全日本学生個人選手権大会で3位入賞

4月28日～30日に羽曳野コロセアム（大阪府）で開催された「全日本学生個人選手権大会、全日本女子学生選手権大会」で期待の新生、福塚真羽選手（体育学科1年 - 秋田・金足農業高校出身）が女子75kg級で3位入賞しました。

今大会は、ユニバーシアードの選考会となったため、出場選手のほとんどが日本代表や大学トップレベルの選手でした。福塚選手は、高校時代（全国大会2位）の経験を活かし、スナッチ68kgで4位、クリーン&ジャーク87kgで3位、トータル155kgで3位に入賞し大学のデビュー戦で表彰台に上ることができました。

女子53kg級に出場した渡部詩乃選手（体育学科3年 - 山形・鶴岡北高校出身）は、クリーン&ジャーク種目で5位入賞しました。女子58kg級に出場した大野美幸（健康福祉学科2年 - 宮城・柴田農林高校出身）は、クリーン&ジャーク種目で73kgを挙上し入賞までは届かなかったものの、4大会連続で自己記録を更新しました。

全日本個人選手権に初出場した保科魁斗選手（体育学科2年 - 宮城・村田高校出身）は、男子105kg級のクリーン&ジャーク種目で150kgを成功させ、8位に入賞しました。保科選手は昨年11月に出場した全日本大学対抗選手権大会（二部）に比べ、トータルの記録において15kgと大幅に更新しており、今後の成長も十分に期待できます。

なお、会場には、阿部学長、高成田部長も駆けつけ、選手に気合いが入る応援を送っていただきました。

【報告：ウェイトリフティング部 監督 新助手 壹岐 優】



3位に入賞し表彰台に上る福塚選手

ウェイトリフティング部 全日本女子ウェイトリフティング大会に出場 ～福塚選手が堂々の8位入賞～

5月26日～28日に栃木県小山市で第31回全日本女子ウエイトリフティング選手権大会が開催され、本学からは福塚真羽選手（体育学科1年 - 秋田・金足農業高校出身）が女子75kg級に出場しました。

この大会には各階級の基準記録を突破した10名のみが出場することができ、世界選手権の選考も兼ねています。福塚選手は出場条件が厳しい本大会に1年生ながら出場し、クリーン&ジャーク種目の2回目に89kgの挙上に成功し、8位入賞を果たしました。スナッチは、69kgで9位、トータル158kg9位という結果でしたが、3位に入賞した全日本女子学生選手権大会からトータルで3kgも自己記録を更新する成長を見せてくれました。

今回の大会出場を通じて、上位に入賞した日本代表選手とは大きな差があることを改めて痛感したものの、日本新記録が達成される緊張感のある大会に出場できたことは今後の活動にとって貴重な経験であり、今回の悔しさをバネにさらに成長してほしいと考えています。



8位に入賞した福塚選手

【報告：ウェイトリフティング部 監督 新助手 壹岐 優】

学生の活躍

硬式野球部 仙台六大学野球春季リーグ戦惜しくも全国の切符を逃す

4月8日に開幕した仙台六大学野球春季リーグ戦で、本学硬式野球部は最終節で東北福祉大学に敗れ、昨年秋からの連覇達成は叶いませんでした。

最終節まで全勝と波に乗っていた本学は、最終節の東北福祉大戦1回戦で7対3で勝利。しかしその後の試合で2連敗を喫してしまいました。

各試合には多くの同窓生などの本学関係者が会場まで駆けつけてくださり、選手が頑張る姿に声援を送っていただきました。

なお、大会終了後に行われた閉会式ではベストナインが発表され、4名の選手が選出されました。また、最多盗塁賞（8個）に郡安輝内野手（体育学科3年－東京・帝京高校出身）が選ばれました。

硬式野球部は今後、6月24日（土）～25日（日）に開催される春季新人戦、6月29日（木）～7月2日（日）に開催される第12回東北地区大学野球選手権大会に出場することになっています。選手たちの成長と今後の活躍を応援しています。



ベストナインに選ばれた岩佐投手

ベストナイン（仙台大学関係分）

ポジション	氏名	学年 - 出身高校
投手	岩佐 政也	体育学科4年 - 宮城・柴田高校
捕手	辻本 勇樹	体育学科3年－北海道・北海高校
三塁手	望月 隆晟	体育学科3年－千葉・東海大浦安高校
外野手	白川 拓海	体育学科4年－茨城・霞ヶ浦高校

ベラルーシ新体操チームヘッドコーチらが来学 ～事前合宿に関する協定書を締結～



協定書への署名後の記念撮影（中央がレパルスカヤヘッドコーチ）

6月14日（水）にベラルーシ共和国ナショナル新体操チームのヘッドコーチであるイリーナ・レパルスカヤさんと同体操協会体操協会職員のヴィクトリア・イマナリさんが仙台大学を訪問されました。

このほど、ベラルーシ新体操チームは2020東京オリンピックの事前合宿を白石市と柴田町（仙台大学）にて2018年より2020年までの3年間実施することを決め、「第32回オリンピック競技大会事前合宿に関する協定書」の締結、及び会場の視察のために来日されました。14日の午前中には白石市で協定書の締結式と白石市ホワイトキューブを視察。同日午後には本学を訪問され、第五体育館やトレーニングセンター、ATルーム等の施設を念入りに視察されました。なお、今年は10月7日に東北子ども博と同時に本学第5体育館で、8日には白石市ホワイトキューブを会場に「新体操代表選手によるエキシビジョン」を開催する予定です。

また、夕方からは柴田町内にあるホテルを会場に、仙台大学・白石市・柴田町の関係者、ベラルーシ共和国の首都ミンスク市と姉妹都市となっている仙台市および宮城ベラルーシ協会の関係者など総勢34名による交流会が開かれ、スポーツの枠を超えて白石・柴田とベラルーシの相互交流がスタートしたことを確認し合うことができました。



本学来訪の記念撮影（LG棟にて）

【報告：柴田町創生事業支援プロジェクトチーム】

〈目次〉

・ベラルーシ新体操チームヘッドコーチらが来学	1
・中井憲治氏、遠藤保雄氏の「春の叙勲をお祝いする会」を開催	2
・留学生日本文化体験ツアーを開催 ・仙台大学開学50周年記念行事⑥ ・七十七銀行陸上競技記録会を開催	3
・船岡小学校でレクリエーションダンス指導 ・東船迫中学校の生徒が職場体験	4
・水泳部 星選手がデフリンピック日本代表選手に選出 ・柔道部が花いっぱい運動に参加 ・熱中症にご注意を	5
・台東大学空学生が来訪 ・バドミントン部が優勝報告 ・学科一日体験会が開催されます	6
・日本教授学習心理学会開催	7

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

中井憲治氏・遠藤保雄氏の「春の叙勲をお祝いする会」を開催

6月22日、仙台市内において、この春叙勲された学校法人朴沢学園理事・仙台大学客員教授の中井憲治先生(瑞宝重光章)および仙台大学上級リサーチャー・東京事務所長の遠藤保雄先生(瑞宝中綬章)をお祝いする会が賑やかに開催されました。

会には、お2人の母校である仙台一高の17回生、法人事務局、明成高校、仙台大学の教職員など約60名が集まり、仙台一高27回生の池田敦司准教授の司会でスタートしました。最初に発起人である17回生五十嵐善正氏より「高校の同級生からこのような立派な褒章を受けたお2人が誕生したことは非常に喜ばしく、母校の誉です」というご挨拶がありました。次いで、同じく17回生佐々木直哉氏の乾杯により参加者が祝杯を挙げました。

その後、小松正子教授・菊地直子准教授・柴田千賀子准教授から花束贈呈を、また、高成田享教授のご祝詞、17回生の小室良太郎前コンサルタントの祝歌、ピアノ演奏者のジャズなどで、祝う会は進行了ました。

受章者の遠藤先生からは、「このような会を催していただき感謝感激です。仙台大学で教鞭をとるまでは、国、特に、霞が関に身を置き、種々貴重な経験をさせて頂きました。若いときにハーバード大の研究機関に派遣され、今、閣僚として活躍している方と机を並べて議論する機会を得たこと、80年代後半に米国ワシントンDCで大使館に勤務し厳しい農産物貿易自由化交渉を経験する中で、米国政治の意思決定過程を直接この目で見る事が出来たこと、国連関係の業務も経験し、90年代半ばの世界食糧サミットでの論戦への参加や、途上国援助の経験の中で、日本は経済大国とはいえ160国のうちの1国に過ぎないという国際社会の厳しい現実を突き付けられたこと・・・など多くの思い出があります。このような経験をし得たのは、かつて仙台で学び、皆様から多くのご恩を頂いたからと強く感じています。これから、そのご恩には仙台大学で教鞭をとることで少しでも報いることが出来ればと思っています」というお礼の言葉が述べられました。

続いて中井先生からは、「多くの方々のご支援を受け、この度、叙勲の栄に浴しました。深謝いたしております。加えて本日、このようなすばらしい席をもうけていただき感激です。(現)栗駒市の細倉中学から仙台一高に学んだ青春の日々が思い起こされ、ここ仙台の地で明日の人材育成のお手伝いができる幸せを、あらためて実感します。叙勲直後、名古屋の剣道七段審査では、四度目の桜散りましたが、今宵、皆様のご芳情に鼓舞され、さらに修練を重ねたい所存です。今後とも、よろしくご指導、ご高配のほど、お願い申し上げます。本当にありがとうございました」とそれぞれ謝辞がありました。

最後に発起人の朴澤理事長・学事顧問より、「我々の高校時代の学年主任だった今は亡き恩師の金沢規夫先生は、我々生徒に対し、何事も先陣を切ることが仙台一高の伝統であり常に心がけるべしと諭されたが、本学園に縁のある同期二人がこの伝統を継承したことを記念し祝賀会を企画したところ、多数のお集まりを得てお祝いが出来たこと、大変、感謝申し上げます。」とご挨拶があり、和やかなうちにお開きとなりました。



法人事務局、明成高校、仙台大学の教職員と共に
(中井先生は前列左から2人目、遠藤先生は同3人目)



仙台一高17回生と共に笑顔の中井先生(前列右)と遠藤先生(同左)

留学生日本文化体験ツアーを開催

6月18日（日）に登米市歴史資料館および登米伊達家にて日本文化体験ツアーが行われました。この会は本学客員教授である伊達宗弘先生に登米市の歴史的な建造物や一級河川である北上川を案内していただき、留学生に日本の伝統文化や歴史を学んでもらおうという趣旨で定期的に行われています。

朴澤理事長・学事顧問をはじめ、留学生や教職員も含め計26名の参加者が集まり、当日は天候にも恵まれ、無事にすべての建造物を見学し、各展示では、担当の方から許可を頂き、写真やビデオ撮影を行いました。

登米市に到着後、国指定重要文化財である尋常小学校へ向かうと、留学生は手動のミシンや黒電話などを実際に手にとり、また当時の教室を再現した展示では袴を試着して写真を撮るなど、昔の道具や衣服に大変興味を示しているようでした。昼食の後、伊達家ゆかりの鎧や兜などの武具が展示されている登米懐古館へ向かい、武具や絵画を真剣な表情で見ている様子が伺えました。武家屋敷・春蘭亭では、抹茶と和菓子をいただくことができ、留学生はお茶の苦さに驚く人もいれば、和菓子をお土産用に購入するなど、反応はさまざま



明治時代の衣装で記念撮影

でした。北上河湖畔では、留学生は各々の景色を眺めたり、たくさん写真を撮るなど、散策を楽しんでいました。伝統芸能伝承館である森舞台では、登米町に

代々伝わる「登米能」などが盛んで、長年大切に受け継がれています。この舞台を設計したのは隈研吾（くまけんご）氏で、2020年の

東京オリンピック・パラリンピックに向けた新国立競技場の設計にも携わっています。

一通り資料館を見て回り、最後に伊達先生のご自宅を拝見させていただきました。登米伊達家に代々伝えられている日常用品や中国の秦の時代の硬貨など、普段目にするのできないものがたくさん展示されており、まるでひとつの資料館のようでした。また、ご自宅で飼っている蜜蜂から作られた、はちみつを試食させていただき、留学生は驚きながらも、美味しそうに食べていました。

留学生にとって今回のような機会は、とても貴重な時間だと思います。日常生活では得られない知識や体験は、留学生にとってこれからの財産になっていくことでしょう。

【報告：学生支援センター 大久保 成実】



ツアーに参加した留学生達

仙台大学開学50周年 同窓会記念行事◎

「七十七銀行陸上競技記録会チャレンジ2017」を開催

6月4日（日）七十七銀行記録会チャレンジ2017を、弘進ゴムアスリートパーク（仙台市陸上競技場）にて、七十七銀行陸上競技部と仙台大学の共催で開催しました。チャレンジ第10回と仙台大学創立50周年の記念大会となる今大会では、約100名の陸上競技部員が競技役員として大会の運営に携わりました。陸上競技部は、地域貢献の一環として本学陸上競技場にて定期的に陸上競技会を開催していますが、本大会はこれまでに経験したことのない1日で2,000人の参加者、タイトな競技日程、慣れない競技場など、不安な点がありましたが、しっかり計画準備をし、大会中も様々な状況やトラブルに対処しながら、大きな滞りなく運営することができました。参加者や引率者には多少の心配や迷惑をかけた点もあったかと思いますが、これだけ大規模な競技会を陸上競技部員だけで運営できたことは、学生たちにとって大きな自信につながったと感じています。

七十七銀行記録会チャレンジHP (<http://77challenge.sendaiutf.org/>)

【報告：陸上競技部監督 講師 門野洋介】



競技審判も務めた陸上部員

東船岡小学校でレクリエーションダンスを指導 ～ 21名の学生スタッフが参加～

6月24日（土）東船岡小学校で全校児童332名を対象とした「レクリエーションダンスによるコミュニケーション能力の向上を図るイベント」の指導を本学学生21名が行いました。

このイベントは、本大学の学生が全校の児童にダンスを指導することで、児童同士の信頼関係や、円滑なコミュニケーションのとり方を学ばせるという趣旨で行われました。

主なダンスの内容は、「あいうえお体操」と「エバダンス」で、児童にまずパフォーマンスとしてダンスを見せ、次に16班に分かれた児童の中に学生が一人ずつ混ざり、音楽に合わせてダンスを教えていくという流れでした。

東船岡小学校の榊原教頭先生がユーモアあふれる進行をしてくださり、楽しい雰囲気を出しながら、本学の学生がとびっきりの笑顔でダンスパフォーマンスをすると、児童たちは目を輝かせていました。

各班に分かれて行う「エバダンス」では最初こそ指示が通らない、動き方がわからないなどの不安な部分がありましたが、動きを覚えた5、6年がわからない児童に教えていたことで、最終的にすべての班が楽しんで踊っている姿が見受けられました。

教頭先生に一番上手に踊れた班を決めてもらうことになったとき、消極的な子どもや積極的な子どもも、1番を目指すために一生懸命取り組んでいました。

本学の学生たちも小学生の関わりを通して、自分ができていること、わかっていることを教えることの難しさや、コミュニケーション能力の向上の大切さを同時に学ぶことができたのだと思います。

それぞれの進路や将来の夢を達成するために、今回のような経験は学生たちにとって、必ず活かされることでしょう。 【報告者：学生支援室 大久保成実】



児童にレクリエーションダンスを指導する学生

船迫中学校の生徒が本学で職場体験 ～ 2名の生徒がLC棟の取材レポートを投稿してくれました～

私たちは6月28日（水）と29日（木）の二日間、仙台大学で職場体験を行いました。職場体験では、図書館での図書整理作業や入試創職室での求人票整理作業などを行わせていただきました。広報室業務の体験では取材体験をさせていただきましたので、その体験で作った記事を紹介したいと思います。

今回は仙台大学で最も新しい施設である「LC棟」について取材しました。LC棟は平成28年1月に竣工した施設で、LC棟とはラーニング・commons (Learning Commons) の略で、自習やグループ学習用の設備や器具などが準備された学習空間という意味ということでした。このLC棟では学習やミーティングの他、オリンピックの際のパブリックビューイングや記者会見など様々な形で使用されているそうです。

LC棟の中で最も注目すべき施設は「プレイルーム」です。ここでは大学で働く教職員の子どもの一時的預かり保育室で、現在は9名の子どもたちを保育士1名と保育補助2名で預かっているということでした。私たちが見学に行ったときにはちょうどお昼寝の時間で中の様子を詳しく見ることはできませんでしたが、プレイルーム内には木を使った遊具を多く取り入れているということが分かりました。

今回の取材を通して、中学校よりも大きな施設があることに驚き、また、プレイルームなどは学生だけでなく教職員にも優しい施設であると感じました。

二日間の職場体験では大変お世話になりました。今回の体験で学んだことを将来に生かしていきたいと思っています。



図書整理を行う伊東さん（上）と伊藤さん
写真提供：柴田町立船迫中学校

【記事作成：柴田町立船迫中学校2年 伊藤、伊東】

デフリンピック2017水泳日本代表に星 泰雅選手が選出 ～阿部学長を表敬訪問～

トルコのサムスン市において7月18日～30日に開催される「デフリンピック2017トルコ・サムスン大会」へ水泳競技の日本代表選手に星 泰雅さん（体育学科1年-東北高校出）が選出されました。デフリンピックは4年に1度開催される聴覚障がい者の国際的総合スポーツ大会で、夏季デフリンピック大会は1924年にフランスで第1回大会に開催されてから今回で23回を数えます。

6月16日（金）には、水泳部の渡邊泰典部長とともに阿部学長を表敬訪問しました。

星選手は50M自由形、100M自由形、100Mリレー、メドレーリレーの4種目に出場する予定で「個人では決勝に残ることが目標。二つのリレーでは金メダルをとりたい。飛び込みに課題があると感じているので、課題を少しでもクリアしタイムを縮めたい」と大会への抱負を述べました。阿部学長からは「デフリンピックでの活躍を期待しています。伸び伸び頑張ってきてください」と激励の言葉がかけられました。

一般社団法人 日本ろう者水泳協会<https://deaf-swim.com/>



日本代表に選出されたことを阿部学長に報告した星選手（中央）

花いっぱい運動に柔道部が参加

6月2日（金）「柴田町環境美化花いっぱい運動」に柴田町商工会女性部と仙台大学柔道部の学生が参加しました。当日は、船岡駅前での花の植え替え作業のち、植え込み作業を行ったプランターを路上に並べました。初めのうちは花の植え替えや植え込み作業に手間取っていた学生達ですが、すぐに慣れて途中からは要領よく作業を進めていました。作業中は柴田町商工会女性部の方と学生たちは談笑しながら楽しく作業を進め、地域の方との交流という意味でも非常に良い機会であったと思います。今回の運動が町内の環境美化並びに地域の活性化の一助となれば幸いです。



気持ちを込めて植えました



商工会女性部の皆さんと

【報告：学生生活室 加藤琢磨】

熱中症にご注意を！

～今年もATルームから熱中症速報を配信～

6月26日（水）より、ATルームから「熱中症速報」が配信されています。この速報は第一体育館、第二体育館、第五体育館、陸上競技場、ラグビー・サッカー場の5か所のWBG T値（湿球黒球温度）を計測し、熱中症予防運動指針を学内にメール配信並びに、計測場所に掲示しているものです。

本格的な梅雨を迎えて熱中症のリスクも高まってきている季節です。ATルームからの熱中症速報を参考にし、本学からの「熱中症ゼロ」を目指しましょう。

なお、この速報の配信は9月25日（月）まで行われる予定です。

熱中症予防のために

暑さを避ける

室内では・・・ ▶ 扇風機やエアコンで温度を調節 ▶ 遮光カーテン、すだれ、打ち水を利用 ▶ 室温をこまめに確認 ▶ WBG T値も参考に	外出時には・・・ ▶ 日傘や帽子の着用 ▶ 日陰の利用、こまめな休憩 ▶ 天気のよい日は、日中の外出をできるだけ控える
--	---


からだの暑熱を避けるために

▶ 通気性のよい、吸湿性・速乾性のある衣服を着用する
▶ 保冷剤、氷、冷たいタオルなどで、からだを冷やす

※WBG T値：気温、湿度、輻射（放射）熱から算出される暑さの指標
運動や作業の量に応じた基準値が定められています。
掲載者のホームページ（熱中症予防情報サイト）に、観測値と予想値が掲載されています。

こまめに水分を補給する

室内でも、外出時でも、のどの渇きを感じなくても、こまめに水分・塩分・経口補水液などを補給する
※水に食塩とナトリウムを溶かしたもの



熱中症の症状

○めまい、立ちくらみ、手足のしびれ、筋力のこむら返り、気分が悪い
○頭痛、吐き気、嘔吐、倦怠感、虚脱感、いつと様子が変わる重症になると、
○返事がおかしい、意識消失、けいれん、からだが熱い

詳しくは、厚生労働省ホームページ「熱中症関連情報」をご覧ください。

厚生労働省 熱中症

厚生労働省ホームページより

台湾・台東大学から22名の学生が来訪

6月23日（金）～30日（金）に本学の国際交流提携校である台東大学（台湾）から程鈺雄教授を団長に22名の学生が本学を訪問しました。

今回の来学した学生の専門分野は特別支援教育で、「台湾と日本における特別支援教育や社会福祉施設の違い」を学ぶための来学となりました。

滞在期間中には船岡支援学校や宮城県立視覚支援学校など計5箇所を訪問し、日本における社会福祉事情を一生涯懸命に学ぶ姿が見られました。

また、施設訪問の合間には本学学生との交流の機会もあり、大変有意義な時間を過ごしている様子でした。

【報告：事業戦略室 遠山知寿】



台東大学の学生たち

東北学生バドミントン春季リーグ戦の優勝などを学長へ報告

東北学生バドミントン春季リーグ団体戦I部男子2位、個人戦女子シングルス優勝・ダブルス優勝を果たした4名が6月16日（金）に阿部芳吉学長を表敬訪問しました。

星野博行さん（体育学科4年一青森・青森山田高出）は「6年連続インカレ出場を決めたので、インカレでは1試合ずつ大事に戦いたい」。新主将の井川零士さん（体育学科3年一北海道江陵高出）は「インカレでは上位を目指したい」と話し、女子ダブルスを制した松田ほのかさん（体育学科2年一宮城・尚絅学院高出）と女子ダブルスと女子シングルスで優勝を果たした徳能あすかさん（現代武道学科1年一宮城・聖ウルスラ学院英智高出）は「インカレでは関東勢に負けないよう1つでも多く勝ち進みたい」と抱負を述べました。阿部学長からは「今後も練習を重ねインカレでも大いに頑張ってもらいたい。」と激励の言葉がかけられました。



阿部学長に春季リーグの報告をしたバドミントン部員たち

今年も「学科一日体験会」を開催されます

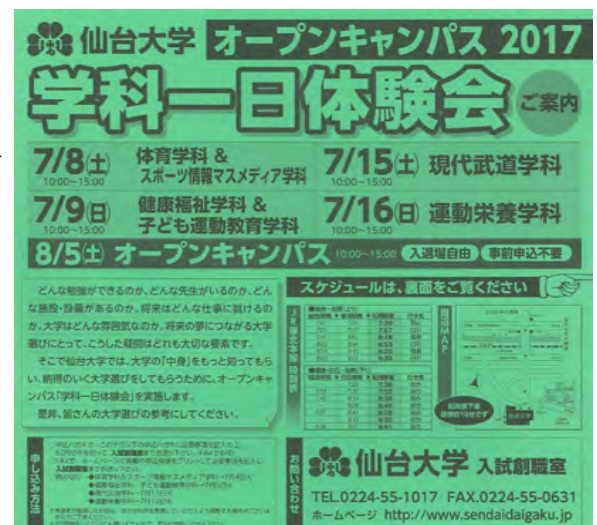
今年も毎年恒例となっている「学科一日体験会」が開催されます。この学科体験会は仙台大学の「中身」を知ることを通じて、どんな勉強ができるのか、どんな先生がいるのか、将来はどんな仕事に就けるのかなどといった疑問解決のお手伝いするオープンキャンパスです。

当日はそれぞれの学科で特徴ある講義や実技のプログラムをご用意して高校生の皆さんをお待ちしております。

7月8日（土）は体育学科とスポーツ情報マスメディア学科、7月9日（日）は健康福祉学科と子ども運動教育学科、7月15日（土）は現代武道学科、7月16日（日）は運動栄養学科と延べ4日間わたって開催されることになっており、事前申し込みが必要となっています。

申込み・お問合せ：入試創職室 0224-55-1017

仙台大学HP：<http://www.sendaidaigaku.jp/>



仙台大学 オープンキャンパス 2017
学科一日体験会 ご案内

7/8(土) 10:00-15:00	体育学科 & スポーツ情報マスメディア学科	7/15(土) 10:00-15:00	現代武道学科
7/9(日) 10:00-15:00	健康福祉学科 & 子ども運動教育学科	7/16(日) 10:00-15:00	運動栄養学科

8/5(土) オープンキャンパス (10:00-15:00) 入退場自由 事前申込不要

どんな勉強ができるのか、どんな先生がいるのか、どんな施設・設備があるのか、将来はどんな仕事に就けるのか、大学はどんな雰囲気なのか、将来の夢につながる大学選びにとって、こうした疑問はどれも大切な要素です。そこで仙台大学では、大学の「中身」をもっと知ってもらい、納得のいく大学選びをもらうために、オープンキャンパス「学科一日体験会」を実施します。是非、皆さんの大学選びの参考にしてください。

スケジュールは、裏面をご覧ください

仙台大学 入試創職室
 TEL.0224-55-1017 FAX.0224-55-0631
 ホームページ <http://www.sendaidaigaku.jp>

日本教授学習心理学会第13回年会在開催されました

7月1日（土）・2日（日）、本学LC棟にて日本教授学習心理学会第13回年会（準備委員長：荒井龍弥）が開催されました。

本学会には、幼児から成人まで年齢や校種を問わず、主に教師の視点から学習者の学習を有効適切に援助するための教材内容を重視した研究を行おうとする全国の教師や研究者が集まっています。

今回の年会では約50名の参加者があり、国語・数学・理科・歴史・英語・体育といった幅広い教科領域にわたる23件の個人研究発表をもとに1件あたり約30分の深い議論が行われました。

また初日に行われた日本発達心理学会代表理事の本郷一夫氏（東北大）による講演（「発達支援とは何か—発達連関と学習—」）は



本郷一夫氏（東北大）の講演の様子



学生も運営スタッフとして参加

会員以外にも開放されました。

当学会の年会は、昨年度は山梨大学、来年度は愛媛大学で開催されるなど全国で展開しています。開学50周年にあたるタイミングに本学にて開催できたことで、よいアピールができたと思われま

す。本学からも50周年記念のファイルや付箋を提供いただきました。会期中屋外は梅雨らしい蒸し暑さでしたが、LC棟内は快適で、プロジェクタシステムなどの新たな設備やレイアウトの工夫がしやすい環境にも参加者は感心しきりでした。準備委員として十分に責務を果たすことができました。関係各所に御礼申し上げます。

【報告：教授 荒井 龍弥】

2年ぶりに海浜実習を開講～山形・由良海岸で再開～



大遠泳終了後の記念撮影

7月14日(金)から17日(月・海の日)の3泊4日の日程で、海浜実習が実施されました。昨年度は諸事情により、やむなく実施を見送った海浜実習も、開学50周年を迎える本年、再び山形県鶴岡市・由良海水浴場を舞台に開講することができました。庄内の温暖な気候と対馬暖流がもたらす絶好の海水温は、本学海浜実習の新たな船出を歓迎してくれているかのようでした。

実習前は些かな不安げな表情を見せた実習生44名も、それぞれの技能レベルに応じて着実に練習を積み、日を迫うごとに自らの水泳技能が向上していくのを実感していた様子でした。気象・海象コンディションを鑑みて、予定を前倒しした大遠泳本番は、前日までは打って変わって序盤から横なぐりの雨とうねりを伴う海の状態でしたが、実習生は練習の成果を遺憾なく発揮して乗り切り、終わってみれば1時間58分、1人の脱落者も出さず無事に完泳を果たすことができました。

最終日は、海浜における安全教育のひとつとして着衣泳を実施しました。水辺のレジャーなどで、不意に足を滑らせて、着衣状態で落水した場合を想定して、当日は、白山島の港の灯台(高さ2.5m)から飛び込んで浜まで戻る体験型学習をしました。

着衣状態で落水するとどういった感覚が体を襲うのか、着衣はどれほど泳ぎに影響を及ぼすのか、着衣状態で浮いて救助を待つにはどのような方法が良いのかなど、学生は体にまわりつく衣服に四苦八苦しながらも、それぞれに工夫をしながら水とうまく付き合う方法を学んでくれたことと思います。

今回参加した実習生にとっては、生身の肉体ひとつで海に練り出す4日間は、改めて自然の驚異に触れた時間だったと思います。温かく穏やかな海が、ほんの少しばかり牙を向く瞬間、自然の力の前には自らの力など遠く及ばないことを知り、自然に向き合い、いかにして共存するか、大海原の中にあるのは、孤独ではなく仲間との一体感であることを知り、無事に泳がせてもらった全ての事物に感謝することを学んでもらえたなら幸いです。

最後になりますが、本実習の運営にあたっては、全学的にご支援とご協力賜りました。朴澤泰治理事長・学事顧問にはご多忙中にもかかわらず現地にて実習生・補助学生に激励いただきました。また、実習生を快く受け入れてくださった由良地区関係者の皆様も合わせまして、海浜実習の運営にご協力いただきました全ての皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

【報告：講師 渡邊 泰典、写真提供：教授 小松 恵一】

〈目次〉

・2年ぶりに海浜実習を開講	1
・「仙台大塾」開講式を開催 ・一日学科体験会報告	2
・校長就任祝賀会開催 ・文科省「情報ひろば」で取組み紹介	3
・新企画！ 「プレイルームから、こんにちは」 ・学内アスレティック・トレーナー・ プログラム認定証授与式を開催	4
・ソチ五輪代表の黒岩選手が三重県の 小学校で講演	5
・2017NATA年次総会参加報告	6
・南條教授がキワニスクラブで講演	7
・卓球部の学生が上海体育学院での 卓球サマースクールに参加	8
・上海市の幼稚園を視察 ・開学50周年記念事業 第3回心池会杯争奪剣道大会開催	9
・ウエイトリフティング部が活躍 等	10

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224-55-1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

今年も「仙台大塾」が開講されました

7月25日（火）、LC等を会場に「放課後先生『仙台大塾』開講式」が開催され、阿部芳吉学長や船迫邦則柴田町教育長、柴田町内の6つの小学校から約180名の児童などが参加しました。

開講式冒頭のあいさつで阿部学長は「皆さんが分からない問題などは、教員を目指す学生の皆さんがサポートしながら教えてくれます。わからなかったことが分かるようになるよう頑張ってください」と挨拶。また、参加する児童を代表して船岡小学校6年の中森歩夢君からは「仙台大学の素晴らしい環境の中で勉強して学力を向上させたいです。このような環境を作ってくれた仙台大学の皆さんや、柴田町のみなさんに感謝しながら学習に励みたいと思います」と立派に仙台大塾に臨む決意を語ってくれました。

この事業は柴田町内の小中学校に通う児童・生徒を対象に行われている「柴田町トップアスリート事業」の一環として開催されたもので、子どもたちの個性や能力を導き自らの夢実現に結びつくよう、学習の定着を図るための支援活動を目的としています。今年も8回の開催が予定されており、児童たちは本学が用意したバスで通いながら、教員を目指す本学学生42名がサポート役となり、夏休みの宿題などに取り組むことになっています。



「仙台大塾」開講式の様子

学科一日体験会を開催 ～子ども運動教育学科からの報告～

7月9日に、子ども運動教育学科での初の「学科1日体験会」が開催し、飛び入り参加も含め35名の高校生と16名の同伴者の方々にご参加頂きました。

体験会では、講義と実技そして施設案内（保育ルーム、保育実習室、ピアノ室）を実施しました。実技では、学生が考えたレクリエーションを実施し、講義で緊張していた高校生の表情が和らいでいました。保育ルーム見学では、子どもと実際に触れ合ったり、遊具を体験して頂きました。参加者は、学内で子どもたちと接する機会があることに驚いていましたが、保育ルームでの時間をとても楽しそうに過ごしていました。

また、ピアノ室見学では、学生によるピアノ演奏を披露しました。担当した学生は、緊張したのか、ところどころ間違えたりもしましたが、かえって場が和み、ピアノが苦手な高校生からは「ピアノが弾けないと入学できないと考えていた。自分も頑張れそうだ。」などの意見を聞くことができました。参加者は、学生から入学後のピアノ練習のサポートについての説明を受け、入学後のイメージを掴んでいたようでした。

本学科は今年度より開設された為、1年生しかおらず在籍者も18名と少ないなか、補助学生として14名が参加してくれました。それぞれが自分の役割を把握し、猛暑の中、一生懸命運営に携わってくれました。そのおかげか、終了時間前には高校生と学生が楽しそうにコミュニケーションをとる姿がみられました。本学科は他の保育者育成校とちがい、男子学生が多いので、今回ご参加頂いた男子高校生も安心した様子でした。



【報告：講師 山梨雅枝】

第18回「校長職就任祝賀会」 第7回「宮城県、仙台市新規採用教員激励会」を開催

第18回「校長職就任祝賀会」第7回「宮城県・仙台市新規採用教員激励会」が7月29日（土）、ホテル白萩（仙台市）で開催され、朴澤理事長・学事顧問、阿部学長始め同窓生や本学関係者60名が校長就任と教員新規採用を喜び合いました。

今年度は第14期生の熊谷浩先生（柴田町立西住小学校）、第16期生の及川功次郎先生（美里町立南郷中学校）、第18期生の加藤敏充先生（七ヶ宿町立七ヶ宿中学校）の3名が新たに校長職に就任されました。また、宮城県、仙台市の教員として16名が新規採用され、今回9名の先生方が出席しました。

朴澤理事長・学事顧問の挨拶、阿部学長の祝辞があり、久能教授（元仙台市小学校校長会長）からは学校経営と教員としての心構えなどについての激励の言葉があり、乾杯ののち恩師や出席者の皆さんとの懇親が和やかに行われました。

校長職に就任されました3名の校長先生方からは大学時代からこれまでのエピソードや校長として新たな気持ちで学校経営に取り組んでいくとの決意が述べられ、また新規採用された教員の方々からは仙台大学出身者としての自覚、誇りを持って、何事にも積極的に励みたいとの抱負が語られました。

それぞれの先生方の挨拶の後、針生教授の「伊達の一本締め」、そして校歌斉唱、万歳斉唱で3時間の盛会を終了しました。

【報告：同窓会事務局長 大河原 則夫】



今年度校長職に就任された3名の先生方

文部科学省「情報ひろば」で被災地支援の取組みを展示



「情報ひろば」に展示されている本学の取組みを紹介するポスター

文部科学省は、平成20年1月の庁舎移転を機会に、国民との双方向コミュニケーション機能を強化する取組の一環として、登録有形文化財となっている旧文部省庁舎を活用し、「情報ひろば」が整備されました。平成28年度に大学・研究機関等との共同企画として、企画展示をする団体の募集があり、本学も「体育大学による被災地での健康支援」というテーマで応募し、16団体の一つとして採択されました。

東日本大震災発生直後より本学が宮城県亘理町、女川町、美里町の避難所や仮設住宅の集会所において実施してきた、廃用症候群予防やコミュニティの再構築を目的とした健康支援活動について

の展示を行っております。今回の企画展示を通じて、本学の学生たちが中心となり、被災者の心に寄り添って続けてきた活動を県内外の方々に発信し“被災地の今”を知っていただく機会になればと考えています。東京に足を運ぶ機会がありましたら、是非お立ち寄りください。

展示期間：平成29年7月27日（木）～平成29年12月21日（木）

開館時間：月曜日～金曜日 10時00分～18時00分（入館は17時30分まで 土日祝は休館）

展示会場：文部科学省情報ひろば「企画展示室」 ※入場無料

（東京都千代田区霞ヶ関3-2-2 旧文部科学省庁舎3階）

【報告：新助手 齋藤 まり】

「プレイルームから、こんにちは！」

2016年4月にスタートした「プレイルーム（預かり保育ルーム）」。
このコーナーでは、知られざるプレイルームでの子どもの姿や学生の
学びについて皆さんにお伝えして参ります。“はじめまして”の今回
は、仙台大学が独自に取り組む預かり保育の概要をご紹介します。

【対象児と定員は？】

本学の教職員、社会人学生のお子さん（1歳～2歳児）を10名までお
預かりしています。

2017年7月現在、9名が在籍しており、1日平均7名が利用していま
す。

【設置場所は？】

LC棟 1Fプレイルーム（保育実習室向かい）です。

【開室時間は？】

平日のAM8：00～PM5：30です。

【職員の体制は？】

保育担当職員（保育士資格保有者）1名、保育補助職員1～2名（曜日
によって異なる）、学生アルバイト1名で対応しています。

上記のような内容で、福利厚生、学生の学びの場、研究対象とする
ことを目的として、預かり保育が運営されています。4月から子ども運
動教育学科がスタートしました。学生は、授業や自主的な学びのため
にプレイルームに足を運んでいます。初めは子どもとの距離の取り方に戸惑い、意思の疎通ができないこと
に葛藤する学生ですが、共に身体を動かし、遊具の面白さを共有することで心を通わせていきます。また、
テキストに載っている身体の発育発達を、目の前の子どもの動きで確認することで理解が深まり、保育実践
に飛び出す前の学生にとって貴重な学びの場になっていることがうかがえます。子どもも、職員のみならず
お兄さん、お姉さんが一緒に遊んでくれることを楽しみにしています。

今日も、プレイルームに元気な子どもの声が響きます！次号からは、子どもの遊びの様子を具体的にご紹
介していきます。どうぞ、お楽しみに！！

【報告：准教授 柴田 千賀子】



プレイルームで遊ぶ子どもたち（上）
夏は水遊びでも楽しめます（下）

第1回仙台大学・学内アスレティック・トレーナー・プログラム 認定証書授与式を開催

7月26日（水）本学A棟2階大会議室にて、アスレティックトレー
ナー（以下AT）分野では初となる、学内アスレティック・トレー
ナー・プログラム(IC-SUAT.P=internal certification to Sen
dai Univ. AT Program)認定証書授与式を開催いたしました。

本プログラムは初級・中級にレベル分けされ、規定の講座・実
習・検定試験を修了した者が、学長から認定証書を授与されるも
のです。プログラムの目的はATとしての基礎的な知識・技術の習
得を促し、各レベルにおける活動範囲を明確化し、学習意欲を向
上させる事などになります。平成27年度から2年間AT部の学生
を対象に試験的に実施を重ね、今年度に入り学外医師1名ならび
に学内AT有資格者3名の審査を経て、阿部芳吉学長から正式に学
内資格として認定されました。

今回は平成27年度・28年度実施分の合格者、IC-SUAT.P初級15名、IC-SUAT.P中級15名、合計27名の学生が
認定されました。式の中で学長から学生に向け、激励のお言葉をいただきました。「本日こんなに多くの学
生が式に参加し、驚いている。残念ながら、日本ではまだアメリカのように全ての高校でATが働いていると
いう状況は出来ていないが、将来絶対にそうなる時が来る。皆さんはさらに上の資格を目指して、がんばっ
てください。」IC-SUAT.P中級代表で証書を受け取った体育学科4年河野祐輝は「今回の結果をステップアッ
プとし、日本体育協会AT試験合格へ繋げたい」と語っています。

平成29年度の講座等の実施は、改善点等検討しつつ後期から開始する予定です。ユニークで魅力的な大学
を作り上げていくという視点から、今後関係者らはプログラムの改善・継続・新しいアイデアの模索等に
尽力する必要があると思います。

【新助手 鈴木 のぞみ】



三重県津市立桃園小学校で「夢を叶えるために」と題し ソチ五輪 オリンピアン 黒岩俊喜さん(大学院修士課程2年)が講演



2013年12月にNHK番組「アスリートの魂～最速エンジンになる ボブスレー黒岩 俊喜～」と題した初のオリンピック（ソチ五輪）に挑むドキュメンタリー番組をご覧になったことがきっかけで、4年間に渡り交流が続いている三重県で梨農園を営む村澤さんご一家と6月13日に、今回初体面を果たしました。

当日は駅のホームまでご家族みなさんで温かな出迎えをしていただき、手作りの応援旗を持って到着を心待ちにしてくださいました。

そのあと、村澤さんのお孫さんが通われている小学校において「夢を叶えるために」をテーマに講演を行ってきました。

前半はオリンピックの開会式や閉会式、オリンピックでの滑走、パブリックビューイングの映像を流しながらボブスレー競技の紹介や体験談を語りました。映像が流れ始めると児童が笑顔と驚きの表情で食い入るように画面を見つめながら「速い」・「カッコいい」などと話していました。どれも児童にインパクトのあるものだったとは思いますが、その中でも際立ったのは、全員の心が一つになり全力で応援してくださっているパブリックビューイングでの映像で、一段と児童の心に焼きついたようでした。

後半は、夢について自身の体験を交えながら話しました。私は小さいころから「テニスで世界に出たい」、「陸上競技で金メダルを取りたい」等、様々な夢を追いかけてきたのですが、その中で共通していたものが「オリンピック」でした。今、その夢のスタートラインによりやく立てたことを話した後に、児童の夢を聞いていきました。みんな様々な夢を持っており、先生やお医者さん、スポーツ選手といったものからユーチューバーなどたくさんの夢を聞かせてくれました。

実は今回、私が夢を聞きながら驚いたことがあります。それは今まで行ってきた講演会とは比べものにならないくらい手を挙げて自分の夢を語ってくれる児童が多いことです。残念ながら授業時間の関係もあり全員の夢を聞くことはできませんでしたが、これほど多くの児童が自信を持って自分の夢を語ってくれたことは、講演をさせていただいた私としてはとても嬉しいものでした。

最後にその夢を叶えるために私が行っていることを話しました。それは「夢に向かって努力する」・「感謝をする」・「自分のことが好き」・「自信を持つ」の4つです。児童の皆さんが夢を叶えるために少しでも私の講演が役に立てくれれば良いと思います。

【報告：仙台大学大学院2年 黒岩 俊喜】



手作り応援旗で出迎えて下さる村澤さん



素直で元気な子ども達と小学校で

2017 NATA年次総会参加報告

6月26日（月）から同月30日（金）の期間、アメリカ合衆国テキサス州ヒューストンで開催された National Athletic Trainers' Association（以下、NATA）年次総会に内野洋材新助手と遠藤皓樹新助手とともに出席しました。NATA年次総会は、毎年6月末におよそ40,000人の会員数を誇るNATAが主催するアスレティックトレーナーの学会兼関連企業の展覧会です。総会内でのイベントは様々あり、出席者は各々が興味を持つ内容の講座やワークショップなどに参加し、アスレティックトレーニングに関する最新の研究結果や知見を学ぶことができます。

年次総会出席者の主な目的1つに、資格更新のための Continuing Education Units（以下、CEU）の獲得があります。NATA公認アスレティックトレーナーの資格は、2年に1度更新しなければならず、更新のためには50CEU（50時間相当の学習）を獲得しなければなりません。年次総会に参加し、講座やワークショップなどに参加することで、その内の多くを獲得することができます。

また、現在は移行期間ですが、NATA公認アスレティックトレーナーの資格を取得するためには、大学院修士過程を修了することが条件となります。その流れの中で、アスレティックトレーナーは Evidence Based Practice（以下、EBP）が強く奨励され、研究データや調査結果をもとにした現場での活動が求められています。50CEUの内、10CEUはEBP公認プログラムから獲得しなければならず、今年の総会から、その公認プログラムとされた講座がいくつか設けられ、有資格者たちはこれらの講座に参加することで、EBPにおけるCEUの獲得ができるというシステムが実施されていました。

次に、出席者の大きな目的の1つにネットワーキングをあげることができます。総会へ参加することにより、同窓生などとの再会ができるだけでなく、Career Centerを通して就職活動をしたり、District Meetingと呼ばれる、活動地域内に所属するアスレティックトレーナーのネットワークミーティングも多く開催されていました。日本人



NATA年次総会の様子



盛り上がりを見せていた関連企業の展覧会

有資格者で構成されている Japan Athletic Trainers' Organization（以下、JATO）のミーティングも開催され、日本人有資格者同士での繋がりを構築する良い機会となっていました。そのミーティングでは、今年から新しく会長に就任した植松氏により、JATOにおける新しい存在意義が掲げられていました。JATOは、NATAとの正式な提携を結ぶ組織として認可されたことで、NATAとの間でより精力的かつ活発に日本でのアスレティックトレーニング普及に向けて活動をしていく決意を表明していました。

学会と同時に開催されている、関連企業展覧会も盛り上がりを見せていました。200以上もの企業が、それぞれの専門性のもと、最新技術を駆使した商品のプロモーションをおこなっていました。もし、気に入った商品が見つければ、その場で購入の契約をすることも可能であり、有資格者たちも新しい商品に興味を持ちながら、プロモーターたちの話に耳を傾けていました。

他にも、全米各地の大学院生が実施した研究成果を発表するポスタープレゼンテーションのブースが設けられていたり、Free Communicationとして学生たちが有資格者たちからアドバイスをもらえる場所が提供されていたりと、アスレティックトレーニングの将来を担う学生たちのサポートがしっかりなされていました。

数年ぶりにNATA年次総会に参加することが出来き、とても良い刺激となりました。旧友と共にアスレティックトレーニングの将来を語り合い、また日本人アスレティックトレーナーたちの活躍を目にしたことで、今後の自分のアスレティックトレーナーとしての展望を考えさせられる良い機会となった。今後は、今回の総会で学習してきたことを活かし、仙台大学への教育に還元して行くとともに、個人の研究をより深めていきたいと思えます。

【報告：講師 高橋 陽介】

南條充寿教授が仙台キワニスクラブで講演 「リオ五輪を戦って ～2020東京五輪への挑戦～」

7月13日（木）、仙台キワニスクラブの招きにより、南條充寿教授（仙台大学柔道部総監督・仙台大学柔道塾塾長・前全日本柔道女子監督）は仙台国際ホテルにて「リオ五輪を戦って ～2020東京五輪への挑戦～」と題した講演を行い、25名もの会員の方々が熱心に耳を傾けました。

キワニスクラブでは活動の一環として、毎月2回講師を迎え講演会を開催しており、例会委員長で産経新聞東北総局長である白濱正三氏の依頼により昨年4月に阿部芳吉学長が「いじめについて考える」という講演を、同11月に鈴木省三統括副学長が「アンチエイジング戦略」という講演をそれぞれ実施し、大変好評だったことから今回のお申し出となりました。

最初に南條教授は「日本柔道はオリンピックにおいて、より輝きの良いメダルをとることが至上命令です。日本の柔道界がさまざまな不祥事を経て困窮していた時に、恩師である亡くなられた斎藤先生から自分が全日本柔道女子監督に抜擢されて以来、ともかく選手達にオリンピックでメダルを取らせることだけを大目標として、必死に取り組んで来ました。みなさんはスポーツに対して華やかなイメージを持つでしょうが、実は日本は学校体育と企業集団に支えられています。国がオリンピック選手への経済的な支援をはじめとした手厚い保護を確立している他国の例と違い、Team JAPANとしてオリンピックの選手に選ばれたとしても、各選手が各企業に所属しているという日本独特の難しさがあり、柔道の現場でコーチングするよりもむしろ、強化選手の選考及び強化計画の「立案」「実践」「評価」、海外の現状の情報収集、所属との関係強化といった選手達のマネージングをすることがメイン業務でした。」と話されました。

オリンピックにおいて柔道は、男女7階級あるなかで1日1階級、軽量級から試合が始まりますが、かつての谷亮子選手や野村忠宏選手など、いわゆるスター選手はいずれも日本が最も得意とする軽い階級の選手です。しかし接戦の結果が1歩及ばず、最も欲しいメダルのないままに5日目、南條教授がセコンドとして唯一帯同する田知本遥選手が70kg級に挑戦しました。

14名の代表選手のうちのただ一人、これまでのオリンピック、世界選手権大会でのメダル獲得経験がなく、強豪選手が1番多く存在する階級にいる田知本選手が一戦一戦勝ち上がり、最後に見事金メダルを手中におさめるという劇的なドラマがあったのは記憶に新しいところですが、その直後、南條教授が最初に田知本選手にかけた言葉は「おめでとう」でも「よくやった」でもなく「あまり調子に乗らぬよう、、、ここからがお前の評価のスタートだぞ！」と予想外の一言だったそうで、南條教授のなんともユーモラスなお人柄に、会場は笑いの渦に包まれました。

次に、2020東京五輪までの課題として南條教授はまず、柔道人口が減っている現実に警鐘をならしました。前出した谷亮子選手に代表される誰もが憧れる、目標とされる選手が現在は存在しないという危機感。新聞・テレビに代表されるマスコミともっと連携し、スター選手の発掘・育成の必要性を説きました。また、暴力事件を



講演する南條教授

発端とし、中学校で武道が必修化された時期的タイミングが合致したことにより、保護者の方が「柔道は危険だからだめ」とともに勧めなくなった現実を指摘して、柔道界のイメージアップが急務であることを述べました。

今後、世界で戦うためには日本人の強みである「高い技術力＝段階に応じて掘り込む作業ができる」能力をさらに強化させ、選手一人では決して勝つことができないTeam JAPANとしてのサポートメンバーの充実、ナショナルトレーニングセンターを活用することで卓球やバドミントンのように世間一般へアピールすることも重要な要素だそうです。

また、指導者への待遇について、南條教授は諸外国との違いについて話し「仙台大学の教員でありながら、監督に就任したらほとんど大学にいたことができず、多大なご迷惑をおかけするであろうことは承知の上で、“全力を出してやってきなさい”と力強く背中を押して下さった朴澤泰治理事長・学事顧問（当時は理事長兼学長）に、心からお礼申し上げます」と謝意を述べました。

キワニスクラブ会員のみなさんは、リオ五輪から約1年が過ぎた今だからこそ、冷静にオリンピックという世界最高の祭典を振り返り、その時だけ熱中してメダル獲得を連呼する日本独特の空気についても国全体として反省・改善が必要だと思われたようです。

会員の1人で株式会社東芝の東北支社長・谷内聡（たにうち さとし）氏は「柔道は日本のお家芸と一言でいうにはあまりに困難な、知られざる現状を南條先生が率直に語ってくださったことは目からうろこが落ちる思いです。日本の会社としてその時だけ選手を支えるのではなく、長期的な視野でもっと企業同士が連携し、自国開催のオリンピックのあり方を根本から考え直すべきではないでしょうか？大変勉強になりました。」とおっしゃっていました。

2020東京五輪・パラリンピックに向けて、柔道をはじめとした次世代のオリンピック選手の輩出に、仙台大学はますます真摯に取り組んでいくことを伝える貴重な場となりました。

卓球部の学生が上海体育学院卓球競技サマースクールへ参加

2017年7月5日～8日2日、仙台大学の国際交流締結校である中国上海体育学院において、卓球競技のサマースクールが行われ、同学院の朴美子教授の研修派遣依頼に基づき、本学から卓球部所属の現代武道学科1年生の奥田大喜さんが参加しました。引率教職員は、朴澤理事長・学事顧問（7月16日～19日）、馬佳濛准教授（7月16日～23日）でした。

本プログラムは、卓球を通じた国際交流を発展させることを目的に、上海市当局の支援の下で上海体育学院が主催しており、主に上海体育学院と提携している海外の大学に対して、一大学当たり2名までの招待により実施されています。プログラムの内容については、メインを卓球練習とし、そのほか中国語、中国書道、茶道、伝統切絵、雑技の鑑賞などの多彩な文化体験により構成されています。

本プログラムの実施に関わる使用言語は中国語および英語となり、派遣学生に対しては事前に中国語の指導を行いました。しかし、本人の積極性と真面目さで、20数ヶ国からの参加者と意欲的に中国語でコミュニケーションを取り、プログラムの参加や日常生活に支障が出ないほどこなしていました。また、各国留学生とともに寮生活を行い、普段の授業から日常生活まで、深い友情を築きました。中盤からの現地引率となりましたが、本人がすっかり現地の生活に慣れていく様子を見ることができました。上海体育学院卓球学科の顧楠講師からは、「彼は、卓球の練習も中国語の授業もとても真面目な姿勢で取り組んでいるので、上達が早い。また、性格がよく、周りから大変好かれている」と高評価を頂きました。本人は「中国での卓球修行は前から望んでおり、この機会を得ることが大変難しい。この機に、さらに中長期の留学を考えたい」と熱く感想を話しました。短い期間ではありますが、卓球大国の本場での指導を経験できることは、卓球に対する理解をより深めると



ともに、中国卓球の精神と技能に触れる機会となりました。

以上から、本プログラムは、参加学生にとって学んだ内容を活かし将来に役立てられる知識・経験等を得る良い機会であると確信するとともに、卓球授業の単位互換を含めた長期留学制度の導入など、今後、上海体育学院卓球学科プログラムへの参加をより体系化していくことが仙台大学の学生教育にとって有意義なものとなることを確信しましたので、是非、実現したいと考えております。

本学50周年記念事業の打合せに関しては、朴澤理事長と馬准教授は、上海体育学院の陳院長をはじめ、朴准教授、国際センター長の戸教授、および、11月の50周年記念行事の学生パフォーマンス引率者の楊珏准教授と会談し、朴澤理事長からは、院長自ら50周年イベントに参加されることに対する御礼の他、パフォーマンスに必要な設備・照明などについて説明し、引率者と内容確認を実施しました。陳院長からは、招待に対する御礼と、今後両校の交流がより一層発展することを願うとの話がありました。引率者の楊君准教授は、国家級新体操競技選手を経て舞踊関係分野の指導者となっていますが、具体的なパフォーマンス内容および必要な設備関連について確認がありました。今後は、先方の要望を踏まえて準備を進めていくこととしました。

上海体育学院と仙台大学とは、これまで大学院留学生受入・交換留学、教職員間の交流を行ってききましたが、今回の学生の短期研修派遣は初めてであり、今後も本プログラムへの参加を継続させ、中・長期の単位交換留学制度の実現など、さらに交流を拡充していくことを確認する出張となりました。

【報告 准教授 馬 佳濛】



中国・上海市の幼稚園における幼児体育への取組みを視察

7月17日～21日にかけて、中国の幼児体育や幼児教育の動向把握のため、中国上海市の幼稚園を視察しました。本学からは、朴澤理事長・学事顧問、金講師が参加し、菊池さん（仙台大学の卒業生・上海体育学院博士課程進学）に幼稚園を案内していただきました。

視察前には、日本幼児体育学会会長の前橋 明教授（早稲田大学）と共同研究を行っている上海体育学院の陸教授から、上海の幼児体育の状況についてレクチャーも受けました。

Shanghai Ruihong 幼稚園は、上海市の中でも、富裕層が住んでいる地域にあるため、子どもが生活しやすい環境が印象に残りました。とくに、園内の施設には、バランス系の遊具が並んでいるほか、多様な種類の運動あそび器具が多く配置され、子どもがどこでも手軽に運動あそびができる環境が素晴らしかったです。しかし、運動プログラムは、ほとんど園内で実施しており、それは、中国の大気汚染（PM2.5）との



の関連があると説明を受けました。また、園長先生と幼児体育指導者との中国の「子どもの身体活動ガイドライン」、「幼児肥満」、「生活環境や習慣」など幼児体育の観点から活発な議論を行いました。今後、中国の幼児のみでなく、中国に在住している日本幼児にも、家庭の環境・社会の環境により、肥満児の増加や自立性・社会性の低下が予想されますので、日・中比較調査の必要性があると考えました。

この他、上海滞在中、複数の保育・幼児教育関係施設の視察も実施しましたので、今後の子ども運動教育学科の教育研究の運営に役立てていくことにしております。

【報告：講師 金 賢植】

仙台大学開学50周年記念 第3回心池会杯争奪剣道大会を開催

7月29日・30日の両日仙台大学剣道部心池会（OB会）主催の第3回心池会杯争奪剣道大会と第4回心池会剣道練成大会が仙台大学で開催されました。これまでの大会は会場を分散しての開催であったが、今回は仙台大学開学50周年記念大会として開催され、第五体育館を利用させていただきました。当日は、小雨模様の中、参加校高校35チーム・中学校40チーム出場（430名）と、引率教員、OB、学生、保護者を含めると約600名近くとなり、大学の広い会場は熱気と気迫に包まれました。中学生・高校生にとっては、新チームに移行してから初の公式試合となるため、公式戦初出場の選手や、新しいチーム作りを考える監督たちにとっては、絶好の大会となりました。また、同一会場での開催となり、中学生・高校生が互いの試合観戦ができたり、運営する側も移動や伝達等がスムーズに行うことができました。

大会終了時には、OBによる稽古会や懇親会も開催され、久しぶりの再会と道場での稽古に学生当時を懐かしく思い出されていました。さらに、仙台大学の学生にとっても大会の運営や、審判技術の実践練習の場として貴重な二日間になったと思います。最後に、立派な大会会場をお貸しいただいた大学、準備等にご尽力いただきました大学関係者や学生の皆様に感謝申し上げ、ご報告とさせていただきます。

【報告：平成13年卒 宮本 亮】



大会の様子

ウェイトリフティング部 東日本インカレで活躍

7月7日～9日まで埼玉県上尾市スポーツ総合センターで第45回東日本大学対抗選手権大会が開催され、本学ウェイトリフティング部から5人の選手が出場しました。試合会場には、阿部学長、高成田部長が駆けつけ熱のこもった声援を送っていただきました。69kg級小川 純選手（運動栄養学科4年ー山形県・鶴岡工業高校出身）がトータルにおいて6位に入賞（スナッチ種目102kg 6位、C&J種目128kg 6位）を果たし、昨年の同大会に比べ11kgも記録を更新しました。

105kg級保科魁斗（体育学科2年ー宮城・村田高校出身）は、全6試技に成功しトータルで7位に入賞（スナッチ種目116kg 8位、C&J種目158kg 5位）しました。今大会の結果によって小川（山形県代表）、保科（宮城県代表）の両選手は、8月に秋田県三種町で開催される行なわれる東北総合体育大会への出場が決まりました。

85kg級大谷 祐希選手（スポーツ情報マスタリア学科3年ー宮城・柴田高校出身）は、入賞を果たせませんでしたでしたが、大会前の自主トレーニングの成果が実り、クリーン&ジャーク種目で125kgに成功、4kg自己記録更新となりました。94kg級大津 恭輔選手（体育4年ー宮城・石巻高校出身）は、全6試技に成功しC&J種目の3本目に146kgを成功させて自己記録を1kg更新した。同階級の菅野有真（現代武道学科3年ー宮城・塩釜高校出身）は、トータル222kg（スナッチ種目102kg、C&J種目120kg）を挙上し、昨年の同大会に比べ34kgも更新しました。団体順位は、9位（16点）となり、個人、団体ともに昨年（11位6点）以上の結果を残すことができました。

【報告：ウェイトリフティング部 監督 新助手 壹岐 優】



C&Jで128kgの挙上を成功させた小川選手

平成29年度新任者紹介(7月5日付)



たかの のりゆき
高野 典之さん
(入試創職室長)

7月からお世話になっております。未経験の仕事ですが、微力ながら学生の皆さんの入試、就職のお役に立てるよう精一杯頑張りますので、ご指導、ご鞭撻よろしくお願ひいたします。

2017オープンキャンパスが開催されます

毎年恒例となっているオープンキャンパスが今年は8月5日（土）に開催されます。

オープンキャンパスでは教員志望の方への特別講義やキャンパスツアーなど、仙台大学を実際に「見て」「聞いて」「知る」ことができる一日になるよう様々なイベントをご用意して皆さんをお待ちしています。



昨年のオープンキャンパスの様子

速報 「第23回夏季デフリンピック競技大会 サムスン2017」で 佐々木琢磨選手(陸上競技)と星泰雅選手(水泳競技)がメダル獲得！

佐々木 琢磨 選手 (新助手・平成28年卒)
陸上競技 男子 4x100mリレー 優勝
(日本新記録)

星 泰雅 選手 (体育学科1年・東北高校出身)
水泳競技 男子4x200m自由形リレー 第2位
男子4x100mメドレー 第2位
男子4x100mメドレー 第3位



SENDAI
UNIVERSITY

50周年記念シンボルマーク

SPORTS FOR ALL ～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

Monthly Report

SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.136 / 2017 AUG.

(月1回発行)

第23回夏季デフリンピック競技大会 佐々木琢磨選手と星泰雅選手がメダル獲得



デフリンピックでの活躍を報告する佐々木選手（左）と星選手（右）

7月にトルコ・サムスン市を会場に開催された第23回夏季デフリンピック競技大会に本学から新助手の佐々木琢磨選手（平成28年体育学科卒）と、体育学科1年の星泰雅選手（宮城・東北高校出身）の2名が日本代表として参加しました。

佐々木選手は陸上競技の男子4×100mリレーに出場し、日本新記録を叩きだして見事に金メダルを獲得。また、100mリレーでは第7位に入賞しました。また、星泰雅選手は水泳競技の男子4×200m自由形リレーと4×100mメドレーリレーの2種目で銀メダルを、また、4×100m自由リレーでも銅メダルを獲得しました。

2名は8月5日（土）に阿部芳吉学長を表敬訪問し、大会の結果を報告。佐々木選手は「100m決勝で7位という成績は本当に悔しい思いでしたが、リレーでの金メダルは日本新記録と併せてうれしく思っています。大会期間中には現地での食事が合わず体調を崩してしまいましたが、様々なサポートのおかげで良い結果を挙げることができました」と語り、星選手は「大きなプレッシャーを肌で感じ、また、世界とのレベルの差を思い知らされた大会でした。リレーメンバーとしてメダルをいただけたことはうれしいですが、更に練習を重ねていきたいと思えます」と今後の活躍も誓っていました。

報告を受けた阿部学長は「二人のメダル獲得は大学挙げて喜びたいと思います。それぞれに健康に留意し、目標達成できるよう今後の大会に向けて頑張ってください」と二人を激励しました。

デフリンピックは4年に1度、世界規模で行われる聴覚障害者のための総合スポーツ競技大会であり、国際ろう者スポーツ委員会（ICSD、CISS）が主催する国際競技大会です。

〈目次〉

・第23回夏季デフリンピック競技大会 佐々木選手と星選手がメダル獲得	1
・仙台大学開学50周年記念行事 OB監督率いる高校野球部交流大会開催	2
・卒業生の高畑裕司さん 日本野外教育学会論文奨励賞を受賞 ・「みやぎヘルスサテライトステーション事業」でウォーキングレッスン	3
・U19男子バスケWorld Cup in カイロ 視察報告	4
・「えいごdeバスケ」にAT部の学生が参加	5
・日本スポーツ栄養学会第4回大会 参加報告 ・2017オープンキャンパスを開催 ～過去最高の1,086名が来場～	6
・全日本ブッシュスケルトン選手権大会 優勝を学長に報告 ・女子サッカー部 「東北Liga Student2017」で2連覇	7

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

仙台大学開学50周年記念行事

OB監督率いる高校野球部迎え、50周年記念交流大会開く



交流大会の初戦で本学チーム（手前）と戦った遠来の佐賀・敬徳高校チーム

仙台大学開学50周年を記念する「硬式野球部OB高校監督交流大会」が8月7、8の両日、本学第2グラウンド（野球場）など4市町を会場に開かれました。宮城、福島、秋田、岩手、佐賀の5県から計15チームが参加。台風の影響による雨のため、試合は初日だけになりましたが、各チームはそれぞれ秋の新人戦に向けて戦力を確かめながら交流を深めました。

同大会は、本学硬式野球部OBが指導に当たる宮城県内外の高校硬式野球チームを一堂に集め、交流戦を通してお互いの実力を磨こうと、20数年前に5チームで始まりました。その後、中断しましたが6年前に復活。大学時代は硬式野球部員でなかったものの、現在勤務先で硬式野球監督を務めるOBの高校チームも加えて毎年この時期に開いてきました。この間、いずれも本学OBの監督が率いる聖光学院、東陵、古川工業の各校が甲子園出場を果たしています。

OB会主催の今年の交流大会は、本学開学50周年に当たることから「記念大会」とし、全国のOB監督に参加を呼び掛けた結果、監督自らバスを運転し25時間かけて九州・佐賀県から駆け付けた敬徳高校はじめ、計5県の15チームが集まり、本学硬式野球部3チームも合わせた18チームによるイベントになりました。全国高校野球選手権大会11年連続出場中の福島・聖光学院（監督の齋藤智也氏は本学17回生）のBチームも加わりました。

交流大会は、6球場に振り分けられた各校が2日間にわたって戦う形式で、一部チームは本学に宿

泊しての参加となりました。このうち、初日の本学第2グラウンドでは敬徳高校と聖光学院に仙台大学Aチームによる交流戦となり、高校チームの奮闘が光りました。

初日の試合の後、柴田町内の飲食店で各校監



自らバスのハンドルを握り、佐賀県から25時間かけて駆け付けた敬徳高校の鷹巣監督（本学9回生）

督・部長と仙台大学硬式野球部OB会のメンバーら30人余による懇親会が開かれ、本学から阿部芳吉学長と高橋義夫硬式野球部長、入澤裕樹コーチが出席しました。席上、阿部学長は「OBの皆さんが指導に当たる各高校が切磋琢磨して実力をさらに高め、やがてその球児たちが仙台大学の戦力として入学するよう期待します」と挨拶。参加校のうち遠来の敬徳高校・鷹巣聡監督（9回生）は「最初で最後という思いで佐賀県から参加しました。部員にとって得難い経験をし、刺激を受けたと思います」と成果を披露しました。最後に大会事務局の佐藤政信代表（7回生）が「大会日程をどう設定するかは難題もありますが、できればもっと多くの高校に参加を呼びかけ、交流大会を盛り上げたい」と締めくくりました。今回の参加15校には、本学から開学50周年記念のグッズが贈られました。

現在、高校で硬式野球部監督を務めるOBは北海道から沖縄まで30余人に上ります。

【報告：硬式野球部 部長 教授 高橋義夫】

卒業生の高畑裕司さん 日本野外教育学会論文奨励賞を受賞

2017年6月に開催された日本野外教育学会第20回記念大会にて、当学会の論文表彰が行われ、本学卒業生の高畑裕司さん（2014年度卒業）の「大学キャンプ実習におけるふりかえりが参加者の集団凝集性に及ぼす効果（2016）」という論文が受賞し、表彰されました（野外教育研究、第18巻第2号、55-66頁掲載）。

野外教育学会では、3年ごとに、野外教育研究に掲載された論文に対して審査を行い、優秀論文賞と奨励賞を贈っており、奨励賞は35歳未満の若手研究者を対象に送られる賞です。高畑さんは、仙台大学のキャンプ実習で卒業論文のデータを取り、卒業論文として書き上げた研究論文を、卒業後に野外教育学会に投稿し、査読を経て原著論文として掲載されました。現在は、美里町立新鶴小学校で講師をしており、当日は残念ながら業務のため受賞式には欠席となってしまったため、指導教員である岡田が代わりに賞をいただいてまいりました。

以下のコメントは、高畑さんが受賞に際して寄せたものの一部です。

「仙台大学時代にASE（アウトドアでのグループワーク）指導に参加した際、活動後にグループ全員が顔を合わせて話し合うふりかえりに魅力を感じたことが、当研究への第一歩となりました。調査対象としたキャンプ実習では、当研究への協力のために負担が増えたカウンセラーやキャンパー、ふりかえりの時間を設けるためのプログラムを作成していただいたディレクターなど、たくさんの方に迷惑をかけてしまったと思います。しかし、ふりかえりが集団凝集性の向上に及ぼす効果を明らかにできたこと、さらには、この度の素晴らしい賞をいただけたことで、ほんの少し恩返しができただけかなと感じています。

私は、現在小学校で子どもたちの教育に携わっているのですが、当研究成果を活かし、日々の授業の中でもふりかえりを取り入れるようにしています。子どもたちにとって学習内容の確認となるだけでなく、自らの反省や感想を書いたノートを見せ合い生き生きと話し合う姿も見られ、互いの意見を尊重し合う良い人間関係の構築につながっていると感じています。」

今回の受賞は、指導教員の私にとっても、名誉であり、非常に喜ばしいことでした。まずは、多くの人の協力を得て完成した研究が、より多くの人々の目にとまり、野外教育の領域や教育現場に還元することができたと考えています。さらに、卒業論文でも頑張れば原著論文のレベルのものができるだけではなく、学会で受賞できると示すことができました。これは、今後卒論・修論に取り組む学生にとって大いに励みになるはずで、私自身も、自分の指導スタイルに対する大きな自信につながりました。今後も現場に還元できるような研究を目指し、指導をしていきたいと考えています。

【報告：講師 岡田 成弘】



代理で表彰式に出席した岡田講師（左）

「みやぎヘルスサテライトステーション事業」でウォーキングレッスン

8月26日（土）にイオンモール名取において「みやぎヘルスサテライトステーション事業」（主催：宮城県、主管：イオンリテール）の一環として行われているウォーキングレッスンに講師として参加をしました。この事業は、県民の健康づくりを推進するため、イオンモール名取を個人の健康づくりの実践をサポートする身近な拠点等とし、買い物等の日常生活の中で健康チェック・健康相談の実施や、健康情報の提供等を行っていくというものです。

本学は毎月開催するウォーキングレッスンでの講義を担当しており、今回はその第1回目となりました。参加者が少ないと予想していましたが、約30名のお客様が参加され、ウォーキングの効果等を実技も交えて楽しく学んでいただきました。買い物中に足を止めて、遠くからレッスンを見ていらっしゃるお客様も多く、ショッピングモールを健康情報発信の拠点にすることは様々な層をターゲットとできるため、非常に効果的であると実感しました。

ウォーキングレッスンは平成30年3月まで毎月最終土曜日の11時～12時にイオンモール名取で開催されます。お時間がありましたら是非お立ち寄りください。

【報告：新助手 齋藤まり】



講義を行う齋藤新助手

U19男子バスケWorld Cup in カイロ 視察報告

7月6日(木)～11日(火)の間、エジプト・カイロ市で開催されたU19男子バスケWorld Cupを、朴澤理事長・学事顧問、マーティ・キーナート上級アドバイザー、中村明成高校教頭で視察した。同一学校法人設置の明成高校が高校男子バスケWinter Cupで3年連続日本一を獲得した時の立役者で、NCAA Division Iの強豪校である米国ゴンザガ大学に進学した八村塁と、関東リーグの強豪校である中央大学に進学した三上侑希が、日本代表チームに選抜され出場したからである。三上はチーム・キャプテンを勤めた。

日本チームは、グループCに属し、予選リーグ3試合の結果は1勝2敗(●67-78スペイン, ○76-73マリ、



●75-100カナダ)でグループ3位となり、決勝トーナメントでは、1回戦、1～8位までの上位グループ進出をかけたイタリアと対戦した。前半29-21でリードも第3Qに逆転を許し、最終第4Q残り16秒から、八村がわずかに8秒の間に連続2本の3Pを沈め、残り2.4秒で55-55の同点に追いついたが、その直後ジャンプシュートを決められ、2点及ばずに55-57で世界ベスト8を逃し、9-16位グループに入ることになった。



イタリアは準優勝しており、この大接戦はこれまでの日本代表では考えられなかったという高い評価を得た。ちなみに、優勝はカナダ、スペインも大会4位と、予選リーグの対戦相手はいずれも強豪チー

ムであった。

9～16位グループ順位決定トーナメントでは、1回戦の対韓国戦を77-64で勝利、2回戦でも相手方の圧倒的な声援のなかホストチームのエジプトに76-73で勝利、3回戦の対プエルト・リコ戦で67-68という僅か1点差で敗退という惜しい結果となり、日本



八村選手(右から2人目)と三上選手(同4人目)

チームの最終順位は歴代最高の10位となった。日本のFIBAランキングは27位であるのに対し、韓国は15位、エジプトは14位、プエルト・リコは18位と、いずれも上位チームに対する善戦であったことは、2020東京に向けての明るい展望が開けたことを意味する。

八村は、対韓国戦で21得点、対エジプト戦で18得点等、全試合で中心選手としてチームを引っ張り、全出場選手のランキングでも、23.7ポイント(23.7得点、11.0リバウンド)で2位という成績を獲得した。三上も、対エジプト戦で大事なところで3Pを決め勝利に貢献した。両選手の教育関係者として、出張者全員が日本のスポーツに大きく貢献できた満足感を得ることができた視察であった。明成高校中村教頭も、八村 塁という逸材を、高校3年間、技術・精神両面でしっかりと鍛え上げ、米国の大学バスケ界の強豪で文武両道のゴンザガ大への進学を達成させたことに、明成高校の一員として大きな誇りを感じると述懐していた。

【朴澤記・中村教頭報告から編纂】

文部科学省 情報ひろばでのイベント開催

8月31日(木)に文部科学省情報ミュージアム「情報ひろば」にて、本学のスポーツ健康科学研究実践機構によるイベント「健康ひろば」を開催しました。このイベントは8月より実施している、旧庁舎3階の情報ひろば企画展示室の展示「体育大学による被災地での健康支援」に関連したものです。当日は、健康福祉学科4年浅井美樹、同3年伊藤颯希、同3年加藤瑞稀の3名の学生が参加し、参加者への体組成測定等を行いました。参加者からは「カラダの状態を数値で知ることができるので嬉しかった」、「結果を踏まえて運動に励みたい」など、多くの反響をいただくことができました。また、本学が被災地で取り組んできた健康づくり支援について、被災者に寄り添って行ってきた活動を紹介できる機会となりました。阿部学長も応援に駆け付けてくださり、学生に激励の言葉を頂きました。

文部科学省情報ひろば企画展示室での本学の展示は12月21日まで実施されています。東京に足を運ぶ機会がありましたら、是非お立ち寄りください。



応援に駆け付けていただいた阿部学長と

【報告：新助手 齋藤まり】

「えいごdeバスケ」にAT部の学生が参加



7月30日（日）、HALEOドームあすと長町にて開催された仙台89ERS主催の「えいごdeバスケ」というイベントに学生アスレティックトレーナーとして参加をしました。業務内容は「参加者に応急処置が必要になった際の対応」「クリニックの補助業務」の2つでした。クリニックまでの時間は会場で起こりえる怪我や体調不良などを想定し、諸々の準備を行いました。当日のクリニック中は、足首の捻挫に対する初期対応などを行いました。また、参加していた選手の中には怪我をしている選手もあり、これ以上の怪我の悪化を防ぐため、練習を注意深く観察するなどしました。

今回のクリニックの対象が小学生ということもあり、基礎的な練習が中心で接触プレーがなかったため、子供達は大きな怪我なく終えることが出来ました。私は熱中症で体調を崩す子供達が出るのではないかと予想し、そのための準備もしていましたが、当日は暑かったものの幸い施設は風通しが良いように工夫されていたため、熱中症等は発生しませんでした。株式会社ボディプラスインターナショナルがスポーツドリンクの提供をしていたため、水分補給がスムーズに行える環境でした。参加者の子供達や保護者も過ごしやすい環境でクリニックを楽しんでいたように思いました。

今回プロスポーツチームの活動の一環としてこのようなクリニックに学生アスレティックトレーナーとして参加し子供達と触れ合う中で、プロチームが地域のスポーツ振興に努めていることを身近に感じる事が出来ました。現場の雰囲気はとても明るく、参加している子供達が楽しむイベントでありながら、見ている人もスポーツを楽しむことができるイベントだと実感しました。また、以前にトレーナーサポートとして89ERSのインターンシップに参加していたこともあり、選手が顔を覚えていて下さいました。それにより、プロ選手との交流も含め、サポートに楽しさを感じる

ことができました。日々のトレーナー活動で繋がりを大切に行動していたからこそ得ることが出来た機会だと思いました。

私は現在大学4年生で、将来の進路で悩んでいた矢先にこのイベントに参加しました。89ERSスタッフの方も海外留学を経験しているということを知り、海外に興味のあった私にとって大きな意味を持つイベントとなりました。私は将来スポーツに携わった仕事に就きたいと考えています。2020年に行われる東京オリンピックでは、英語を話す機会の少ない日本に海外のトップ選手が訪れます。日本で外国人選手が快適に過ごすことができれば、選手のベストコンディションを作るだけでなく、日本の良さを選手自身に感じてもらうことが出来ると思います。つまり、外国語を話すという能力を身につけることで、日本で行われるオリ



ピックがより外国人選手の記憶に残るものとなるのではないかと考えます。これまで学生アスレティックトレーナーの活動を中心に行ってききましたが、「えいごdeバスケ」を通し、スポーツをする人に対する違う視点からのサポートに気づくことが出来ました。この気づきで私は将来の可能性を広げることができるのではないかと感じました。これからの学生生活では、物事の視点を2つ以上考えるようにしていきます。そこに新しい発見や気づきが生まれる可能性があると感じながら、多くのことに挑戦していきたいと思えます。

【報告：体育学科4年 大塚 百恵】

※本報告は「えいごdeバスケ」の主催者側から学生トレーナーの派遣の依頼を受けた白坂広子新助手より情報提供いただきました。

日本スポーツ栄養学会第4回大会 参加報告

8月18日（金）～20日（日）の3日間に渡り、大妻女子大学千代田キャンパスにおいて日本スポーツ栄養学会が開催されました。

大会プログラムのなかには、夏冬併せて7回のオリンピックに出場された橋本聖子さんによる「2020年オリンピック・パラリンピック東京大会がもたらすもの」と題してスポーツを通じた人材育成と健康街づくりについての特別講演や、リオデジャネイロ2016オリンピック・パラリンピック大会の栄養サポート、2020年のビックイベントに向けた食のホスピタリティ、ジュニアアスリートのタレント発掘・育成事業の現状と今後の展開、女性アスリート特有のスポーツ障害と問題点、さらにはスポーツ栄養学の基礎研究の新しい知見などを取り上げたシンポジウムが組み込まれていました。一般演題では、栄養サポートの実践報告や、食教育、食事とスポーツパフォーマンス、女性アスリートなど、多くの調査・研究報告がなされました。本大学からは、早川公康教授、岩田純准教授、山田大進新助手、山上はるか新助手、畠山朝美さん（大学院生）が学会での発表を行いました。

第4回目となる今大会は「2020年に向けてスポーツ栄養学に求められるもの」をテーマとし、大会長である大妻女子大学家政学部 小清水孝子教授より講演がありました。近年ではトップアスリートのみならず、ジュニアアスリート、健康づくりのためのスポーツなど、現場における栄養サポートのニーズが社会的に高まり、公認スポーツ栄養士の育成・養成プログラムも確立されました。栄養サポートはスポーツ科学の各専門スタッフと連携してエビデンスに基づき実施されますが、エビデンスが十分でない

事例も多く、栄養サポート現場で持ち上がった課題点や問題点に対して考察、事例報告をまとめていくことの重要性を話されました。また、運動生理学、運動生化学、スポーツ医学、心理学、トレーニング論など様々な分野と連携し、情報提供・交換していくことも求められます。本大会を通じて2020年の東京オリンピック・パラリンピック、それ以降の次のステージを見据え、スポーツ栄養学のさらなる発展を目指したいと述べられました。

仙台大学運動栄養学科では、運動・スポーツの現場および教育の現場、健康づくりの現場において運動・スポーツを行う人に対し栄養指導ができる能力を身につける運動栄養サポーター制度が確立されました。今回の学会では、運動栄養サポーター上級を取得した学生のうち2名（梅津龍さん、阿部紗央理さん）の学生も学会に参加しました。学会に参加したことで学んだことや感じたことを運動栄養サポート研究会活動で活かすとともに、後輩たちにも受け継ぎ、さらに盛り上げていってほしいと強く思います。私たち教職員も、2020年、さらにその先に必要とされる今後のスポーツ栄養学に求められるものを考えながら、現場における栄養サポートのニーズに応えられるよう、取り組んで参りたいと思います。

【報告：新助手 菊地遥】



2017オープンキャンパスを開催～過去最高の1,086名が来場～

毎年恒例となっている本学のオープンキャンパスが8月5日（土）に開催され、梅雨明け宣言直後の大変暑い中ではありましたが、今年は高校生や保護者など1,086名の方々にご来場いただき、おかげさまで来場者数が過去最高を記録しました。

オープンキャンパス当日は10時からオープニングセレモニーが開催され、6学科それぞれの学生の代表が学科の特色や取得できる資格、就職先などをわかりやすく紹介しました。

オープニングセレモニー終了後には、本学の施設・設備について詳しく知ることができる「キャンパスツアー」

や、保健体育教師を目指す高校生を対象とした特別講座、小論文講座、本学とオリンピック・プロスポーツに関する展示会など数多くのイベントを用意し皆さんをお迎えしました。

参加した高校生からは「仙台大学にはたくさんの施設が充実していて大変興味を持ちました」「将来はアスレティックトレーナーになりたいと考えており、テーピングの体験会などはとても参考になりました」といった声が多く寄せられ、大盛況のうちに終了しました。



全日本プッシュスケルトン選手権大会優勝を学長に報告

8月29日（火）、全日本プッシュスケルトン選手権大会の結果報告のため、ボブスレー・リュージュ・スケルトン部の学生らが阿部学長を表敬訪問しました。

8月5日に長野県長野市を会場に開催された同大会では、男子の部で明成高校1年生の木下凜選手が初優勝、女子の部では本学研究員の小室希選手が5度目の優勝を果たし、その他にも本学関係者が多数入賞しました。

初優勝の報告をした木下選手は「日頃のトレーニングの成果を出すことができ、更にコースレコードを出しての優勝は大変うれしく思います。次は（スケルトンの）全日本選手権で表彰台を狙います」と力強く語ってくれました。また、小室選手も「大きなケガをきっかけに新たなトレーニング方法を考え実践することによって出た成果だと思います。平昌オリンピック出場に向けて更に練習を重ねたいです」と2月に開催されるオリンピックに向けてさらに気を引き締めている様子でした。

全日本プッシュスケルトン選手権はスケルトン選手のオフシーズンの成果を発揮する場の一つとして毎年開催されています。



阿部学長（前列中央）を表敬訪問したボブスレー・リュージュ・スケルトン部の学生（優勝した木下選手は右から3人目、小室選手は同5人目）

プッシュスケルトン選手権について（ルール）

- ① 光電管をスタート板から15mと65mの位置に設置し、その間の50mを100分の1秒まで計測する
- ② 競技順について、1本目はくじ引き、2本目は1本目の順位の違いからスタートし、2本の合計タイムで順位を争う
- ③ 選手は、スケルトン競技用のスパイクかルールに合った陸上用のスパイクを用いる

（長野県ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟HPより引用）

女子サッカー部「東北Liga Student2017」で2連覇

8月16日～17日の二日間、山形県酒田港北緑地公園多目的広場にて東北Liga Student2017決勝トーナメントが行われ、準決勝で常盤木学園高校（1-1、PK戦4-2）、決勝戦で聖和学園高校（2-1）に勝利し、優勝・大会2連覇を達成することができました。この大会は東北地域の高校・大学12チームが参加し、4月からのリーグ戦、8月の決勝トーナメントを戦うレギュレーションになっています。

表彰式では、本学主将の高野沙緒里（体育学科4年）が「運営に携わってくれた各チームの先生方や生徒の皆さんに感謝します。私が大学を卒業してからもこの大会がさらに発展し、東北地域の女子サッカーが盛り上がってくれることを願っています。」と優勝スピーチを行いました。

【報告：女子サッカー部 監督 講師 黒澤 尚】



2連覇を達成した女子サッカー部

南條和恵監督が宮城県警察学校より 柔道の技術指導に感謝状を授与



感謝状を授与された南條和恵監督（左から3人目）

9月14日（木）本学の学長室において宮城県警察学校の千葉泰忍校長先生より南條和恵監督に対し警察学校の柔道技術向上に貢献したことへ感謝状が手渡されました。

南條和恵監督は今年5月に宮城県警察学校において柔道・剣道を指導している警察官約100名の方々に「女子柔道の安全指導」と題した講話を行ったほか、宮城県警が女子武道指導者として初めて採用した2名の職員に対し、大会出場に向けた稽古を行って来ました。また、その2名は今後、掲載津業務に従事しながら柔道選手として活動していただくだけではなく、他の警察官への柔道指導にも携わっていくということです。

千葉校長先生からは「高いレベルの方が女子柔道を指導していただけの機会がこれまではありませんでした。南條監督の指導は大変助かりました」と感謝の言葉を述べられました。また、感謝状授与式当日には、南條和恵監督から技術指導を受けた女性職員2名も同席しそれぞれから感謝の意が述べられました。

警察学校での指導の際には本学柔道部の女子選手も一緒に参加させていただいたということで「学生の勉強にもなり、感謝しています」と感謝状を受け取った感想と併せ、貴重な機会を与えていただいたことへの感謝も述べていました。

南條和恵監督は今年度、全日本柔道連盟からの委嘱を受け「女子柔道振興委員」も務めています。

なお、この感謝状授与の話題は9月27日付の河北新報朝刊でも紹介されました。

〈目次〉

・南條和恵監督が宮城県警察学校より柔道の技術指導に感謝状を授与	1
・ハワイ大学AT研修アドバンスコース実施 ・中国・瀋陽師範大学視察報告	2
・キャリアプランニングⅠで 宮城県警による講話	3
・仙台大学開放講座 「脅かされる世界平和 北朝鮮の跋扈」を開催 ・キャンプ実習の成功と来年への課題	4
・遠藤保雄上級研究アドバイザーが「日本経済と警備業」出版	5
・河北新報に全面広告を掲載しました	6
・開学50周年記念 「2017東北こども博」仙台大学 大学祭「スポーツフェスティバルin柴田」 「柴田町ホストタウン登録 ベラルーシ新体操演技発表会」が開催されます	7

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

ハワイ大学AT研修アドバンスコースを実施

平成29年9月2日～9月10日にかけてハワイ大学アスレティックトレーニング研修アドバンスコースが実施されました。今回の研修は、2003年12月にスタートしてから25回目(15年目)という節目の回でした。参加学生は4名と少数でしたが、現地ATCの金岡友樹氏、田村薫里氏、大庭有希也氏に英語で指導をいただく中で、日に日に英語環境へ順応していく学生達の姿が印象的でした。

「献体解剖実習」は、国内ではなかなか体験ができない実習であり、学生達は御献体への追悼と感謝の意を胸に実際の「解剖」を学んでいました。実習はほぼ英語で行われましたが、一緒に参加したハワイ大学の大学院生(以下UH学生)の中に日本人がおり、時々日本語での解説も交えていただけたため、より実りある学習体験となりました。UHではより詳しく献体解剖実習が行えるHawaii International Athletic Training Education Clinic(HI-ATEC)という国際研修プログラムを有しており、今回の献体解剖実習を体験した学生からは、HI-ATEC参加への意欲を示す学生もいました。その他の講義・実技研修もUH学生と共に受講し「英語のみ」という条件下のなか、説明を理解し、身振り手振り駆使しながらもUH学生とのコミュニケーションが取れている姿に、本学学生のグローバル化が進んでいる事を感じました。

研修中には昨年度卒業し現役で日体協AT試験に合格した村上泰司さん(運動栄養学科卒業、NATA-ATC取得のためUH大学院進学を目的に渡航)との再会も実現しました。4名の参加学生にとって、今年春まで身近にいた先輩の村上さんとの交流により、アスレティックトレーナー活動へのモチベーションが高まったようでした。村上さんからは“目的や目標をしっかり持って、決して諦めずに頑張ってください!”という熱い激励の言葉をいただきました。

今回の研修は、学生達にとって今後の学生生活へ大きな影響を与えるものであったと思います。このAT研修を通して得られた“気づき”を胸に、どのような学生へ成長していくかが楽しみです。今後も、本学とUHとの良い関係が継続していくことを願っています。

【報告：新助手 小野勇太】



修了式の様子 UHの関係者とともに

中国・瀋陽師範大学視察報告

9月11日(月)から2泊3日の行程で、朴澤泰治 理事長・学事顧問と共に瀋陽師範大学および大学附属幼稚園を視察してきました。

中国では、「国家は計画出産を推進し、人口の増加を経済発展計画に適応させる」という理念に基づき、1982年から一人っ子政策を実施してきましたが、その後、高齢化に対応するため、2016年から二人っ子政策へと舵をきりました。子どもや子育てに関する制度の変化や経済発展に伴い、子どもたちを取り巻く環境も変わってきました。このような、社会環境の変化は子どもたちの身体と心の健康や発育発達に影響を及ぼしています。中国政府体育部によると、子どもの体力・運動能力、健康状態は1985年から低下していると報告されています。その原因として、環境汚染、過保護、子どもを狙う犯罪、子どもの遊びの変化などが挙げられます。結果として、運動不足による心身機能の低下、子どもの肥満傾向の増大などの課題が生じることとなりました。



付属幼稚園内で遊ぶ子どもたち

本学と連携協定を結んでいる中国瀋陽師範大学の附属幼稚園では、園児の運動能力の向上を目指し、中国教育部が2014年に公布した「3歳～6歳児童学習と発達ガイドライン」を受け、園独自のカリキュラムの中に「運動」を重点的に取り上げています。5歳児クラスを例にとると、カリキュラムに走・跳・投の基礎運動を毎日1コマ組んでいるのに加え、スケート、サッカーといった選択種目を週2コマ行うなど、1週間に7コマの運動枠を設定して子どもの運動能力向上に取り組んでいます。写真は、そのフィールドと保育の様子です。今年度スタートした子ども運動教育学科では、日本・中国・韓国その他の海外の保育の動向に焦点を当てた比較研究を進めています。本視察で得た知見は、今後の学科の研究に繋がる重要な視点であったと確信しています。

【報告：子ども運動教育学科長 教授 久能和夫】

キャリアプランニング I で宮城県警による講話

9月28日（木）の1～2限と29日（金）の1限に行われた、必修科目「キャリアプランニング I」の全体講義において、宮城県警察本部犯罪被害者支援室の内海祐子氏、および紀野國宏明准教授による講話が開催されました。なお、木曜2限には河北新報社より取材を受けました（内海氏の講話のみ）。

当日は、まず内海氏より「大学生と犯罪被害—充実した『学生生活』を送るために—」と題した講話が行われました。内容は、犯罪被害の問題や防犯の心構え、また被害にあった場合の対処の仕方および相談先を知る、というものです。犯罪被害にあう可能性を常に自分事として捉え、またそれを自覚したうえでどう生活すべきか、という点について、学生たちはみな真剣な態度で聴講していました。

引き続き行われた紀野國先生による「私たちの仙台大学を取り巻く安全情勢—安心して暮らすために—」と題した講話では、柴田郡や柴田町、および本学での事件事故等の状況を踏まえて、学生が気を付けるべき社会的常識やルールについて注意喚起がなされました。夏休みを終えて後期授業が始まったばかりの学生たちにとって、この講話はいま一度気持ちを引き締め直す機会となったはずです。

なお、キャリアプランニング科目は、学生のキャリア意識の醸成と、それを踏まえた学生生活の向上を目的に、1年生後期から3年生まで3年間にわたり全学生が履修する必修科目です。このうち、1年生配当の「キャリアプランニング I」では、まずは入学してから半年間と夏休みの振り返りを行うことから授業が始まります。今回の講話もまた、学生が各々の生活態度を自己点検し、後期以降の学生生活を充実させる一助となったことでしょう。

（報告：准教授 藪 耕太郎）



県警の方の講話に耳を傾ける学生

「秋の交通安全県民総ぐるみ運動」に参加

9月21日（木）午前7時ごろから約1時間、「平成29年秋の交通安全県民総ぐるみ運動」の一環として、船岡駅周辺で交通安全を呼びかける交通事故防止街頭活動が行われました。本学からも学友会に所属する学生6名と、学生生活室職員2名が参加しました。

冒頭、滝口柴田町長、高橋大河原署長から挨拶があり、その後、交通安全・事故防止を呼びかけながらポケットティッシュを配布しました。この活動は、春と秋の年2回行われており、本学からも毎回学生と職員が参加しております。

【報告：学生生活室】



平成29年度新任者紹介(9月1日付)



ししど みつる
矢戸 充さん
 事業戦略室
 担当課長

9月から事業戦略室でお世話になります矢戸充です。全てが目新しいことばかりでお役にたつまで少し時間がかかりますと思いますが、精一杯頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。

仙台大学開放講座

「脅かされる世界平和・・・北朝鮮の跋扈（ばっこ）」を開催

平成29年9月20日（水）仙台大学第5体育館大教室を会場に、仙台大学開放講座「脅かされる世界平和・・・北朝鮮の跋扈（ばっこ）」を開催致しました。講師は、本学の上級研究アドバイザー、東京事務所所長の遠藤保雄先生。対象は宮城いきいき学園仙南校の学園生で、73名の方に今回の開放講座を聴講頂きました。

宮城いきいき学園は、高齢者の学習ニーズに応えるための学習の場の提供を通じて、生きがいと健康づくりを推進するとともに、地域社会の発展に寄与できる高齢者の地域リーダーとなる人材の育成と地域貢献活動への参加を目的として、平成3年に仙南校が開校されました。現在は、大崎校、石巻校、気仙沼・本吉校、登米・栗原校を加えた計5校が宮城県社会福祉協議会によって運営されています。仙南校では、平成24年より学内施設を使用して月に1～2回、講義や演習など様々な授業が展開されています。



講義に耳を傾ける宮城いきいき学園の受講者

講話では、軍事的な緊張が連日報じられている北朝鮮問題を取り上げ、北朝鮮が核実験やミサイル発射実験を実施するようになった歴史的経緯やそのねらい、核開発とミサイル開発が可能になった理由、ミサイル・核攻撃の可能性の高まりに対して日本はどう対処すべきか等、遠藤先生から分かりやすく解説して頂きました。

参加者の方々は、真剣な眼差しで聴講されて、自分たちの世代だけでなく、お子さんやお孫さんの次世代、次々世代の安全で平和な暮らしに関わる大事な安全保障の問題なだけに、今回の北朝鮮問題に関しては、強い関心を持たれている様子でした。

今回の講話が、参加者の方々にとってグローバルな視点で北朝鮮問題や安全保障問題を考えて頂く、良い機会になったと思います。

【報告：スポーツ健康科学研究実践機構事務室 目黒 翔太】

キャンプ実習の成功と来年への課題

平成29年度の集中授業「キャンプ」が、宮城県白石市「南蔵王野営場（国立花山青少年自然の家管轄施設）」にて行われました。第一団は8月30日～9月2日、第二団は9月4日～7日、それぞれ3泊4日の日程で実施されました。実習生は各団で50名、学科部活混成の8班に分かれて野外生活や沢登り、登山に取り組みました。それぞれの班にはキャンプカウンセラーとして補助学生（本学3～4年生）が一人ずつつき、実習生と生活を共にしながら、野外活動の指導にあたりました。

第一団は雨予報でのスタートとなり、1日目は雨が降る中テントを濡らさないように設営することとなり、どの班も苦戦を強いられました。しかし、天気予報を覆し、2日目の沢登りと3日目の登山は太陽の光を浴びながら実施することができました。特に3日目の登山は、近年でも一番の晴天に恵まれ、気持ち良く歩くことができました。また、夜のキャンプファイヤーも実施することができました。キャンプ実習の登山では、実習生の主体性を育むため、カウンセラーが道を教えるのではなく、実習生が地図とコンパスを使って進む道を探す方法をとっています。1団では、地図とコンパスを使わず、安易に登山道を進んでしまった班が、間違った道を選んで進んでしまいました。人的ミスも重なり、1時間以上も間違った道を進んでしまいましたが、本部スタッフが早めに対処して遭難は避けることができました。改めて、スタッフトレーニングとリスクマネジメントの重要性をスタッフ全員で共有することができました。



キャンプ実習に参加した学生たち

（次頁に続く）

第二団では、気持ちのいい秋晴れでのスタートとなり、テント設営や野外炊事も順調に進みました。2日目の沢登りも気温があがり、絶好の沢日和となりました。沢登りの最終地点では、教職員も天然の一枚岩ウォータースライダーから水の中に飛び込み（滑り込み）、学生と共に大いに盛り上がりました。3日目は雨の予報で、キャンプファイヤーは室内で実施することになりましたが、登山でも激しく降られることはなく、無事に終えることができました。

今年の実習は、ルール違反による下山者もおらず、登山も途中でリタイアする者もいませんでした。実習生が自覚を持ってしっかりと持ち物を準備し、真剣にプログラムと向き合ってくれたためであると思っています。また、大学院生TA

(ティーチングアシスタント)や補助学生の活躍も素晴らしく、近年でも最も指導陣の能力(パフォーマンス)が充実していました。その結果、非常にレベルの高いキャンプ実習となりました。残念なことは、実習生が少なかったことです。部活の遠征や試合が重なる時期であるため、どうしてもキャンセル者が増えるのは仕方ありません。しかし、5年前には1団あたり倍近くの実習生がおり、15班編成の年もありました。実習に関わっている教員からも実習の意義を認めていただき、学生の達成感と満足感に溢れている表情を見ていると、何とかしてもっと多くの学生・教職員にキャンプ実習に参加してもらいたいと強く感じました。

【報告：講師 岡田 成弘】



遠藤保雄上級研究アドバイザーが「日本経済と警備業」出版

本学が50周年を迎えた今年4月、遠藤保雄上級研究アドバイザーが「日本経済と警備業—ゼロから3兆円産業への軌跡—」を出版しました。これは現代武道学科の創設以来担当してきた科目「日本経済と警備業」の講義録をベースにまとめたとのこと。

警備業に関する学術的な研究書は、この分野の第一人者である本学の田中智仁准教授による「警備業の社会学」「警備業の分析視角」(いずれも明石書店)があります。これらは社会学的な視点で整理されているのに対し、本書は経済学的視点で警備業の動向を追ったもので、第6章からなる多角的な産業経済分析書です。まず、1962年に産声を上げた我が国警備業の創生・発展・成熟の過程を1960年代以降の日本経済の高度経済成長期、安定経済成長期、90年代、失われた20年に突入した2000年代、そして最近年のアベノミクス期に着目して考察しています。特に、バブルの弾けた90年代以降今日までに、日本経済が低迷を続ける中、警備業の売上高は1兆円から2.4兆円、そして、3.3兆円に急増していますが、不況の下での警備ニーズの高まりを丹念に掘り起こしその謎解きに挑戦しています。次に、主要警備業務に着目し警備業務がなぜ拡大してきたか豊富な経済データを駆使して明らかにしています。機械警備の進展と都市での高層複合ビル建設に伴うシステム警備の導入により拡大した施設警備、スーパーマーケットの増加に伴い急増した万引き防止の保安警備、飛行機の旅行客が増加する中、ハイジャック防止のため不可欠となった空港保安警備、ATMの普及と2人三脚で増加した現金輸送警備など生活実感に合わせた分析が展開されています。第三は、テロ対応、サイバー攻撃対処、東日本大震災で必要性が認識された災害対応警備、東京五輪・パラリンピック警備の準備など新しい警備ニーズへの対応も挑戦課題として取り上げています。第四は、2000年代に入り顕著になってきた警備企業の再編統合を追う一方、警備業界の抱えるアキレス腱ともいえる「過当競争・警備料金値引きの横行・低迷する警備員賃金と人手不足・警備業務の質の劣化」など、警備業の抱える問題をあぶり出しています。そして、その改善にどう取り組むべきかにつき鋭い論法を展開しています。その主張は、警察業務と類似性がある警備業について、その社会的地位の低さを取り上げ、警備業務は営利を目的とした私的な経済行為だが、犯罪抑止や事故防止など公益的な機能を兼ね備えているとし、準公共産業であるというものです。

本書は、日本社会に向けた小さな大砲という役割を担う、ある意味で、船岡のキャンパスに静かに咲く「警告の論書」といえるかもしれません。



河北新報に全面広告を掲載しました

本学の開学50周年を記念し、9月30日の河北新報朝刊に「仙台大学開学50周年記念特集」全面広告が掲載されました。 広告では「東北こども博」「国際交流イベント(IFE)」「歴史を彩る卒業生の紹介」などが紹介されています。

なお、広告掲載にあたっては、数多くの企業様からのご協賛も頂戴いたしました。この場をお借りして御礼申し上げます。

仙台大学開学50周年記念事業

国際交流イベント IFE in SENDAI
International Friendship Event

日時/11月1日(水)13:00~ 会場/ゼビオアリーナ仙台

仙台大学と国際交流機構を結んでいる11か国16大学・1研究機関から学生を交流し、それぞれの国の特色を現したパフォーマンス展示や、本学の学生による新体操やダンス、演劇の披露による国際交流イベントが実施されます。

2017 東北こども博

日時/10月7日(土)~8日(日) 会場/仙台大学 10:00~16:00

東北23県11市町村に11の子ども博を開催し、子どもが楽しめる展示や体験型イベントを実施し、親子で楽しむ機会を提供します。

特色ある教育環境

最先端の教育環境、充実した施設、多岐にわたる学生活動、国際交流イベントなど、仙台大学の魅力を紹介します。

歴史を彩る卒業生

仙台大学の歴史を彩る卒業生たちの活躍を紹介します。

祝 学校法人 朴沢学園 仙台大学開学50周年 — 白河以北唯一の体育系大学として半世紀 —

仙台環境土木株式会社

〒981-0814 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-278-2976

石井ビル管理株式会社

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-0-3
TEL: 022-717-3166 FAX: 022-717-3172

丸丸製菓株式会社

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-0-3
TEL: 022-242-4341

MIZUNO

明日は、きっと、できる。

仙台大学開学50周年

地域と共に。

祝 仙台大学開学50周年

おめでとうございます

祝 学校法人 朴沢学園 仙台大学開学50周年

西

開学50周年
おめでとうございます

蔵王アスリートクラブ

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 023-693-0789

KOSEKI

これからもお客様と共に
東北の未来をサポートします

コセキ株式会社

〒980-0021 仙台市青葉区東照宮2-29-2
TEL: 022-72-2311

河合新報トラベル

仙台市青葉区玉置1-1-10
TEL: 022-211-6960

ホーチキ株式会社

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-226-8477

株式会社フクシエンタプライズ

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-226-8477

竹井機器工業株式会社

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-226-8477

カメイ株式会社

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-226-8477

笠松電気株式会社

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-226-8477

株式会社オオエダ商会

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-226-8477

株式会社イトーキ

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-226-8477

株式会社伊藤印刷

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-226-8477

有限会社アート工業

〒980-0021 仙台市青葉区中央4-10-3
TEL: 022-226-8477

開学50周年記念

「2017東北こども博」「仙台大学 大学祭」「スポーツフェスティバルin柴田」「柴田町ホストタウン登録 ベラルーシ新体操演技発表会」が開催されます

10月7日（土）～8日（日）に本学を会場に「2017東北こども博」が開催されます。今年は特に「柴田町ホストタウン登録 ベラルーシ新体操演技発表会」が7日（土）に開催されるなど、例年になく盛り上がりを見せそうです。

また、期間中には「仙台大学 大学祭」や柴田町との共催事業である「スポーツフェスティバルin柴田」も同時開催されます。



本学開学50周年記念事業国際交流イベント 「IFE in SENDAI」 (International Friendship Event) を開催



すべての演技が終了し、出演者全員での記念撮影

本学は今年度開学50周年を迎え、そのメインの記念事業として、本学と国際交流提携を締結している11か国18大学・1研究機関から学長・学部長クラスの先生方と学生約160名を招き、10月31日～11月2日の3日間にわたり国際交流イベントIFE in SENDAI (International Friendship Event) を開催しました。

10月31日(火)には、大学において、午前10時から、歓迎挨拶と参加者紹介の後、LC棟前で国際交流提携大学との交流開始年を石碑に刻んだ記念プレートのお披露目があり各大学全員が立会い見守るなか除幕式が行われました。その後、海外ゲスト全員で2011年東日本大震災の仙台市の被災状況を記録したビデオを視聴するとともに本学の施設を見学しました。午後は、学生達は、IFE会場であるゼビオアリーナでリハーサルを実施するとともに、終了後、名取のサッポロビール園で交流夕食会を行う一方、各機関の代表者の方々は、大学地元にある旧家で日本文化交流を体験し、本学とのかかわりに関しスピーチをいただきました。

11月1日(水)には、午後1時からゼビオアリーナ仙台を会場に、メインイベントであるIFEが開催され、弓田講師およびマンキン事業戦略室コーディネーターの英語による司会進行により、各国の伝統ある素晴らしい民族舞踊や演武が披露されるとともに、本学も体操・新体操演技や日本武道を紹介し、各大学それぞれ威信をかけた競演を学生らしいパフォーマンスで示し、来賓や一般市民の方々、近隣の小・中学生、保護者、本学学生と明成高等学校生徒ら合わせ、約3,000名が魅了されました。
(次ページに続く)

〈目次〉

開学50周年記念事業 「IFE in SENDAI」を開催	1-3
マスコットキャラクターの愛称が 「Wolfie」(ウルフイー)に決定	3
・馬場皐輔投手 阪神タイガースから ドラフト1位指名を獲得 ・開学50周年記念 「2017東北こども博」が開催されました	4
・「野外教育指導者育成プログラム」の修了式 が行われました	5

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

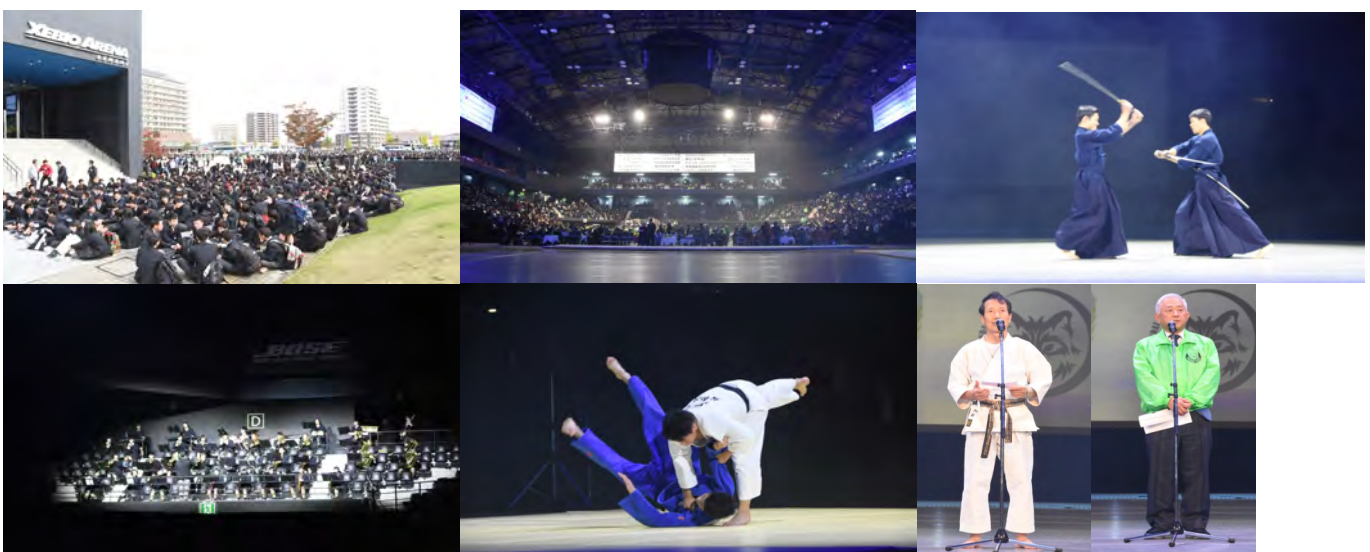
Email kouhou@sendai-u.ac.jp



(左上から時計回りに) 除幕式後の記念写真、IFE in 仙台の会場となったゼビオアリーナ仙台、被災した荒浜小学校の見学、地元旧家での集合写真

また、各大学の演技の合間には、50周年記念シンボルマークおよびマスコット・キャラクターを創作した台東大学から本学への留学経験を有する余亭儀さんに対しての感謝状が贈呈され、梁教授に代理授与いただきました。140年近い歴史を貫く「実学と創意工夫」という建学の精神を体現した「根付」を制作者であるご高齢の明成高校卒業生から贈呈、現役明成高生徒による和太鼓・ブラスバンド演奏の披露など、学校法人挙げてのイベントで盛り上がりました。終了後は、ゼビオアリーナに設置されたウェルカムパーティー会場で、白坂広子・牧人両氏による同じく英語による司会により、朴上海体育学院教授の乾杯の後、大学毎のテーブルを囲み、国際交流の楽しい輪を広げました。

11月2日(木)には、記録ビデオで紹介した震災遺構である仙台市立荒浜小学校を見学し、参加各大学の全学生を中心に震災から6年7ヵ月経過した荒浜地区の被災状況と復興の景色を目に焼き付けていました。2011年の東日本大震災の際には国際交流提携大学からも多大なるご支援を賜りました。今回の見学では各大学の皆様に東北の復興の今を直接肌で感じていただける機会ともなりました。仙台大学は、この国際交流行事実施を機に、海外の提携大学等とさらなる交流をはかり、なお一層、国際的に活躍する人材育成にも寄与して参ります。参加された、海外各機関の方々はもとより、本学および学外関係者の方々に対して、ご協力に厚く感謝申し上げます。



(左上から時計回りに) 開場を待つ明成高校の生徒たち、満員となった会場の様子、オープニングを飾った剣道の形、開会の挨拶を英語で行う朴澤理事長・学事顧問と阿部学長、本学学生による柔道の演武、明成高校のブラスバンド演奏



(左上から時計回りに) 瀋陽師範大学、ベラルーシ国立体育・スポーツ学院、ハワイ大学マノア校、台東大学、
 カヤニニ応用科学大学、上海体育学院、韓国国立体育大学校、ホーチミン市体育大学、
 シーナカリンウィロート大学、龍仁大学校、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校、吉林体育学院、
 リレベルト大学、青海省体育科学研究所、ノアフェンス国民大学、ハノイ大学、
 カール・フォン・オシエツキー大学オルデンプルグ、東北師範大学、カンタベリー大学CCEL、ベラルーシ国立体育・スポーツ学院

マスコットキャラクターの愛称がWolfie(ウルフイー)に決定しまし

本学の開学50周年に合わせ、本学に留学経験がある余亭儀さん（台湾・台東大学卒）作製のオオカミをモチーフとした3つのマスコットキャラクターの愛称が「Wolfie」（ウルフイー）に決定しました。

愛称は「2017東北こども博」で募集し、多数ご寄せられた愛称の中から秋田県湯沢市の松田様にご応募いただいた愛称に決定されたものです。

マスコットキャラクター（「Wolfie」）は今後末永く使用されるものですので、よろしくお願いたします。



硬式野球部の馬場皐輔投手 阪神タイガースからドラフト「1位」指名獲得

10月26日におこなわれた「2017プロ野球ドラフト会議」において、本学硬式野球部の馬場皐輔投手（体育学科4年一宮城・仙台育英学園高校出身）が福岡ソフトバンクホークスとの競合の末、交渉権を獲得した阪神タイガースより1位指名を獲得しました。

1位指名獲得後の記者会見で馬場投手は「1年目から自分の長所を生かし、長くプレーできる選手になりたい」と抱負を語りました。記者会見後には会見場の外で待ちわびた約80名の硬式野球部員から阪神タイガースの応援歌である「六甲おろし」の大合唱に迎えられ、祝福の胴上げも行われました。

翌日の27日には早速、阪神タイガースの葛西スカウトら3名が本学を訪れ、馬場投手への指名あいさつが行われ、ドラフト会議当日に金本知憲監督が引き当てた「交渉権獲得」が印字された用紙が手渡されました。本学からのプロ野球選手誕生は2015年の熊原健人投手（横浜DeNAベイスターズ）に続き2人目です。



本学開学50周年記念「2017東北こども博」開催

10月7日（土）8日（日）の2日間、仙台大学開学50周年記念「2017東北こども博」（主催：東北こども博実行委員会、後援：文部科学省／宮城県など）が本学を会場として開催され、2日間で約16,300人の方々にご来場いただきました。

「東北こども博」は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の復興支援の一環として「被災地の子どもたちに元気を」を合言葉に始まり、今回で7回目の開催となりました。今年も、子どもたちに、遊んで、からだを動かし、元気になってもらおうと全国の玩具メーカーや地元企業が協賛くださいました。ウルトラマンオーブやシルバニアファミリーなどの人気キャラクターによるステージショー、サッカーや野球などの競技に挑戦できる「ちびっこスポーツ広場」、グルメ屋台などが並ぶ「お祭り広場」や「復興市場」（女川のホタテ焼き・亘理のいち氷などが出店）など多彩な催しが行なわれ、各会場では大人も子どもも夢中になって楽しんでいました。

また、会場内には本学にある6つの学科の特色を生かした体験イベント等も行われ、そのうち、現代武道学科のブースでスポーツチャンバラを体験した小学生は「初めてのスポーツチャンバラでした。大学生が優しく教えてくれたのでとても楽しかったです」と話してくれました。

その他にも、7日には今回の目玉となったベラルーシ新体操ナショナルチームによる演技発表会が行われ、約600人の方々にご来場いただきました。また、8日にはリオデジャネイロオリンピックボート競技日本代表の大元英照選手（本学卒）と2009年ボートU23世界選手権で銀メダルを獲得した西村光生選手によるトークショーや、本学の卒業生が集う「ホームカミングデー」も同時開催されました。なお、ホームカミングデーでは、東日本大震災で挙行できなかった卒業式も行われました。



（上）スポーツチャンバラを体験する小学生
（下）ベラルーシナショナルチーム新体操演技発表会

文部科学省「職業実践力育成プログラム」(BP) 「野外教育指導者育成プログラム」の修了式が行われました

9月28日(木)午後、仙台大学「野外教育指導者育成プログラム」の修了式が行われました。このプログラムは、大学等において社会人や企業等のニーズに応じた実践的・専門的なプログラムを「職業実践力プログラム(Brush up Program)」と文部科学大臣が認定する制度を利用したものです。社会人等を対象とし、大学の教育・研究資源を活かして編成されたプログラムにより体系的な知識・技術等の習得を目指す制度です。今年度よりスタートした本事業は、「教育」、「野外生活技術」、「リーダーシップ」、「安全管理」、「環境保全」、「事業計画・準備」、「インターンシップ」、「評価」というテーマに沿って、120時間のカリキュラムを実施しました。4月から9月にかけて、国立花山青少年自然の家、宮城県蔵王自然の家、バックカントリークラスルーム、石井スポーツなどの関連団体スタッフから、各団体の実践現場で知識やスキルを教わったり、本学の飯田上級研究アドバイザーや岡田より講義を受けたりして、野外教育指導者としての資質を高めました。受講者は仙台大学職員1名、大学院生1名の計2名でした。2人とも無事に、「履修証明書」が交付されました。以下、受講者の感想です。



修了式での記念撮影、中央が修了生の伊勢さん(叶さんは都合により欠席)

伊勢裕介(仙台大学職員)

仙台大学の皆様のご理解とご協力があつて、野外教育指導者育成プログラム(BP)を無事に修了することができました。ありがとうございます。野外の知識が全くない状態で、プログラムに参加しましたが、飯田先生、岡田先生の指導があり、野外の様々な知識やスキルを身に付けることができました。また、プログラムの中では、インターンシップとして、実際のキャンプに指導者として参加しました。全日程、雨という厳しい環境の中、参加した子供達と様々な課題に挑戦し、野外を通じて子供達の成長した姿を見ることができました。改めて、野外の素晴らしさを実感しました。この経験を自分の立場で、今後は大学または社会に還元できるように、日々精進していきたいと思ひます。

叶 敬偉(仙台大学大学院)

時間が経つのは早く、半年間実施された野外教育指導者養成プログラムを終了し、このたび履修証明書を交付いただきました。お世話になった先生方、本当にありがとうございます。私はもともと自然環境が好きだったことをきっかけに、自然と触れ合う機会の多いこのプログラムへ参加しましたが、そういった触れ合いはもちろん、自分自身の成長とさらなる教育の充実を肌で感じる事ができ、大変勉強になりました。今回の経験を通し、子どもたちの笑顔溢れる素晴らしいプログラムに関しな一層、学んでいきたいと思ひます。

本事業を進めるにあたって、大学内外の多くの関係者にご尽力いただきました。本当にありがとうございます。飯田上級研究アドバイザーを始め、只野室長にもご尽力いただきました。非常に充実したカリキュラムで受講生にとっても有意義なプログラムでしたが、半年という短い期間の中で多くの授業を消化しなければならないスケジュールや、社会人と学生と講師の日程調整の難しさ、参加者確保のための広報など、課題や反省もありました。今後は、今年のプログラムを評価し、持続可能な形を模索している必要があると言えます。

【報告：講師 岡田 成弘】



50周年記念シンボルマーク

Monthly Report

SENDAI UNIV.
PUBLIC RELATIONS
Vol.139 / 2017 .NOV
(月1回発行)

本学開学50周年記念 「第13回スポーツシンポジウム」開催



トークセッションに出演したマーティ・キーナート氏、田尾氏、山下氏（左から）

11月30日（木）、「せんだいメディアテーク」を会場に、仙台大学開学50周年記念第13回スポーツシンポジウムが『野球の楽しみ方、支え方、伝え方』～2020東京オリンピックを契機に野球の更なる発展を考え、東北を元気にする～をテーマに開催され、おかげさまで約370人の方々においでいただき立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。

トークセッションでは、東北楽天創設時のゼネラルマネージャーであった本学上級研究アドバイザーであるマーティ・キーナート氏を進行役に、初代監督の田尾安志氏、初年度のヘッドコーチや2軍監督、編成部長などを務めた山下大輔氏の3名が創設1年目の苦労などを振り返りました。特に田尾氏は、地域に受け入れられる球団として「ファンが何を望んでいるかを考えるのが良い球団」と強調、山下氏は「楽天は球場をエンターテインメントにして仙台のファンを集め、チームに力をもらった」と語りました。

また、引き続き行われたパネルディスカッションでは、本学硬式野球部監督の森本吉謙教授、仙台育英高校硬式野球部監督の佐々木順一郎氏、野球侍ジャパン女子代表監督の橘田恵氏の3名がコーディネーターを務めた宮西智久教授とともに2020年東京五輪を念頭に競技発展の在り方や、野球人口減少の中で考えるべきこと、各指導者の立場からの野球の楽しみ方、野球界やそれぞれのカテゴリーで抱える問題などについて、各パネリストから熱心な討論がなされ野球競技発展の在り方についてなどを討議しました。

このスポーツシンポジウムは仙台市・河北新報社・仙台大学共催、スポーツコミッションせんだい協力により開催されているもので、今年で13回目の開催となりました。

〈目次〉

開学50周年記念 「第13回スポーツシンポジウム」開催	1
・ 本学第10期卒業生「還暦同期会」開催 ・ 運動栄養学科「給食運営実習Ⅰ」	2
・ 「柴田町フットバスの集い2017」開催 ・ 第39回みやぎ大菊花展柴田大会 ・ 魚津市長が本学へ表敬訪問	3
・ 阪神タイガース ドラ1の馬場卓輔投手 背番号は「18」 ・ 仙台大学親睦会総会・忘年会 開催	4
・ 軟式野球部の千葉亮太選手 日本代表に初選出 ・ 女子バスケットボール部大会結果	5
・ ウェイトリフティング部大会結果 ・ CSULBのカールトン・フォルテン ベリーさんテレビ東京「YOUは何しに日本へ？」で放送予定	6

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

本学第10期卒業生「還暦同期会」開催 熊本から北海道まで50人が参会 母校に開学50周年寄金

11月18日（日）に同期生41名に朴澤理事長・学事顧問、阿部学長はじめとするご来賓、恩師など9名の計50名の参加者で開催しました。

この会は、還暦という人生の節目を機に卒業生が一同に会し懐かしい友や恩師と再会し、お互いの近況を語り合い旧交を温めることなどを目的として、一昨年第8期生の同期会から始まり今回の10期生で3回目の開催となりました。当日は午後3時に船岡駅前の会場に集合して38年ぶりの再会、顔合わせをして大学の開学50周年記念に寄金を満場一致で決定しました。4時からの懇親会では代表幹事から朴澤理事長・学事顧問に寄金を贈呈。久しぶりに再会する部活動仲間や友人、恩師との話に盛り上がり自己紹介で出る当時のエピソードに笑いと拍手が起こるなど時間たつぷりと旧交を温め合いました。最後に校歌を声高らかに歌い、12名参加のサッカー部代表のエールで会を締めお開きとなりました。その後、近くの居酒屋へ総移動しての二次会でも、苦楽を共にした仲間との語らいは尽きることがありませんでした。

翌日は大学に9時に集合して施設設備の見学。当時から現存の第一体育館、第二体育館、特に思い出深いC棟330教室では皆で懐古し記念写真、最新のトレーニング施設や体育館等には驚嘆と羨望、大きく発展した母校に今後の期待を寄せながら同期会を終えました。



久しぶりの再会を祝した記念撮影

【報告：同窓会事務局長 大河原 則夫】

毎年好評の運動栄養学科「給食運営実習Ⅰ」

10月19日～12月15日までの毎週木曜と金曜（12月5日のみ火曜）の全16回、栄養士免許取得のための必修科目「給食運営実習Ⅰ」（3年次開講）で、給食運営能力を修得することを目的とした大量調理の実習が行われています。実習では①栄養バランスや彩りを考えた献立づくり、②発注業務、③調理作業、④衛生管理まで一連の作業を、学生が主体となり食事の提供を行っています。出来上がった給食は調理した学生が自ら検食するほか、食材相当額の食券を給食メニューとして希望する教職員へ販売しています。12月の実習についても、食券予約に余裕のある日もあるそうですので興味のある教職員は運動栄養学科新助手の山田・山上・菅原（助手研究室内線809）にお問い合わせください。教職員の皆様のご協力をお願い致します。



でき上がった給食を試食する教職員と運動栄養学科の学生

メニュー考案者「栄養士役」の運動栄養学科3年の学生たち

「メンチカツは作業工程も多いため、提供時間に間に合うよう手際よく、かつ火が通りやすい大きさとで大量調理できるように総動員で作業しました。また、カルシウム量が多い切干大根を気軽に食べられる和風サラダにしてメニューに取り入れました。」と4人を代表し三浦花奈子さんと工藤るり子さんが話してくれました。



（左から）丹野昂大さん、工藤るり子さん、三浦花奈子さん、藤山貴裕さん

「柴田町フットパスの集い2017」が開催されました

11月4日(土)、「柴田町フットパスの集い」が昨年の第1回大会に引き続き、仙台大学を中心とした柴田町内で開催されました。参加者はボランティアも含め約130名で、遠くは秋田県の由利本荘市から参加された方もおりました。

「フットパス」はイギリス発祥で森林や田園地帯、古い街並みを歩き自然を楽しみながら地域の歴史や景観を楽しむものです。開会式では柴田町の滝口茂町長が「沢山の魅力がある柴田町を感じて歩いて下さい」と御挨拶され、又、各コースについてのフォーラムも開催され、運動栄養学科の岩田純准教授が開発された柴田町の特産物を使った昼食を食べた後、船岡城下町コース・槻木コース・船迫宿コース・富上里山コースの4コース(11グループ)に分かれ、史跡各所解説を聞きながら町内を約2時間かけて歩きました。グループにはそれぞれに本学学生ボランティアが帯同し、写真撮影をしたり交通整理をしたりと活躍し、参加者の方々と共に柴田町の良いところを再発見していたようです。

閉会式の挨拶でしばたの未来株式会社の平間様から、来年は柴田町においてフットパスウォークイベントの全国大会が開催予定であることが紹介され、来年も是非参加して頂きたいとお話され、大会を締めくくりました。



(上) 本学学生食堂「なちゅら」で行われた開会式
(下) コースを歩く参加者たち

【報告：スポーツ健康科学研究実践機構 小川 亜紀】

平成29年度 第39回みやぎ大菊花展柴田大会

10月20日～11月13日の25日間、「花のまち柴田」秋の風物詩、第39回みやぎ大菊花展柴田大会が船岡城址公園を会場に絢爛豪華に開催されました。

会場には県内7市3町12団体による菊の愛好家たちが丹精を込め育てた見事な菊の作品総鉢数2,417点が立ち並び来場者を楽しませました。今年の「仙台大学学長賞」は奥山公彦さんの「兼六香菊(大菊の部)」に決まり11月24日には柴田町役場で表彰式が行われ阿部学長から賞状と楯が手渡されました。



奥山さんに賞状を手渡す阿部学長

魚津市長が本学へ表敬訪問されました

12月4日富山県魚津市市長の村椿 晃市長が本学へ来訪しました。当日は仲野隆士副学長と女子軟式野球同好会部長の岩田純准教授、女子軟式野球同好会キャプテンの佐藤愛都さんと佐々木惟さんが対応しお話を伺いました。

魚津市は全日本女子野球選手権の会場として全国から女子軟式野球愛好家たちの誘致にたいへん力をいれていることから、今回の本学訪問となりました。村椿市長は「是非来年も大会へ出場していただき魚津市で女子野球を存分に楽しんでほしい。お待ちしております。」と話されました。



(写真左から) 岩田准教授、仲野副学長、村椿魚津市長、女子軟式野球同好会の佐々木惟さん、キャプテンの佐藤愛都さん、魚津市小林秘書係長

阪神タイガース ドラ1の馬場皐輔投手 背番号は「18」

12月4日（月）、大阪市内のホテルで阪神タイガースの入団発表会が行われ、ドラフト1位での入団が決定している馬場皐輔投手も参加し、その席上で背番号が『18』と発表されました。

はじめに金本知憲監督が「阪神タイガースは監督をはじめコーチ、スタッフ陣に優しいメンバーがそろっています。しかし、その環境に甘えずしっかりと成長してほしい」と冗談交じりにあいさつ。続いてドラフト指名順に選手紹介がなされ、馬場皐輔投手から自己紹介がスタートし、引き続き行われた記者会見では、初めて阪神タイガースのユニフォームに袖を通した馬場投手は「阪神タイガースの一員になったことを改めて実感しました。1軍で登板し、チームに貢献できるように頑張っていきたいです」と力強く答えました。また、背番号については「素晴らしい番号をいただいたと思っています。この素晴らしい番号に恥じぬように自分へプレッシャーをかけ続けていきたいです」と語りプロの世界での活躍を誓いました。

入団発表会終了後には阪神タイガースファンとの交流イベントも開催され、サイン色紙のプレゼントや写真撮影をこなすなど、早速プロ野球選手としての一步を踏み出していました。



(上) 金本監督と握手をする馬場投手
(下) ボールを片手にガッツポーズする馬場投手

「平成29年度仙台大学親睦会総会・忘年会」が開催されました

12月1日（金）ウェスティンホテル仙台において、平成29年度仙台大学親睦会総会・忘年会が開催され、法人事務局より朴澤泰治理事長・学事顧問をはじめ安倍常務、佐野常務、櫻井理事、藤田理事にご出席いただき、150名という多くの参加者で賑わいました。

最初に総会では、藤井久雄副学長の挨拶から始まり、幹事からの年次・会計報告及び平成30年度の新役員の紹介がありました。

次に忘年会では村上幹事長の開会后、来賓として朴澤理事長・学事顧問のご挨拶、荒井龍弥教授の乾杯に続き今回は開学50周年記念ということで仙台大学出身のサプライズゲスト2人をお呼びしました。1人目は、東北楽天ゴールデンイーグルスのチアリーダーとしてご活躍されている上田亜樹さんより、チアダンスの披露が行われ、華やかな雰囲気を作ってくださいました。2人目は、お笑い芸人としてご活躍されている赤津大輔さんより、すもうとエクササイズを融合した「すもササイズ」という独自のネタをご披露下さり、会場の雰囲気を盛り上げて頂きました。その後は大抽選会を行った後、阿部芳吉学長の閉会の挨拶を頂戴し、和やかなひとときはお開きとなりました。

今年の親睦会は村上幹事長、黒澤先生、山梨先生、柴山先生、青田さん、野村さん、山田が担当しました。1年間本当にお疲れ様でした。

来年は、新幹事長に早川先生、佐藤周平先生、坪井先生、溝口先生、鈴木将士さん、鈴木美生さん、浅野勝成さんが選出されました。来年度も、どうぞ宜しくお願い致します。

【報告：仙台大学親睦会平成29年度幹事 山田 大進】



来賓のあいさつをする朴澤理事長・学事顧問

軟式野球部の千葉亮太選手が日本代表に初選出されました

12月8日～10日にグアムで開催される全日本軟式野球国際親善大会の日本代表に軟式野球部の千葉亮太選手（体育学科4年－宮城・石巻商業高校出身）が初選出されました。

代表に入るためには書類審査や実技試験があり、手が届かなかった昨年に引き続き2回目の挑戦で日本代表に選出されたものです。

千葉選手は「大会では自分よりレベルが高い選手がたくさんいると思う。今の自分の力を試しつつも、一つでも多くのことを吸収したいと思う」と語り、念願であった初の国際大会に臨みます。



日本代表に選出された千葉選手

第69回全日本大学バスケットボール選手権大会 女子バスケットボール部が3年ぶりに出場

11月28日から12月3日まで、カメイアリーナ仙台で『第69回全日本大学バスケットボール選手権大会』が開催されました。長い歴史の中で、仙台開催は初めてです。東北からは3チーム出場でき、仙台大学女子バスケットボール部は、3年ぶり14回目の出場となりました。

初戦に昨年優勝の白鷗大学と対戦しました。開始早々、ガードの工藤（3年）が積極的に攻撃を仕掛け、仙台大の流れで試合が運び、第1ピリオドはリードして終わることができました。しかし、第2ピリオド以降、相手のディフェンスのプレッシャーが厳しくなったうえに、留学生センターの高さに苦戦し、大量得点を許してしまいました。その後は高さに対応しきれず、後半は終始リードされる結果となりました。結果は、66- 92と大差で敗れたものの、身長170cmのセンター金成（3年）が、188cmの相手からリバウンドをもぎ取ったり、1on1で得点するなど頑張っていた姿は、素晴らしかったです。

キャプテンの最上（4年）は「後輩たちには、毎年全国大会に参加し、勝てるチームになってほしい」とエールをおくってくれました。今大会で、4年生は引退です。ベンチ入りしていたメンバーの4年生全員がコートに立ち、最後まで一生懸命戦い、更にそれぞれが得点することができました。4年生が戦っている姿は、後輩たちの今後の力になると信じています。

選手も応援席も一つになって戦い、会場中に仙台大の声援が響き、観戦していた方からは、「感動した」とのお言葉をいただきました。来年は、東京で開催されます。目標を高く持って、挑戦し続けたいと思います。

この日は、平日だったにも関わらず、たくさんの方が会場に足を運んでくださりました。大きな声援は、選手の励みになったと思います。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

【報告：女子バスケットボール部 監督 助教 菅野恵子】



(上) 果敢に攻める仙台大学チーム
(下) 試合終了後の集合写真

全日本ウエイトリフティング学生新人選手権 2種目で優勝

全日本学生ウエイトリフティング新人選手権大会（10月20～21日）に本学ウエイトリフティング部から2名が出場しました。阿部芳吉学長も会場に駆けつけてくださり、選手たちの応援をしていただきました。男子105kg級保科魁斗（体育学科2年）は、スナッチ120kg（6位）クリーン&ジャーク160kg（優勝）トータル280kgで優勝、女子75kg福塚真羽（体育学科1年）は、スナッチ73kg（優勝）、クリーン&ジャーク91kg（優勝）、トータル164kgで完全優勝しました。

【報告：ウエイトリフティング部 監督 壹岐 優】



男子105kg級で優勝した保科選手

女子75kg級で優勝した福塚選手

ウエイトリフティング全日本女子選抜選手権 女子75kg級で福塚選手 3位入賞

福井県小浜市で第9回全日本女子選抜選手権（11月22日～23日）が開催され、53kg級に渡部詩乃（体育学科3年）、75kg級に福塚真羽（体育学科1年）が出場しました。福塚は、スナッチで71kgに成功し4位でしたが、得意のクリーン&ジャーク種目の2本目で90kgに成功し3位を確定させ、続く3本目も94kgを確実に成功させてトータル165kgで3位入賞を果たした。渡部は、スナッチで1本成功に終わり55kgで15位、クリーン&ジャーク73kgで13位、トータル128kgで15位でした。阿部学長も応援に駆けつけ、気合の入る応援で選手たちを鼓舞していただきました。

【報告者 ウエイトリフティング部監督 壹岐優】



表彰台に立つ福塚選手（左から3人目）

CSULBのカールトン・フォルテンベリーさん テレビ東京「YOUは何しに日本へ？」で放送予定

開学50周年記念行事として、11月1日に仙台市太白区ゼビオアリーナを会場に実施したInternational Friendship Event (IFE)に参加するため来日したカリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）の大学院生・カールトン・フォルテンベリーさんが、テレビ東京系列局で毎週月曜日の夜6時55～からオンエアされているユニークな番組「YOUは何しに日本へ」から取材を受け、その様子が来年2018年1月1日（月）に放送予定となりました。

この番組は、日本を訪れた外国人の方々にその場でインタビューし許可を得た場合、密着取材をするドキュメントバラエティで、来日者の目的を知るとともに、彼らの目を通して日本の素朴な良さを再発見するユニークな取り組みにファンも多く、広く知られています。

仙台の伝統的な「すずめ踊り」を練習するため、他大学より1日早く10月29日に仙台空港へ降り立ったカールトンさんに、同番組クルーがインタビューし、CSULBと提携する本学の開学50周年記念に招かれ、仲間たちと「すずめ踊り」を披露することの番組での紹介をご本人が快諾したものです。

テレビ東京の制作会社より、このお話を打診された時点でCSULBを引率した1人である、国際協力協定開発担当・マネージング・ディレクターの古谷仁氏経由でカールトンさんの意思を再度確認いただいたところ「カールトンは放映に全く問題ないと申ししており、CSULBがこのような形で仙台大学のお招きに対し、僅かながら恩返しができる大変ありがたいです」とおっしゃっていました。テレビ東京はあいにく東北地方で放映されておらず、後日、放送された映像を入手する予定ですが、同番組は不定期に土～日・東北放送（TBS系列）で再放送されるケースもあり、IFEの貴重な後日談として放映が楽しみです。



カールトン・フォルテンベリーさん



番組名 YOUは何しに日本へ?
放送局 全国テレビ東京系列局
放送日 毎週月曜日よる6時55分～ ※2018年1月1日（月）放送予定
司会 パナマン
番組内容 日本を訪れた外国人の方々にノーポイントでインタビュー及び密着取材をするドキュメントバラエティ。外国人の方々の訪日目的を知るとともに、彼らの目を通して日本の素晴らしいところを再発見する番組です。



50周年記念シンボルマーク

Monthly Report

SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.140 / 2017 .DEC

(月1回発行)

本学開学50周年記念 男子サッカー部「現役選手対OBプロ選手」戦を開催



試合開始前の記念撮影 多くのプロ選手が参加してくださいました

本学の開学50周年記念事業である「男子サッカー部 vs 男子サッカー部OB現役プロ選手」戦が12月26日（火）に開催されました。

試合にはベガルタ仙台の奥埜博亮選手をはじめ、国内外のプロサッカーチームで活躍する14名のOBが参加。また、今試合の審判は、2014年ブラジルW杯の開幕戦の審判である西村雄一氏が務めました。試合当日はあいにくの天候にもかかわらず地元の小中学生や保護者、選手のサポーター、仙台大学一般大学生など約180名の方々が観戦に訪れ熱戦を見守りました。

一進一退の攻防の末、見事OB現役プロチームが貫禄をみせ、6対5で勝利しました。

この記念試合開催に関しては、この8年間だけでJ1ベガルタ仙台の所属する奥埜選手を含め、合計31名の現役プロ選手（引退した選手を除く）を輩出した男子サッカー部監督である吉井秀邦准教授が発案し、日頃から学生やチームがお世話になっている地元企業等に協賛をお願いして実現しました。

今回の大会の開催にあたり、(株)伊藤チェーン、岩手県北自動車(株)、(株)菓匠三全、加茂商事(株)、(株)木村スタジオ、(株)銀座薬局、京王観光(株)、(有)郷家精肉店、(株)佐々直、(株)住ゴム産業、ナルミキッチン、(株)ベガルタ仙台、マール・マール、の13社からご協賛をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

また、今回の記念試合では、日本の大学改革に向けた動きの一つである日本版NCAAに向けた取り組みも兼ねて、無料でWEB配信をし、約800回の接続が行われ、遠く離れた場所にいる多くの方も、この記念試合を視聴しました。

(次頁に続く)

〈目次〉

本学開学50周年記念 男子サッカー部「現役選手対OBプロ選手」戦を開催	1
・男子サッカー部の2名がプロチームへ入団～ 合同記者会見を開催～ ・ポッチャ日本代表監督の村上光輝さんが 阿部学長を表敬訪問	2
・第23回デフリンピック競技大会入賞者2名が 文部科学大臣表彰を受賞 ・FIFAワールドカップ国際審判員 西村雄一氏とNHKアナウンサーの 勉強会が本学で実施されました	3
・アイリスオーヤマ(株)社製「コアトレーナー」 効果検証を実施 ・来年度から女子日本代表チャレンジ プロジェクトが始まろうとしています ・避難訓練が行われました	4
・仙台大学Presents 仙台89ERSホームゲーム を開催 ・学生食堂「なちゅら」にイルミネーション誕生	5

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

今回行われた試合のWEB配信について吉井監督は、『今後このWEB配信は、保護者や応援して頂ける方へのサービス向上や外部に積極的に発信していくことによるサッカー部や大学の価値向上が見込まれるので、日本版NCAAに向けた取り組みも兼ねて実験的に進めていきたい。』と継続して発展的に活用することへ期待を寄せました。

男子サッカー部では、これからもこのような地元と密着したイベントや地域貢献事業を行っていく所存ですので、引き続き応援して頂ければ幸いです。



08チームのキャプテンを務めた奥笠選手



審判は西村雄一氏が務めた



大会の様子はLC棟や第三体育館ビジョンにも中継された

男子サッカー部の2名がプロチームへ入団～発表記者会見を開催～

このほど、男子サッカー部の山田満夫選手と川上盛司選手が来年4月からJリーグで活動することが決定し、12月24日（火）に入団発表記者会見がサッカー場クラブハウスで行われました。

J2松本山雅FCへの入団が決定した山田選手は「この4年間、仙台大学でプレーできたことや、スタッフや仲間にも恵まれたことは自身の誇りです。支えてくださった方には試合に出場することで恩返しをしていきたいと思えます。チームに貢献し、J1昇格に向けて頑張りたいです」と抱負を述べました。

また、同じくJ2栃木FCへの入団が決定した川上選手は「プロに入団することができ幸せな気持ちです。大学4年間で様々なポジションを経験することができ成長できました。プロではこれまでに身に着けた力を発揮したいと思えます」と力強く決意を述べました。

会見には阿部芳吉学長も参加し、「2名の選手がプロの世界に進むことは後輩たちの力になる。これまで以上のプレーヤーに成長できるように頑張ってもらいたい」とエールを送りました。



今後の活躍を誓った山田選手（左）と川上選手

ボッチャ日本代表監督の村上光輝さんが阿部学長を表敬訪問

12月10日からアラブ首長国連邦のドバイで開催されるアジアユースパラ競技大会のボッチャ競技で日本代表チームの監督を務める本学大学院1年の村上光輝さんが12月7日、阿部芳吉学長を表敬訪問しました。

村上さんは「今大会を2020年東京パラリンピックにつながる大会にしたいと考えています。出場する4種目すべてでメダルを獲得できるように頑張ります」と大会に臨む決意を語りました。

阿部学長は「大会遠征中には様々な苦勞もあるでしょうが目標の達成に向けて頑張ってください」とエールを送りました。

村上さんは2016年にブラジルで開催されたリオデジャネイロパラリンピックでも監督を務めており、日本初の銀メダル獲得に貢献しました。



阿部学長に大会に向けての抱負を語る村上さん

第23回デフリンピック競技大会入賞者2名が文部科学大臣表彰を受章

平成29年12月5日、第23回夏季デフリンピック競技大会における入賞者の文部科学大臣表彰式が行われ、本学の佐々木琢磨新助手（陸上競技）と星泰雅（体育学科1年）（水泳競技）がそれぞれ受章しました。またこの表彰式に先立ち、皇居において天皇・皇后両陛下の拝謁の栄を賜りました。

表彰式は東京都港区白金台の「八芳園」において、林芳正文部科学大臣、鈴木大地スポーツ庁長官、スポーツ庁今里譲次長の出席のもと執り行われ、国歌斉唱（手話通訳付き）のあと、入賞選手の名前が一人一人呼ばれ1位入賞した選手の代表1名、2位から8位までに入賞した選手の代表1名、選手の指導で特に貢献された指導者代表1名の計3名に出席者を代表し表彰状が授与されました。林文部科学大臣は「過去最多のメダル獲得となった今大会、国民に夢や感動を与えてくれたことを大変誇りに思います。今後益々のご活躍とデフスポーツの発展を祈念します。」と挨拶されました。

今回表彰をうけた佐々木琢磨新助手は「名誉ある文部科学大臣表彰を受章し今後益々気を引き締めて競技に臨みたい。」と話し、体育学科1年の星泰雅さんは「天皇皇后両陛下の拝謁など貴重な経験もでき、一生の思い出になりました。今後も精進したいです」と感想を述べ、表彰式へ列席くださった阿部芳吉学長からも祝福と励ましを受けました。



表彰状を手にする佐々木選手（左）と星選手（右）

第23回夏季デフリンピック競技大会（トルコ・サムスン）での成績

陸上競技 佐々木琢磨 男子100M 第7位、4×100Mリレー 第1位

水泳競技 星 泰雅 男子800Mリレー 第2位、400Mメドレーリレー 第2位、400Mリレー 第3位

FIFAワールドカップ国際審判員西村雄一氏とNHKアナウンサーの勉強会が本学で実施されました

12月6日（水）、本学LC棟において2014年FIFAワールドカップの開幕戦で主審を務めるなど、2014年までサッカー国際審判員として活躍し、現在もJリーグでのプロフェッショナルレフェリーとして著名な西村雄一氏及びNHK仙台放送局をはじめ、東北地方各局のアナウンサー総勢8名がサッカーのルールに関する勉強会を開催しました。勉強会の後には、本学サッカー場で学生達による紅白試合を西村氏が審判する様子を熱心に見学しました。

このユニークな取り組みは、本学サッカー部の監督である吉井秀邦准教授が西村氏と長年懇意にしていることから実現したもので、集まったNHKアナウンサーのなかにはサッカーの審判資格者もいるなど、勉強会では大変活発な質疑応答がなされました。

NHKアナウンサーの方々がサッカーをはじめ、さまざまなスポーツの実況中継をするにあたっては、日頃の勉強が欠かせずこういった形での勉強会を定期的には自己研鑽に努めているそうです。勉強会終了後、いま学んだ知識を早速、確認するため一行はサッカー場に移動、本学サッカー部の学生たちが紅白試合をし、西村氏が審判する様子を片時も見逃すまいと熱い視線がおくられました。

見学したNHKアナウンサー一同、本学サッカー部員、隣で練習していた女子サッカー部員たちは、西村氏がジャッジしたあとで“何故、今、このように判断したのか？”を解説してくださることが、自分たちの知識はもちろん競技力向上に大変役立つと感想を述べ、男女サッカー部員たちはいつの日か、憧れの西村さんに自分たちも審判をしていただけるようなお一層の努力を誓っていました。」

アイリスオーヤマ(株)社製「コアトレーナー」効果検証を実施

仙台大学で

は、アイリスオーヤマ株式会社より依頼を受け、同社製品である「体幹ストレッチ コアトレーナー」の効果を検証しています。この製品は、バーの中心がくぼんでいて、そこへ首を合わせることで体幹軸を維持したままエクササイズを実施することができ、様々な健康効果が期待されます。

本実証研究の対象は60～70代の男女30名で、身体組成や肩周辺の筋肉の硬さ、下肢筋力、バランスや歩行能力などを測定しています。10月末に1回目の測定をし、今回が2回目です。測定には本学の学生25名が参加し、講義で学んだことを実践する実学の間にもなっています。今後1月に最終測定をし、約2ヶ月の効果を検証する予定です。【報告：准教授 山口 貴久】



コアトレーナー（左）と本学で行われたコアトレーナー測定の様子

来年度から女子日本代表チャレンジプロジェクトが始まろうとしています

クリケットというスポーツは国内ではポピュラーではありませんが、残された最後のグローバルスポーツとも言われ、世界の競技規模はサッカーが32億人に対し、クリケットは15.6億人と世界2位に位置するスポーツです。プロのトップ選手であるコリー選手（インド）の年収は、約30億円だそうです。

そのクリケットは、国内での競技人口が増加しつつあります。この度、日本クリケット協会・事務局長の宮地氏と代表選手が本学を訪ね、朴澤理事長・学事顧問、阿部学長、マーティ・キーナート上級研究アドバイザー、仲野体育学科長、吉田事務局長とで話し合いが持たれ、女子日本代表チャレンジプロジェクトに本学の女子学生でチームを作りチャレンジする構想で合意が得られました。その前提として、同協会が募集する15名程度が選考されるチャレンジャーの選考会（3月）に、本学から選出される女子学生を派遣する計画になっています。

同協会からは、2～4年分の活動費は既に確保してあるので、チームに所属する女子学生、更には本学の経済的負担は最小限になるという確約も得ています。さらに、定期的に指導者を派遣し、練習等での指導もして下さるそうで、仙台にも社会人チームがあり、練習相手や定期的な試合も可能だそうです。

バックグラウンドとして、野球型種目・テニス・陸上競技（槍投げ等）・バレーボールやバスケットボールなどの経験者がクリケットに向いているようです。

素質があれば、半年～1年で日本代表になるのも夢ではないスポーツであり、新たなスポーツにチャレンジしようという女子学生がチームを作り（1チーム11名）、仙台大学から世界に羽ばたく選手が近い将来出現することが期待されます。新入生でも在学学生でも加入でき、チームを結成することから活動が始まりますので、今後の動きに注目が集まりそうです。【報告：副学長 教授 仲野 隆士】



本学を訪れた日本クリケット協会の宮地理事長（左から3人目）

避難訓練が行われました

12月28日（木）に避難訓練が行われました。今回行われた避難訓練は、午前10時に学生食堂「なちゅら」からの出火したことを想定し、消防署への通報、初期消火、避難誘導などの流れを、あらかじめ定められた役割ごとに連携した動きの元で確認しました。また、避難訓練終了後には消火器を使った初期消火訓練も行われるなど、教職員が防火への意識を新たにしました。

本学では3月に地震、12月には火災を想定した避難訓練を実施し、「いざ」という時に備えています。



消火器を使った初期消火訓練

仙台大学Presents 仙台89ERSホームゲームを開催

12月24日（日）、「仙台大学Presents 仙台89ERS ホームゲーム」仙台89ERS vs 熊本ヴォルターズの試合がゼビオアリーナ仙台を会場に開催されました。約2000名の観客とともに、本学の学生や教職員、明成高校の生徒なども、仙台89ERSで活躍する石川海斗選手（明成高校OB）などが出場する白熱した試合を観戦しました。当日は本学の冠ゲームということもあり、試合は、現在仙台89ERSに出向中の管理栄養士資格を有する菊地遥新助手によるTip Offセレモニーによってスタートしました。オフィシャルタイムアウトの中では、仙台89ERSチアの鈴木保之香さん（平成23年体育学科卒）と体育学科2年の羽川佳苗さんが、健康福祉学科の紹介を中心に、本学についてPRしてくれました。また、ハーフタイムには新体操競技部による美しい演技で観客を魅了しました。さらに、会場内に設置されたブースでは、仙台89ERSでインターンシップを行っている学生による「シュートゲーム」というイベントなども行われました。試合の最後には、新体操競技部の阿部楓花さん（体育学科3年）が、MVP賞受賞した仙台89ERSの選手へ本学からの記念品である「50周年記念グッズの詰め合わせ」の贈呈も行われました。

今後も仙台89ERSとの連携をさらに深め、スポーツ栄養やスポーツ情報分析、スポーツコーチングなど多岐にわたる分野で、プロの現場での実践的な学習や人材育成、チームや選手の補助の機会を提供して参ります。なお、1月28日（日）もカメイアリーナ（仙台市体育館）で行われるホームゲームが、本学の冠ゲームとして開催されます。



試合終了後の記念写真



学生食堂「なちゅら」にイルミネーションが誕生

12月から1月末日までの予定で、学生食堂「なちゅら」にイルミネーションがお目見えしています。仙台大学開学50周年のPRと、本学をイルミネーションにより明るくしようと、学友会の学生や硬式野球部の学生、教職員が力を合わせて設置したもので、本学教職員はもちろん、町の方々の目も楽しませています。

イルミネーションの実施は今回が初めてで、来年度以降も引き続き行われる予定になっています。



(上) イルミネーション点灯の様子
(左) イルミネーション取り付け作業



50周年記念シンボルマーク

Monthly Report

SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.141 / 2018.JAN

(月1回発行)

本学開学50周年記念式典・祝賀会を開催 ～約250名の関係者で祝う～



挨拶を述べる朴澤理事長・学事顧問

本学開学50周年式典が1月24日（水）に仙台市内のホテルを会場に挙行され、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進専門官・多田典史様はじめ、一般社団法人全国体育スポーツ系大学協議会会長・学校法人日本体育大学理事長・松浪健四郎様、日本私立大学協会事務局長・小出秀文様など、約250名の方々にお越しいただきました。

式典で朴澤泰治理事長・学事顧問は「昭和42年に体育学科の単科大学として開学した本学が50年の歳月を経て、体育学部6学科と大学院スポーツ科学研究科を擁し、学部卒業生約14000人、大学院修了生約300人を社会に輩出してこれたことは、関係各位のご支援とご協力の賜物であり、心より感謝を申し上げます」と挨拶しました。

また、式典の中では本学に対して多大な貢献をいただいた方々への表彰なども行われました。

式典に引き続いて行われた祝賀会では、11月1日に開催された国際交流イベント（IFE in SENDAI）の様子が紹介され、本学と国際交流がある11か国18大学1研究機関の迫力ある演技を参列いただいた皆様にご覧いただきました。

なお、当日の司会は仙台89ERSチアの鈴木保之香さん（平成23年体育学科卒）と羽川香苗さん（体育学科2年）の2名が務め、式典及び祝賀会に華を添えてくれました。

記念式典・祝賀会の後には、参加した同窓生と旧・現教職員との懇親会も行われ、開学草創期の思い出などの様々なエピソードが紹介されたほか、次代に向けて進み本学に対する熱い期待が込められたお話などもあり、会は終始賑やかで、開学50周年を祝うにふさわしい雰囲気で行われました。

(次頁に続く)

〈目次〉

本学開学50周年記念式典・祝賀会を開催 ～約250名の関係者で祝う～	1
・記念式典において功労者として表彰されたお二方 ・本学の教育運営に多大な貢献をされた方々に感謝状を授与	2
・平昌五輪スケルトン競技日本代表宮嶋克幸選手の壮行会を開催 ・平昌五輪スケルトン競技日本代表選手のコメント	3
・第14回DANDANDANCE&SPORTSを開催	4
・平成29年度学生相談室・教育改善企画運営委員会共催 教職員研修会「障害学生への合理的配慮—山形大学における取り組みの実際—」を開催	5
・今年度2回目の仙台大学Presents 仙台89ERSホームゲームを開催 ・吉田洋志新助手がハンドボールアジア選手権に情報分析スタッフとして帯同	6
・南條充寿教授が柔道ハンガリー代表チームチーフディレクターに就任 ・「春季海外留学・研修結団式、危機管理研修会」・「夏季海外留学・研修報告会」を開催	7
・スポーツマネジメント・コース卒業論文全体発表会を開催 ・「地域とスポーツ～そして、2020に向けて」と題し阿部学長が講演	8

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

記念式典において功労者として表彰されたお二方



松井 匡治 様

昭和41年朴沢学園内に設置された大学「創設(準備)委員会」メンバーとして、教員人事や施設、設備整備、文部省等関係機関との打ち合わせなどに東奔西走。また、大学設立後は、大学教員として教鞭をとるとともに仙台大学の創成期の礎を築くために尽力された。



松下 邦雄 様

昭和42年、仙台大学の第1回生として入学。入学と同時に発足した学友会委員長として、部活動の振興発展に尽力。卒業後は、仙台大学第1回卒業生として、同窓会のけん引役となり大学の発展のために尽力された。また、朴沢学園評議員として現在も活躍されている。

本学の教育運営に多大な貢献をされた方々に感謝状を授与

医療法人社団慶成会 青梅慶友病院 様
 株式会社 こども体育研究所 様
 株式会社 七十七銀行 様
 鹿島建設 株式会社 様
 鹿島道路 株式会社 様
 一般社団法人 仙台大学同窓会 様
 仙台大学保護者会 様



平昌五輪スケルトン競技日本代表宮嶋克幸選手の壮行会を開催

2月9日から韓国で開催される平昌五輪男子スケルトンに出場する宮嶋克幸選手（体育学科4年）の壮行会が非公開で2月1日（木）、本学LC棟で行われました。

壮行会で宮嶋選手は「私が今この場に立っていただけるのは応援して下さいましたすべての方のおかげです。オリンピックでは自分の持てる力をすべて出し切り、入賞、メダル獲得に向けて頑張りたいと思います」と初のオリンピックに臨む意気込みを力強く語りました。

また、阿部芳吉学長からは「彼の目標はメダル獲得。私たちの力でその目標が達成できるよう応援したいと思います。試合まで準備をしっかりと整え、ベストコンディションでいい滑走ができるよう頑張ってください」と激励の言葉が送られ、会の最後には会場に集まった学生や教職員からエールが送られました。壮行会には宮嶋選手の中学校時代の恩師であり、宮嶋選手がスケルトンを始めるきっかけを与えてくれたという吉川祐一先生も北海道から駆けつけてくださり、いつもとは一味違った壮行会となりました。壮行会の後には宮城県庁を訪れ、山田副知事より激励のお言葉を頂戴しました。

なお、競技が行われる2月15日は、柴田町が主催する「平昌2018五輪スケルトン選手を応援する会」が本学LC棟にて開催されることになっており、ライブ配信される映像を小室希さん（本学研究員）と黒岩俊喜選手（大学院生）が解説を行い、宮嶋選手や本学卒業生の高橋選手を応援することになっています。



(上) 壮行会であいさつを述べる宮嶋選手
(中) 北海道から駆けつけてくれた吉川先生
(下左) 壮行会後に参加者で記念撮影
(下右) 山田副知事から激励金を受け取る宮嶋選手

平昌五輪スケルトン競技 日本代表3選手のコメント

このほど開催される平昌オリンピックのスケルトン競技には本学体育学科4年の宮嶋克幸選手、本学卒業生の高橋弘篤選手（平成19年3月卒）と小口貴子選手（旧姓：大向、平成19年3月卒）の3選手が選出されました。

3選手から平昌オリンピック出場に向けたコメントをいただいています。

それぞれの活躍を願い、仙台大学の力を結集してエールを送りましょう。

	<p>男子スケルトン</p> <p>宮嶋 克幸（みやじま・かつゆき）</p> <p>仙台大学体育学部体育学科 4年</p> <p>「出場が決まりともうれしい気持ちでいっぱいです。出場できるのは色々な方のサポートのおかげなので、感謝の気持ちを忘れずに自分の力をすべて出し切りたいと思います！」</p>
	<p>男子スケルトン</p> <p>高橋 弘篤（たかはし・ひろあつ）</p> <p>仙台大学体育学部体育学科 平成19年3月卒</p> <p>「これまでソチオリンピックの12位を越えて、メダルに絡む活躍をするために4年間競技を続けてきました。もう一度オリンピックの舞台に立てることに感謝をし、最後まで全力でメダルを狙って闘ってきます。」</p>
	<p>女子スケルトン</p> <p>小口 貴子（おぐち・たかこ）</p> <p>仙台大学体育学部運動栄養学科 平成19年3月卒</p> <p>「急に出場が決まり驚きと喜びでいっぱいです。出場するからには応援してくれる方々の為にも全力で戦ってきます。」</p>

第14回DANDANDANCE&SPORTSを開催

皆様の支えがあり、平成30年1月27日（土）に大河原えぞこホールにて、第14回DANDANDANCE&SPORTSを開催することができました。

今回は、自然災害やテロによって私たちの日常が一瞬のうちに破壊され奪われていく現実に対し、私たちがどのように自らの生や安らぎを担保し続けられるかという問いを掲げ、「HOPE～私たちが強くあるために～」をテーマに参加団体に作品創作を依頼致し、全18団体が公演を盛り上げてくれました。

本公演にあたって、ドイツから、ミハエル・シャンドールさんをゲストとしてお迎えし、橋本園子さん、仙台市のバレエ教室パリエ・クラス・ドゥバレエの協力を得て、作品創作を行う機会となりました。ミハエルさんの指導のもと、本学の有志9名とパリエの生徒10名との合同ワークショップを通して、“再生”や“継続”をコンセプトとする作品「プロジェクト1」が作られました。参加者たちは、プロのバレエダンサーと共に作品をつくり上げることで、新たな学びを得たのではないのでしょうか。



実行委員会のメンバー

1部と2部の間では、本公演初の試みとなるダンスバトルを開催しました。ダンスバトルは、ギャングが武力抗争で物事を解決するのではなく、平和的に解決する手段の一つとして始まった文化です。今回は、バトル実施が初めてということもあり、混乱する場面があったものの、出演者の皆様のおかげで第1回「DANDANDANCEバトル」を成功させることができました。バトルの場では大学生が先頭に立ち、バトル経験のない参加者をサポートしながら、舞台上上がった全参加者が舞台中央で得意とする技を披露し、客席をわかせていました。この時、私は、バトル参加者と観客の心が一つになっていると感じました。

さらに、私は、今年度DANDANDANCE実行委員がフィナーレを飾るダンスの振り付けも行いました。全員がダンス未経験者であるからこそ、このフィナーレの作品を通して何か感じてほしいという願いがありました。人前に立つことの楽しさ、スポットライトや歓声を浴びる気持ちよさ、なにかを成し遂げるまでの過程、自分たちだけでなく観客席にも感動を与える喜び、苦手が大好きに変わる瞬間…。そんな小さな“何か”が変われば人は成長したと言えるのだと思います。

実行委員の仲間たちは、事前の準備や当日の運営、フィナーレのダンスを通じて、一人一人が、感じてほしいという願いを遥かに超え、沢山のことを吸収し、学び、感じ取ってくれました。

加えて、彼らは「無駄な努力はない」ことを証明し、大きな夢と希望を与えてくれました。実行委員のみんなに感謝の気持ちでいっぱいです。心から「ありがとう」と伝えたい、そんな公演となりました。

踊り手だけでなく観客をも巻き込み、「会場一丸となった雰囲気をつくり上げたい！」という願いは、あの瞬間、あの舞台で、強く感じることができました。

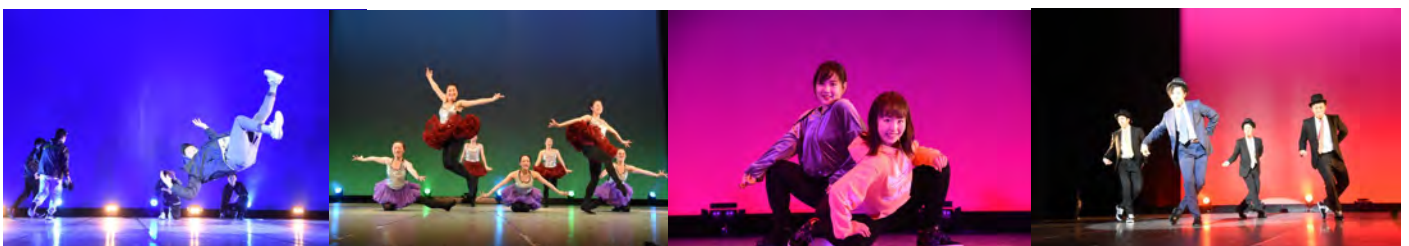
来年は第15回目となる節目の年です。DANDANDANCE&SPORTS 15thも沢山の方々のお力を借り、今年以上の盛り上がりになるよう願っています。

最後になりましたが、私の考えや、叶えたいこと、やりたいこと、譲れないこと、そんなすべてを許してくださった山梨雅枝先生、河野未来先生、陰で支えてくださった諸先生方、仙台大学の職員の皆様、舞台監督工房の皆様、実行委員のみんな、本当にありがとうございました。

私は、今回の公演で「ダンスは、人を変えることができる、強くすることができる」と実感致しました。

さあ！みなさんも一緒に踊ってみませんか？

（報告：DANDANDANCE&SPORTS14th実行委員長 健康福祉学科 4年 菊地 遙）



平成29年度学生相談室・教育改善企画運営委員会共催 教職員研修会 「障害学生への合理的配慮—山形大学における取り組みの実際—」を開催

1月26日（金）にA棟大会議室にて、平成29年度学生相談室・教育改善企画運営委員会合同開催の教職員研修会を開催いたしました。講師として山形大学障がい学生支援センターの有海順子先生をお招きし、教職員と教職を目指す学生約80名が参加しました。

有海先生は聴覚障害学生への支援を中心に、障害学生支援に関する教育・研究を行っており、障害学生支援や障害学生支援技術養成講座の実施などにも取り組んでいらっしゃいます。

障害学生支援については平成28年4月に障害者差別解消法が施行され、国公立大学では障害者への「合理的配慮の提供」が法定義務となり、対応がなされています。私立大学でも同等の対応が求められており、本学においても教育機関としてそのような求めに適切に対応していくため、法令や合理的配慮、実際の支援について正しく理解しておく必要があると考え、今回の研修会を企画いたしました。今回は有海先生より、「合理的配慮」の解説から実際の支援など、山形大学での実践例を交えてご講演いただきました。

有海先生によれば「大学が提供すべき合理的配慮」とは、修学上の困難に繋がるような社会的障壁の除去であり、障害学生が障害の無い学生と同じように教育を受けられるよう、障壁となっている事柄や従来の方法などを個々の障害特性や困りごとに合わせて変更・調整することで、それは障害学生を「特別扱いする」ということではなく、障害学生が他の学生と同じ学びのスタートラインに立つためのものだったということです。何が合理的に配慮に当たるかは個々のケースによって異なるので、実際の支援では障害学生との個別の建設的な対話が重要になってくることのお話でした。

山形大学では平成27年4月に障がい学生支援センターが設立され、障害学生への支援や教職員へのバックアップを行っているそうです。本学ではすでに聴覚障害のサポートを学生支援センターで行っていますが、本研修会では具体的な聴覚障害と発達障害の学生の例を挙げて支援についてご紹介いただきました。

聴覚障害学生は受け取ることが出来る情報が限定的になってしまい、情報のやり取りやプロセスにアクセスすることが困難で、聞こえる学生とのコミュニケーションが難しくなってしまうことも少なくないそうです。それでも情報がきちんと伝われば、聴覚障害があってもできることは増えるので、目に見えない音声情報を目に見える視覚情報に変えて伝えるなど、情報保障支援が必要とのことでした。

また発達障害の学生については、外見から判断されにくいいため誤解されることが多く、支援よりも批判、叱責を受けることが多いと言います。大学生活の中では、自分で履修計画を立てなくてはならないことや、教室や座席が固定でないこと、多様な授業形態、ホームルームが無いことは発達障害の学生にとって社会的障壁になります。発達障害の特性は変えられないので、二次障害を防ぐためにも周囲の理解や特性に応じた対応、本人の工夫が必要になってくることでした。

大学での合理的配慮を考える際のポイントは、学生が習得すべきものである「教育の本質」を変えることなく、社会的障壁になりうるような「習得するための手段」や「評価の方法」を、可能な範囲で変更していくことだといえます。また、障害学生のための環境整備や教育的対応・指導の充実は、すべての学生にとって学びやすい大学となることに繋がっていることのお話もありました。障害学生について考え対応していくことは、全ての学生にとって有益なのだと感じた研修会でした。

（報告：学生相談室）



研修会の様子

今年度2回目の仙台大学Presents 仙台89ERSホームゲームを開催

1月28日（日）、今年度第2回目となる「仙台大学 Presents 仙台89ERSホームゲーム」仙台89ERS vs 秋田ノーザンハピネッツの試合がカメイアリーナ（仙台市体育館）を会場に開催されました。

当日は本学の冠ゲームということもあり、試合は、昨年12月の全国高校バスケットボール選手権大会（ウインターカップ）で2年ぶり5度目の優勝を果たした明成高校男子バスケットボール部の相原アレクサンダー学選手と八村阿蓮選手によるTip Offセレモニーによってスタートしました。オフィシャルタイムアウトの中では、仙台89ERSチアの鈴木保之香さん（平成23年体育学科卒）と体育学科2年の羽川佳苗さんが、健康福祉学科の紹介を中心に、本学についてPRしてくれました。また、ハーフタイムには12月の冠ゲームに引き続き、新体操競技部による美しい演技で観客を魅了しました。さらに、会場内に設置されたブースでは、健康福祉学科の学生15名による本学PRブースも設置され、ハンドマッサージで来客を癒していました。

試合は仙台89ERSが惜しくも敗れはしたものの、勝利に向かって攻め続ける姿勢に会場は終始盛り上がりを見せていました。なお、明成高校出身の石川海斗選手には試合後、本学が様々な健康効果に関する実証研究を行っているアイリスオーヤマ社製の「体幹ストレッチコアトレーナー」がプレゼントされました。今後も仙台89ERSとの連携をさらに深め、スポーツ栄養やスポーツ情報分析、スポーツコーチングなど多岐にわたる分野で、プロの現場での実践的な学習や人材育成、チームや選手の補助の機会を提供して参ります。



試合終了後の記念写真



吉田洋志新助手がハンドボールアジア選手権に情報分析スタッフとして帯同

1月18日から28日の期間、韓国の水原市で開催された第18回ハンドボールアジア選手権に、日本代表分析スタッフとして帯同しました。結果は6位（14カ国中）に終わり、1～4位までに与えられる世界選手権の切符を獲得することが出来ませんでした。

私自身、今大会において学んだことは、選手に対しての情報の伝え方です。選手がどのような情報を求めているのかを、会話などの中から聞き取り、それに基づいて効率よく作業を行い、瞬時にフィードバックをしていく必要があるということ再認識しました。このことは、競技レベルを問わず必要なことだと思うので、まずは本学女子ハンドボール部において同様の取り組みを行うほか、アナリストを目指している学生に、この経験を伝えていきたいと思えます。

今回のアジア選手権は、オリンピックの前の年に行われる世界選手権の出場権を逃す結果となり、2020東京オリンピックに向けた代表強化に大きな痛手となりました。日本代表は、この結果を真摯に受け止め、成果と課題を洗い出し、オリンピック開催国として出場権を与えられているメリットを活かしながら、引き続き強化活動を行っていくこととなります。私自身もさらなる研鑽を積み、東京オリンピックに向けた代表強化に携わるスタッフとして活動を継続していきたいと思っています。（報告：新助手 吉田 洋志）



情報分析スタッフとして帯同した吉田新助手

南條充寿教授が柔道ハンガリー代表チームチーフディレクターに就任

2020年に開催される東京オリンピックに向け、本学の南條充寿教授とご夫人の和恵柔道部女子監督が、ハンガリー共和国の柔道ナショナルチームをサポートしていくことが決定したことに伴い、「第32回オリンピック競技会（2020/東京）に向けた仙台大学によるハンガリー柔道連盟へのサポート体制に関する協定書」の調印式と記者会見が1月24日（水）に仙台市内のホテルを会場に行われました。

調印式に際し、公益財団法人全日本柔道連盟会長の山下泰裕氏より「柔道の創始者である嘉納治五郎師範は人づくり・人間教育とともに柔道を通じた国際交流に注力されていた。南條教授は今後、日本とハンガリーの懸け橋となるような人材育成に尽力して欲しい」と心あたたまるお祝いメッセージ及び大変立派なお花を頂戴しました。

記者会見で南條教授は「東京オリンピックに向けて、日本人選手のような粘りのある選手を育てたい。ハンガリー柔道協会が掲げるメダル獲得という目標の達成のために協力していきたい」と語りました。

その後、ハンガリーオリンピック委員長であるクルチャール・クリスティアン氏とハンガリー柔道連盟会長であるトート・ラスロー氏は、本学の開学50周年記念式典・祝賀会に参加、出席者約250名と共に歓談しながら和やかなひと時を過ごされました。

トート氏は「南條教授ご夫妻のような素晴らしい指導者にハンガリー柔道チームをサポートいただくことに対し、ご了解くださった仙台大学の朴澤理事長・学事顧問をはじめ阿部学長、みなさんに心からお礼申し上げる。この調印式が仙台大学の節目となる開学50周年という記念すべき式典の日に重なり、このように私達が参加させていただけた事は大変名誉であり、日本語的に言う「ご縁」を深く感じる」と述べました。

南條教授は2020年12月末までの間、仙台大学における通常業務をこなしながらハンガリー柔道チームが来日した際などに受け入れ・指導することとなります。



記者会見後の記念撮影

「春季海外留学・研修結団式、危機管理研修会」 「夏季海外留学・研修報告会」を開催

1月30日（火）に「平成29年度春季海外留学・研修、危機管理研修会、平成29年度夏季海外留学・研修報告会」を開催しました。今回の春季海外留学・研修には、8つプログラム（韓国・龍仁大学校/中国・瀋陽師範大学/台湾・台東大学/アメリカ・カリフォルニア州立大学ロングビーチ校/アメリカ・ハワイ大学/デンマーク・ノアフュンス国民大学、リベルト大学/フィンランド・カヤーニ応用科学大学/ニュージーランド・カンタベリー大学、CCEL）に35名の学生を派遣します。各プログラム毎に参加する学生の代表から力強い決意表明がありました。また、夏季海外留学・研修（ベトナム・ハノイ大学/アメリカ・ハワイ大学/フィンランド・カヤーニ応用科学大学）に派遣された学生から、プログラム内容や研修成果について報告がありました。

（報告：国際交流センター）



研修報告会の様子

スポーツマネジメント・コース卒業論文全体発表会を開催

1月29日（月）、体育学部体育学科スポーツマネジメント・コースの平成29年度卒業論文全体発表会が開催されました。この会は、年に1度、コース所属学生全員（2～4年生）とコース関係教員が一堂に会し、各ゼミの4年生代表者による卒業論文発表を聞く内容となっています。今年は、各ゼミから選出された6名の学生が発表を行いました。なお、今年はコース関係者だけでなく、興味を持っていただいた方にも数名ご参加いただきました。

2年生にとっては、初めて卒業論文とはどのようなものか理解するきっかけとなります。また、3年生にとっては、すでに所属ゼミが決まっており、各自の研究計画を進めている段階にあるため、1年後に目指すべきレベルを再確認できる場となります。そして、4年生にとっては、本コースに所属した成果の確認、また、大学で4年間学んだ集大成を披露することに繋がります。

代表学生は、7分間の発表を行った後、3分間の質疑応答にも応じていました。質問は教員からのみでなく、学生からもあり、限られた時間の中でも活発な議論がなされました。発表内容は、キャンプ場面におけること、震災復興に関連した内容、スポーツとまちづくりやスポーツボランティアに関すること、Instagramに着目した内容、そしてプロレス観戦者を対象に研究したものと、多岐に渡っていました。年々卒業論文のレベルは向上しており、社会的意義が高いものや大学院レベルに匹敵するものも出てきています。

この会を通じて、卒業論文の質を高めていくだけでなく、所属学生の意識を高めたり、将来へのヒントを得たり、各自が多く刺激を受けられる場になればと思います。今回で4年生にとっては一区切りとなりますが、コースとしては今後もこの全体発表会の開催を継続し、より充実した教育を提供できるよう努めていきます。来年度も同時期に開催を予定していますので、コース所属に関わらず、皆様のご参加をお待ちしております。



(上) 研究内容を発表する学生
(下) 発表に耳を傾ける学生

(報告：体育学科スポーツマネジメント・コース)

「地域とスポーツ～そして、2020に向けて」と題し阿部学長が講演

1月20日（土）に、阿部芳吉学長が「地域とスポーツ～そして、2020に向けて」との演題にて講演を行いました。

この講演は、「スポーツコミッションせんだい」が主催し、仙台大学と「市民スポーツボランティアSV2004」が協力、「スポーツまちづくりトーク」として太白区中央市民センターで開催されました。阿部学長からは、自身の気仙沼市大島中学校から始まった教員経験で培った人づくりの苦勞と体験を中心としたお話がありました。

その感動的なお話の内容に加えてウィットとユーモアに富んだ巧みな話術で、会場に詰め掛けた80名余りの聴衆からは常に笑いと大きな拍手が起こり、大盛況のうちに1時間半の講演時間が終了いたしました。

(報告：准教授 池田 敦司)



講演会の様子



50周年記念シンボルマーク

Monthly Report

SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.142 / 2018.FEB

(月1回発行)

平昌オリンピック 男子スケルトン競技 宮嶋克幸選手が出場～本学卒業生も2名参加～



左写真：(右から) 平昌五輪に参加した宮嶋選手、小口選手、高橋選手 右写真：宮嶋選手

2月15日と16日の2日間、平昌オリンピック男子スケルトン競技が韓国・平昌のアルペンシアオリンピックスライディングセンターにて開催されました。本学から体育学科4年生の宮嶋克幸（北海道一札幌・丘珠高校出身、初出場）とOBの高橋弘篤選手（平成19年体育学科卒、宮城一富谷高校出身、2回目）が出場し、本学からは阿部芳吉学長と進藤新助手が現地へ応援に駆け付けました。

レース当日は、メディアで取り上げられているような極寒ではなく、外気温、氷温ともにレースに相応しい環境で、心地よい天候でした。宮嶋選手は持ち味である滑走技術をどこまで活かせるのかという点と、プッシュタイム（スプリント局面）をトップ選手とどのくらい短縮することが出来るかが勝負のポイントでした。

レースの直前・最中・終了後には、仙台大学LC棟で実施された柴田町主催による「2018平昌オリンピック 男子スケルトン選手を応援する会」とスカイプを用いて、LC棟とレース会場とを繋ぐという試みも行われました。阿部学長からは「宮嶋選手・高橋選手を一致団結して一緒に応援しましょう！」と力強くメッセージを頂き、場所を問わず会場にいる選手たちを応援する事が出来ました。

多くの方々のご声援を受け、両選手はスタートに立つことが出来ましたが、3回戦までの合計タイムにより高橋選手は2：35.58で22位、宮嶋選手は2：34.69で26位でした。上位20位以内までが進める4回戦には惜しくも進出することができませんでした。

(次頁に続く)

〈目次〉

平昌オリンピック 男子スケルトン競技に宮嶋克幸選手が出場～本学卒業生も2名参加～	1
柴田町主催により「2018平昌オリンピック男子スケルトン選手を応援する会」を開催しました	2
・「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」事前キャンプに係る施設等使用に係る協定書締結式 本学を会場に開催	3
・「大学スポーツ推進フォーラムin仙台」で池田准教授が本学の事例発表	4
・韓国伝統武道・警護・文化研修プログラムを実施しました ・龍仁大学校からの短期留学生が本学で学ぶ～最終日にはフェアウェルパーティーを開催～	4
ゴンザガ大学視察報告	5

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp



宮嶋選手はレース後に、「今までずっと目指して来た舞台に立ててとてもうれしい気持ちになりました。しかし、五輪での目標とはかけ離れた結果になってしまい、悔しさの残る五輪になりました。今大会の悔しさ、経験を糧に4年後の北京でメダルを取る為に繋げていきます。」と初五輪での感想と今後について話してくれました。

また、16日と17日には同会場で女子スケルトン競技も開催され、本学OGの小口（旧姓・大向）貴子選手（平成19年運動栄養学科卒、石川一輪島高校出身、初出場）が出場し、19位という結果でした。

平昌五輪では、3名の本学関係者が選手として参加することが出来ましたが、大きな目標達成とはならず、韓国チームの快進撃を目の当たりにし、自分達の可能性をどうやって強化していかなければいけないのかを改めて考えさせられた五輪となりました。次は4年後の北京五輪です。五輪で学んだことは五輪で果たせるよう4年後を見据え、着々と活動します。そして、次も仙台大学から選手を輩出できるよう再スタートしていきたいと思えます。

（報告：新助手 進藤 亮祐）

柴田町主催により 「2018平昌オリンピック男子スケルトン選手を応援する会」を開催しました

韓国で行われた2018平昌オリンピックスケルトン競技日本代表の宮嶋克幸選手（体育学科4年）と高橋弘篤選手（平成19年卒）を応援する会が2月15日（木）、本学LC棟を会場に開催されました。会場には滝口茂柴田町長をはじめとする柴田町関係者や町民、本学関係者、また、明成高校の中川先生とスケルトンのユースオリンピック代表にも選出された郷内翔さん（1年）など約100名が集まり、2名の選手に声援を送りました。

翌16日（金）にも応援する会が開催され、学生や教職員が2名の選手を応援しました。3本目の滑走を終えた時点での結果は、高橋選手が22位、宮嶋選手は26位の成績で惜しくも4本目の滑走に進出することはできなかったものの、これまでのトレーニング成果を十二分に発揮したすばらしい滑走で、会場で声援を送った皆さんにだけでなく、柴田町民や仙台大学関係者に大きな勇気と感動を与えました。

なお、会場ではスケルトンソチオリンピック代表の小室希さんと本学大学院生でソチオリンピックボブスレー日本代表の黒岩俊喜さんが競技の詳しい解説を行いました。選手ならではの大変わかりやすい説明に、集まった新聞社やテレビ局の記者の方々から多くの質問が寄せられると、二人はにこやかに答え、スケルトン競技の新たな魅力を発信することができた機会となりました。



熱気に包まれた「応援する会」の様子

「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」 事前キャンプに係る施設等使用に係る協定書締結式 本学を会場に開催

2月26日（月）、パラオ共和国のホストタウン登録をした蔵王町が、東京オリンピック・パラリンピック事前キャンプの施設使用の協力を近隣市町村と本学に要請、仙台大学、角田市、白石市、柴田町を加えた計5団体による事前キャンプに係る施設等使用に係る協定書締結式が執り行われました。

現在、パラオ共和国から要望が出ている種目は、柔道、陸上、水泳、アーチェリー、レスリングの5種目で、柔道は仙台大学、陸上は角田市、水泳は白石市、アーチェリーとレスリングは蔵王町が夫々施設提供を行います（宿泊先は蔵王町遠刈田温泉を予定）。本学が会場となる柔道は女子63kg級の選手1人、コーチ1人の事前合宿が予定されており、今年は6月末から7月上旬において行われる予定です。

パラオ共和国は昨年4月に政府関係者5名が来学された際、本学関連施設を見学、柔道においては南條充寿教授の説明を受け、その後、仙台大学での柔道の事前合宿練習（指導含む）を強く要望してきた経緯があります。尚、本学会場となる東京2020オリンピック・パラリンピック事前合宿は、ベラルーシ共和国新体操、ハンガリー柔道（ホストタウン事業としての採否は未定）に続き3カ国目となります。

（報告：スポーツ健康科学研究実践機構事務室 近江 康宏）



「大学スポーツ推進フォーラムin仙台」で池田准教授が本学の事例発表

2月23日（金）に学校経理研究会主催の「大学スポーツ推進フォーラムin仙台」が全国の大学関係者100名弱の参加により開催され、仙台大学も事例発表を行いました。

本フォーラムは、スポーツ庁が提唱している大学スポーツの改革～日本版NCAA設立に際して、全国の大学に対する改革戦略の理解促進と浸透を目的にして、スポーツ庁の担当官も招聘して、全国各地で巡回開催されています。

本学からは、インスティテューショナルオフィサーの池田敦司准教授が登壇し、大学の運動部活動のみならず、学生アスリートに対するサポートシステムや、地域におけるスポーツ健康増進活動、新たな事例報告を行いました。

また、フォーラムの後半では、大学スポーツ改革に向けて、スポーツ庁企画官、大体連理事等とともに意見交換を行うライブセッションも行いました。



本学の事例を発表する池田准教授

韓国伝統武道・警護・文化研修プログラムを実施しました

平成29年度海外留学交流支援制度で国際交流提携校の韓国・龍仁大学への研修プログラムが採択されたことにより、2月3日～14日までの日程で現代武道学科の学生5名が参加しました。

プログラムの主な内容は、韓国語、剣道、テコンドーそれに文化施設見学です。期間の初めは気温が最低で-16℃、日中でも-8℃と厳しい寒さの中、剣道やテコンドーの練習に参加し、学生寮では剣道部員や他のクラブの学生達と楽しい交流を行いました。

プログラムの期間中、お世話を頂いた鄭先生をはじめとする龍仁大学の先生方、学生の皆様さらに、本学「韓国伝統武道」担当の金先生（光州大学）に感謝を申し上げます。

（報告：現代武道学科長 教授 斎藤浩二）



龍仁大学校からの短期留学生在本学で学ぶ ～最終日にはフェアウェルパーティーを開催～

1月15日（月）～2月2日（金）の間、龍仁大学校（韓国）から6名の留学生在本学で日本語の習得等のプログラムを行いました。

最終日にはフェアウェルパーティーが開催され、留学生は、研修のまとめとして留学期間中に学んだことや茶道・剣道など体験したことを一人ひとり日本語で発表しました。また、発表後には留学生全員で日本語の歌を披露するなど、楽しいひと時を過ごしました。

（報告：国際交流センター）



フェアウェルパーティー後の記念写真

ゴンザガ大学視察報告

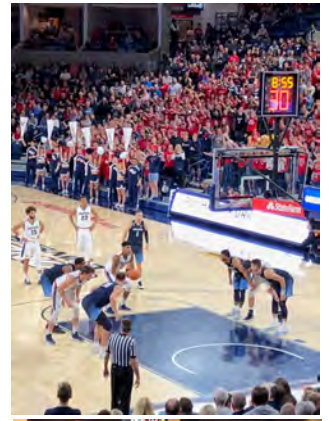


2月1日～5日に、ワシントン州スポケーンにある、ゴンザガ大学を訪問しました。ゴンザガ大学はカトリック系の大学で、アメリカ国内の大学ランキングでも常に上位に位置している名門大学です。さらに、スポーツ強豪校としてもその名を知られていて、中でもバスケットボールチームは実力もあり、NBA選手やWNBA選手を多く輩出しています。そのゴンザガ大学男子バスケットボール部に、明成高校出身の八村塁選手が在籍しています。今回は、八村選手の近況視察に加え、学長や副学長などへの挨拶、また新しく建てられた施設の見学などを行ってきました。朴澤理事長・学事顧問、マーティ・キーナート上級研究アドバイザー、事務職員のマイケル・マンキンさんと助教の菅野で訪問して来ました。

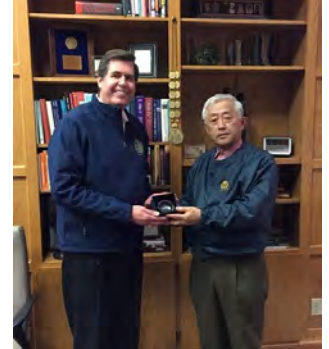
初日は、学長への挨拶を終え、八村選手の試合観戦を行いました。大学施設内にあるアリーナで、約6,000人収容できる体育館がほぼ満席に近い状態でした。学生に加え地域の老若男女が一斉に集まり、一種のお祭りの様な雰囲気でした。日本の大学では、あまり見ない光景だったため驚きました。八村選手は、前半の途中から試合に出場していました。高校の時より体格が良くなり、怯むことなく戦っていましたが、八村選手はこの試合、なかなか思うようなプレイができていないように見えました。

翌日は、筆頭学長補佐にお会いし、大学パンフレットを基に色々な説明をしていただきました。その後、アスリートの日常的な指導や授業の管理を行っている部署に訪問し、八村選手担当の2名の女性の方に一週間の予定や八村選手の生活態度などを伺いました。単位などは問題なく取得し、学業も順調なようです。英語力も身に付き、授業の話の7割から8割程度理解できるようになったということです。運動部を管理するAthletic Departmentの新しい施設の案内もしてもらいました。建物は数日前に完成し、未だ内装の装飾途中でしたが、体育館やファン専用ラウンジがあり、とても素晴らしい施設でした。

午後からは、練習風景の見学をし、その後八村選手と合流しました。だいぶ生活にも慣れ、バスケットボール選手としての自分の課題や、求められていることなどが分かってきたそうです。楽しそうに大学生活の話をしていました。しかり、やはり前日の試合は納得がいく内容ではなかったようです。翌日に期待し、その日は別れました。



最終日は、4年間ホームゲームで勝利していない、ユタ州のBrigham Young大学との試合でした。リードしては追いつかれ、一進一退の試合でした。交代で八村選手がコートに立つと、ファールをもらいながらシュートを決めたり、リバウンドに絡んでボールを奪ったりと大活躍でした。相手チームのセンターでエースの選手もしっかりマークし、いい流れを呼び込んでいました。試合は、68-60でゴンザガ大学が勝利しました。4年ぶりにホームで勝利を掴んだ試合で、八村選手はチーム最多得点の15点を決めていました。翌日の新聞には、八村選手の記事や写真がたくさん載っていました。



ゴンザガ大学男子バスケットボール部は、私たちが訪問時はWest Coast Conference (WCC) で11勝1敗での二位につけていましたが、帰国後の試合では、1敗しているSaint Mary'sにも勝利しているため、WCC 6年連続制覇の可能性もあります。今後もゴンザガ大学男子バスケットボール部八村選手の活躍が期待されます。

今回の視察を終え、大学側の学生に対するサポートの充実、町と大学の連携など、たくさんのことを体感し、学ぶことができました。“日本ではあまり見ない光景”と先に書きましたが、“仙台大学らしく”取り入れられることもあると感じ、日本版NCAA構築への示唆を得ることができました。今回、素晴らしい経験をさせていただいたことに感謝しつつ、今回の経験を今後の仙台大学の発展と、監督を務めている女子バスケットボール部強化に活かしたいと思います。

(報告：助教 菅野恵子)



Monthly Report

SENDAI UNIV.
PUBLIC RELATIONS

Vol.143 / 2018 MAR
(月1回発行)

株式会社楽天野球団とアカデミックパートナーシップを締結



協定書締結式に参加した朴澤理事長・学事顧問と楽天野球団立花陽三社長（右から2人目）ら

3月15日（木）本学LC棟1階において、学校法人朴沢学園仙台大学は、東北楽天ゴールデンイーグルスの運営会社である株式会社楽天野球団と「アカデミック・パートナーシップ」を締結しました。

この取り組みは、双方の人的・物的・知的資源の活発な交流と活用を図り、もって地域活性化への貢献とスポーツ振興に寄与するとともに、相互により一層の充実と発展を遂げることを目的としています。

平成30年度の具体的プログラムは、各々の専門コースで学んでいる学生が、その学修成果の実践研究を行うことを目的にプロスポーツの現場を体験したり、プロスポーツの現場で実際に活躍されている球団の専門家が大学の教壇に立ち、自らの経験とノウハウを学生に伝授したりと、仙台大学の人材や施設など有形無形の資産をプロ野球球団が活用することが予定され、将来に向けて相互資産の相互活用に取り組んでいくこととなります。

本学では在仙のプロスポーツチームとのアカデミックパートナーシップの締結により学生の学修環境の充実に努めており、今回の締結はBリーグ 仙台89ERSとの締結に次ぎ2例目となります。

〈目次〉

株式会社 楽天野球団とアカデミックパートナーシップを締結	1
第48回 仙台大学体育学部卒業証書学位記授与式並びに第19回大学院学位記授与式を挙行	2
2018 平昌オリンピック男子スケルトン競技OB高橋弘篤選手と宮嶋克幸選手が学長を表敬訪問	3
平成29年度 陸上競技部(投てきブロック)春季強化合宿 台湾台東大学附属高等学校で今年も実施	
平成29年度 健康づくり運動サポーター認定証書授与式を開催	4
佐々木琢磨新助手が 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会会長表彰で会長賞、第1回JDAAアワード特別賞を受賞	
H29年度 日米スポーツ科学事情比較セミナー 国際交流締結校 カリフォルニア州立大学ロングビーチ校研修	5
ハワイ州立大学マノア校 アスレティックトレーナービギナー研修	6
中国瀋陽師範大学短期研修と両大学協定10周年記念イベントへ参加	7
阿部芳吉学長を送る夕べを開催	8

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224 - 55 - 1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp

第48回 仙台大学体育学部卒業証書学位記授与式並びに第19回大学院学位記授与式」を挙行



3月17日（土）、本学第五体育館を会場に「第48回体育学部卒業証書学位記授与式並びに第19回大学院学位記授与式」が挙行されました。

今年度は体育学部549名（うち、国際交流締結大学である台東大学（台湾）とのダブルディグリー制1名）の卒業生と大学院21名の修了生が社会に巣立ちました。

阿部芳吉学長は学長告辞で「仙台大学で学ばれたことを社会活かし、それぞれの未来に向け活躍を期待しています。」と卒業生と修了生へ向けはなむけの言葉を送りました。

朴澤泰治理事長・学事顧問は「今日卒業を迎えられる皆さんは開学50周年という大きな節目

の時に社会へ巣立たれます。2020東京オリンピックを控え特に『支えるスポーツ』の機能の重要性に対する認識が高まっています。体育スポーツ・健康科学分野の学問を修めここに集っているみなさん全員が仙台大学での経験を活かし社会を担って頂くことを期待しています」と挨拶されました。

卒業生を代表し健康福祉学科の松崎朋香さんは「卒業生を代表し、私たちを支えてくれたすべての方々に心より御礼申し上げます。」と答辞を述べました。

式中には学生表彰式も行われ、平昌オリンピックスケルトン競技に出場した宮嶋克幸さんが学長賞を受賞したほか、スポーツや文化活動などにおいて優秀な成績を修めた学生に、スポーツ功労賞、文化功労賞、日本介護福祉士養成施設協会会長賞、全国栄養士養成施設協会会長賞、JPSU認定スポーツトレーナー資格取得者表彰、同窓会賞などが授与されました。



大学院修了生集合写真



JPSU認定スポーツトレーナー資格取得者



阪神ドラフト1位入団馬場卓輔投手も卒業式へ参加

2018 平昌オリンピック男子スケルトン競技出場 OB高橋弘篤選手と宮嶋克幸選手が学長を表敬訪問



写真左から高橋弘篤選手、阿部芳吉学長、宮嶋克幸選手

3月22日（木）平昌オリンピック男子スケルトン競技に出場した、本学OBの高橋弘篤選手（平成19年体育学科卒）と宮嶋克幸選手が（H30年3月卒業）学長を表敬訪問しました。大会を振り返りソチ五輪で12位だった高橋弘篤選手は「学長先生には現地まで応援に駆けつけていただきありがとうございました。今大会は22位で悔しい結果となりこのまま終われない気持ちです」と話し、五輪初出場で26位の宮嶋克幸選手は「子どもの頃からの夢だったオリンピックの舞台は最高の舞台でした。2022年の北京五輪に向けて努力を重ねていきます」と話しました。

平成29年度 陸上競技部（投てきブロック）春季強化合宿 台湾台東大学附属高等学校で今年も実施



3月1日（木）から8日（木）まで陸上競技部（投てきブロック）春季強化合宿を台湾台東大学附属高校で実施しました。本合宿は昨年に引き続き2回目の実施となり、今回は19名の学生が参加しました。昨年は天候があまり良くなく、雨の日が多かったのですが、今回は連日晴天で気温も30度を超える日もあり、大変恵まれた状況でトレーニングを積むことができました。昨年の経験があるため、移動、食事、宿舎等さまざまな面で見通しを持って取り組み、よりトレーニングに集中することのできる合宿となったと思います。冬期トレーニングのまとめとして、温暖な気候下で連日投げ込みを行い、良い感触を得ることのできた学生がほとんどで、4月からのシーズンインに向けて良い準備ができました。

また、国際交流として、昨年同様、台東大学附属体育学校の陸上競技部の中・高校生との合同トレーニングを実施し、昨年は記念としてTシャツをいただいていたので、今回は仙台大学50周年記念Tシャツをお土産として持参し、トレーニング終了後部員全員にプレゼントすることができました。本学の学生も言葉が通じないけれども、積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が見られ貴重な経験となりました。

今回も昨年同様、台東大学の沓教授、附属高校の林校長先生をはじめとする数多くの方々にご支援をいただきました。感謝申し上げます。この恵まれた環境下での合宿が4月からのシーズンにおいて良い結果に結びつくよう、今後も学生とともに目標に向かって、日々取り組んでいきたいと思っております。

（報告：陸上競技部コーチ 講師 宮崎 利勝）



「平成29年度 健康づくり運動サポーター認定証書授与式」を開催



平成30年3月16日（金）に健康づくり運動サポーター（以下、健サポ）の認定証書授与式を開催しました。今回は平成29年度前期及び後期の資格認定評価会で認定された初級20名、中級6名、上級5名の計31名に対して認定証書が授与されました。今回の認定者を含めこれまで延べ550名が本資格を取得してきました。

今回、上級を取得した加藤瑞稀さん（健康福祉学科3年）は「上級実習を行うにあたり、学生や教職員、地域の役員の方々など多くの協力や支援がありました。私は将来、特別支援の教員になりたいと思っているため、今回の経験を今後の目標につなげていきたいです。」とコメントしました。

また今年度は、留学生の資格取得者も多く、台湾・台東大学出身の林姿婷さんは「中級の資格取得に向けて頑張ります」と今後の抱負を述べました。

この資格取得には、地域の健康教室での現場実習や指導実習が必要となります。実際に地域の方々に関わりながら、学生はコミュニケーション力や指導力、ホスピタリティを身に付けます。地域の方々には、健康教室への参加や学生との交流が、生きがいや楽しみのきっかけにもなっています。

多くの学生がこの活動を経験し、「安全に」「元気よく」「楽しい」運動指導のできる実践力を身に付け活躍できるよう今後も尽力していきます。

（報告：スポーツ健康科学研究実践機構 新助手 松浦理沙）



佐々木琢磨新助手が 公益財団法人日本障がい者スポーツ会長表彰で会長賞、第1回JDAAアワード特別賞を受賞



トルコサムスン夏季デフリンピック陸上競技4×100mRでアンカーを務め、日本初の金メダルを獲得した、佐々木琢磨新助手（本学健康福祉学科卒）が2月22日に公益財団法人日本障がい者スポーツ会長表彰で会長賞を受賞しました。

2月24日にはパシフィコ横浜において行われた第1回JDAAアワード特別賞も受賞し、ファン投票の獲得数1位ということで「ファン賞」も併せて受賞しました。

佐々木琢磨新助手は「大変名誉な賞を受賞し身の引き締まる思いです。今後も日本だけでなく世界からも愛される存在となるよう努力していきます。私も含め一人でも多くの聴覚障害をもつアスリートを知っていただき応援していただけたらと願っています。これからも感謝を忘れずに、仙台大学陸上競技部の先生方の指導を仰ぎながら、素直な気持ちで日々精進していきたい」と手話と筆談で話してくれました。

平成29年度 日米スポーツ科学事情比較セミナー 国際交流締結校 カリフォルニア州立大学ロングビーチ校研修



2週間のプログラムを終了し、修了式にて

2018年2月18日～3月4日にかけて、学生7名、教職員4名がカリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）で実施された「H29年度日米スポーツ科学事情比較セミナー」へ参加するため渡米しました。参加学生は体育学科より永野晃太郎（3年）、柏木一心（2年）、阿部進之介（2年）、佐々木連（2年）、鈴木瑛（2年）、健康福祉学科より土岐康志郎（2年）、運動栄養学科から高橋早苗（2年）、引率者は前半の1週目に桑原康平講師、2週目に池田敦司准教授、途中の2月21日～24日までマイケル・マンキン担当課長が合流し、全日程を弓田恵里香が引率しました。滞在中は最低気温が5度前後、最高気温も15度前後と、これまでで最も寒い2週間となりましたが日本では見られないような濃い青空は例年通りで、カリフォルニアらしい日差しを感じ充実した研修となりました。

今年は本学の研修をCSULBで実施するようになり、10年目という節目の年でした。これまで少しずつ要望を出したり先方からの提案をいただいたりしながら、研修内容は非常に質の高いものへと変化してきていると感じます。プログラムのベースには「スポーツ栄養」と「スポーツビジネス」がありますが、いまでは「コーチング」や「フィットネス」に関する講義も組み込まれています。基本的には、毎年参加する学生の興味関心を個人面談で事前に確認したうえで、それらを先方へ伝え研修内容を組み立ててもらおうようにしています。よって、学生は現地入りする前から具体的な問題意識や学習意欲を持ち、研修に臨んでいると思われます。今回は積極的に質問する姿や頑張って英語でコミュニケーションを取るなどの意識や姿勢が垣間見える場面が幾度かありました。

過去のプログラムと大きく違った点は、これまでの講義・施設見学・スポーツ観戦に加え、滞在中に大学のスポーツ施設を実際に利用できたことと、現地学生によって企画された交流時間が設けられたことでした。CSULBには、24時間利用できる立派な学生専用のスポーツ施設があります。トレーニング

マシンはもちろん、屋外プール、ビーチバレーコート、バスケットボールコート3面、屋内ランニングトラック、ボルダリングウォールなどが設置されています。例年はこの施設を一部見学する程度でしたが、今回は午前中を使って実際に利用することができました。その中で、現地学生の大学生活やライフスタイルを感じ取れたのではないのでしょうか。

交流の時間では、スポーツ心理学を専攻する大学院生20名ほどが参加し、本学の学生とアイスブレイクゲームやサッカーを楽しみました。

ランチに

は、南カリフォルニア地域で有名なIn-n-Out（ハンバーガーショップ）のハンバーガーとフライドポテトを準備

してくれており最後にはプレゼントまでいただきました。本学の学生は知っている英単語を並べ、また、ジェスチャーを使いながら楽しそうにコミュニケーションをとっていました。アイスブレイクゲームではもちろん、スポーツという共通の「言語」を通じ新たな友情が芽生えたのは間違いありません。



現地学生とサッカーを楽しんだ後の1枚



今では、Facebookやインスタグラムがあるため、今後も気軽に連絡を取り合うことができると思われます。

今回も、多くの方々のおかげで大変充実した研修となり、感謝いたします。CSULBとの関係もさらに強化することができ、今後も様々な形で国際交流が進むことを願っています。

（報告：講師 弓田恵里香）

ハワイ州立大学マノア校 アスレティックトレーナービギナー研修



今年で15年目、通算26回目となるハワイアスレティックトレーナービギナー研修が、2月19日～27日の日程で実施されアスレティックトレーナー部のみならず、様々な部からも9名が参加しました。引率は山口准教授、荒牧講師、佐藤広報室長、新助手鈴木のぞみの4名が参加しました。

今年1月にハワイ大学Kinesiology and Rehabilitation Science (KRS) 元学科長であるDr.ムラタが教育学部・学部長に就任し、KRSの学科長にDr.クリス・スティックリーが就任しました。オープニングセレモニーでDr.ムラタ学部長からは、昨年11月に開催されたIFEでの仙台大学からのおもてなしに対し、心から感謝したいとのお言葉をいただきました。Dr.スティックリーからは、「仙台大学は我々にとって特別な存在であり、今後も友好的な関係を築いていきたい」とご挨拶いただきました。

参加学生はハワイ大学内学生寮に宿泊しましたが、本学OBで元アスレティックトレーナー部の村上泰司くんが同寮に滞在中で、交流することもできました。村上くんは現在ハワイ大学大学院への進学準備中で、英語のクラス中心に入学に必要な科目を履修中です。睡眠を惜しみながら懸命に課題に取り組み、アスレティックトレーニンググループでのボランティアも並行して行い、大変そうな様子でしたが「とても充実している」とのことでした。参加学生らは、そのような先輩の姿を間近で見ると刺激を受けたと話していました。

本研修で参加学生らが最も苦勞するのは英語でのコミュニケーションです。今回も、現地学生らと英語で他己紹介や交流を行い、現



地授業への参加、アスレティックトレーニンググループ見学、クロージングセレモニーでのスピーチなど、英語を使用する機会がたくさんありました。事前研修で簡単なシチュエーション別の英会話は練習しましたが、現地に入るとそれだけではとても足りない様子でした。積極的に話そうとした学生も、そうなれなかった学生も、研修終了後口々に「英語は苦手だったが今はもっと英語を話せるようになりたい」「自分の世界を広げたい」と学習意欲を高めていました。大学側としてこのような学生らの意欲をサポートできるよう、日常的に英語に触れる機会を増やしていく取り組みが必要かと思えます。

ビギナー研修では、英語の必要性を認識しその後の学習に繋げられる事と、アメリカと日本でスポーツを取り巻く環境の違いを学べる事が大きな魅力であると思えます。広大なスポーツ施設、学業サポート、医科学的サポート、奨学金、大学スポーツファンの多さ、大規模なキャンパスなど、現地は多くの刺激に溢れています。来年度もより多くの学生に、この研修を体験してもらい、自分たちの可能性を発見してくれることを願っています。ハワイ研修はアドバンスもありますので、そちらに参加を希望する学生には英語教育の強化と、確かな目的を持って参加する事を促し、より良い経験を積んでもらえるよう尽力していきたいです。

(報告：新助手 鈴木のぞみ)



教育学部・学部長に就任したDr.ムラタ学部長のオフィスで



中国 瀋陽師範大学短期研修と両大学協定10周年記念イベントへ参加



3月10～20日の間、郡山孝幸教授、馬佳濛准教授が本学3名の学生を引率して瀋陽師範大学で短期研修を行いました。

本プログラムは平成29年度JASOO奨学金に採択され実施したものです。これまでと同様に瀋陽師範大学国際教育学院および体育科学学院より熱烈な歓迎を受け、大変充実したプログラムを用意して頂きました。プログラムは武術と中国語がメインで、武術の受講ほかプロ選手の武術パフォーマンスも鑑賞しました。また中国京劇体験、中国伝統楽器鑑賞のほか、今回新たに取組みました実技の民族スポーツ



「珍珠球」授業や中国伝統手芸泥人形体験、日本語学科の学生との交流会を通じ中国文化を深く知ることができました。さらに、日本・タイ・モンゴル・中国4カ国の運動会も用意

され楽しい競争の中、他の国から来る留学生とも交流を深めることができ3名の学生にとって収穫多き充実した研修となりました。松浦充孝さん（現代武道学科3年）は瀋陽師範大学に来るのが今回2回目（1回目は海外武道実習に参加）異なった体験もできたようです。武術授業では王強先生から散打、長拳、通腕拳、刀術などを教わり中国武術について理解を深めました。授業後、磯崎彩喜子さん（現代武道学科2年）は「先生がきめ細かな指導をして頂き中国武術に興味を持ち今後も深く学びたいと思います」と語った。中国語の授業も初級ながら一生懸命学び、閉講式の際には3人とも中国語で研修感想を発表し先生方からの高評価を得ました。研修終了後に安倍大晟さん（現代武道学科2年）が「今回の研修では良い経験ができました。瀋陽師範大学の先生方や学生のみなさんがとても親切で楽しく過ごすことができました。機会があればまた戻って勉強した

いです」と熱く語りました。

本学卒業生で、現在中国国費留学をしている橋本太輔さんは何事も積極的に取り組み、現地の教職員からの絶大な信頼を受けており、今回は流暢な中国語でサポートに加わってくれました。

今年は、瀋陽師範大学と仙台大学が協定を締結し10周年の節目を迎えます。瀋陽師範大学では、このことをとても重要視しており、記念Tシャツも作られ今回の参加者全員に配られました。記念イベントとしては今回の短期研修がキックオフとなり、今後は6月に短期研修で瀋陽師範大学体育学院の10名程度の学生が来学、9月には海外武道実習の実施で瀋陽師範大学を訪問することが予定されており、その際に例年行われる全大学運動会にゲスト「仙台大学チーム」として参加することが企画されています。この他、健康増進の分野において、両大学で「幼児」および「成人」の2つの共同研究プロジェクトの実施が合意されてます。「幼児」については、今回測定対象となる瀋陽市皇姑区実験幼稚園を見学するとともに測定説明会を行い、4月から身体活動量の測定が開始される予定です。仙台大学においては「幼児」は南三陸町や福島県国見町、「成人」についてはリコージャパンでそれぞれ身体活動量の測定を実施しており、いずれのプロジェクトも縦断的研究を計画し、さらに部活動の交流や学術講演会なども視野に入れた計画が進められています。

瀋陽師範大学では、国際交流締結から10周年という節目に際し今後両大学の関係について、より幅広く、深い交流を展開しようとしており、真の国際交流を求め学生教育に尽力してこられた瀋陽師範大学の先生方に改めて感謝の意を表します。

（報告：准教授 馬佳濛）



阿部学長 を送る夕べを開催



平成30年3月31日をもって勇退された「阿部芳吉学長を送る夕べ」がホテル原田inさくらにおいて3月27日に開催されました。

発起人を代表して鈴木省三副学長が開会の挨拶をし、これまで仙台大学の発展のために尽力された阿部芳吉学長のご功績などが紹介されました。その後朴澤理事長・学事顧問からの祝辞で、阿部学長が大学に着任する前のエピソードが紹介され、改めて固い絆を感じることができました。

また、親睦会早川幹事長からは親睦会を代表し記念品が贈呈され菅野恵子助教からも花束が贈呈されました。締めのご挨拶として井上教授からは学生募集での思い出話などが語られました。

当日は100名を超える仙台大学の教職員が集まり阿部学長を囲む輪は、会の終了まで絶え間なく続きそれぞれが思い出話に花を咲かせました。

最後に教職員が互いに手を取りアーチをつくって和やかな雰囲気でお見送りしました。

